
クロスウェポン

氷冷 飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスウェポン

【Zコード】

N7437M

【作者名】

氷冷 飛鳥

【あらすじ】

この世界との平行世界となつてゐる世界クロスワールド。

そこでは冒険者が魔物を退治し、世界の中心にある最強の武器・聖^{ロス}武器を目指す。

しかし、あまりにも冒険者が弱いということで王は冒険者育成学校を設立。

そこで剣士、戦士、召喚士、魔術師、弓使い、武闘家のどれかの職業になるためのコースが設置されている。

飛鳥はあることが理由で剣士科から魔術科に転入した。

これは飛鳥の成長をみるストーリーである（?）

新たな始まり

「うう…緊張するよ。お。」

ぼくは魔術科四年の教室の前に立っていた。

ぼくはグラント冒険者学校の剣士科から魔術科に転入しようとしていた。

「えへ、では入りなさい。」

その言葉でぼくは扉を開けた。
そこに広がる光景は…

「……みんながぼくを見ている…。」

みんながこちらを見て、恥ずかしかった。
そんな中から

「やつほへ、飛鳥つちへ！」

とこの声が聞こえてきたので辺りを見回すと、案の定そこにはいてくれた。

「鈴さん！」

ぼくが一年の時の野外実習で一緒の班になつた鈴さんだった。

誤解しないと思うが、鈴さんは一応ぼくと同じ年である。

ただ、その実習の時に無能なぼくをサポートしてくれたからその呼び方が定着してしまつたのだ。

しかしその前からも「鈴さん」と呼んでいたのだが……。

「剣士科はどうしたの?」

「あ、剣士科をやめてこひらに来たんです。」

「ふーん、どうして?」

「剣士科は…あまりよくは向いていなかつたようですから…。」「そりなんだ。まあそんな」と仮にせずに楽しめてしまつてしまは

ないか!」

「はー!…」

「やうこえま…」

「おこー!」

鈴さんが話を進めようとすると、先生が制止してきた。

「まだ自己紹介をしてないだろ…。」

……すつかり忘れてしまった。

新たな始まり（後書き）

何かいい職業があつたら、提案しても結構です。
登場人物紹介は次回します。

キャラ紹介（+他）

飛鳥 魔術科四年

僕ツ子。以前剣士科に所属していたが、剣士スキルを全て覚えてしまい（普通卒業まで最大七割程度）、覚えることが無くなつたため魔術科に転入した。このことは内緒にしているつもりだが、ほとんどの生徒が知つていてる。

鈴

のんきな人。飛鳥とは二年の実習で一緒の班だつたことから知り合う。飛鳥の転入の理由は知つていたが、彼女が話したくないためどうでもいいと考えている。因みに「飛鳥つちは私の嫁!!!」と言つてている。

グランズ冒険者学校

冒険者育成学校。コースは剣士、戦士、魔術師、弓使い、召喚士、武闘家がある。

間違いやすうなので説明するが、この世界では剣士は剣を武器に使い、戦士は槍や斧を使って戦うものである。

11歳から入ることができて、一年から八年まである。

私

自己紹介の時、ぼくを見る目が完全に「ここに人が噂の……」と言っていたようだった。

鈴さんだけはすごいキラキラした目で「こっちを見ていの……。なぜか悪寒がした。

「飛鳥つちー。」

休み時間になつた途端、鈴さんが抱きついてきた。しきりに頬をすりあわせてくる。

「飛鳥つちー」の科に入ったばかりだけど何か呪文の一つは覚えた?

「あ、意外に普通の質問……。」

「ん? 何か言つた?」

「あ……、いえ、何でもないです。呪文は下級魔術なら全ての詠唱は覚えましたけど、実際に使えるのは5個程度で、しかも下級魔術の中の下級の魔術なんですけど……。中級魔術などは下級魔術を完全に覚えてから覚えようかと……。」

「ほー、飛鳥つちす」ついさすがは剣士スキルを全部覚えた超人。

……あ

鈴さんはしまつたと言ひよくな顔をした。

「……? 知つていたんですね?」

「ま、まあみんなが噂していたしね。」

「なんでそんなに慌てたんですか? ぼくそんなに気にしていないですけど……。」

「えつ、やつなの？ やつを聞いたとき嫌そうだつたかい。」

鈴さんは焦つて謝罪をしてきたがやつぱつぱくにはなぜやつするかわからなかつた。

「あれはただ説明が面倒になるからあとで話やつかと思つたんです。氣を使わせたのならすみません、謝ります。」

「うん、わかつた。飛鳥つちは優しいね。」

鈴さんはこちらに笑いかけてきた。

こつ見ると鈴さんもかわいいな…。

なんて思つてゐる…

「席につけと言つてゐるのがわからんか…！」

先生の声が聞こえた。

ぼく達は結構な時間話していたみたいだ。

「今日は武闘家科との合回実習にする。」

武闘家科…、あの人気がぼくと同じで剣士科から転入したところか…。

あの人にとっては目障りなだけだと思つけど元気にしてゐるかな？

「あ、そうだ。飛鳥つち、しゃべり方と一人称変えてみない？ なんかそれじゃあ堅苦しくて少し嫌なんだ。」

実習のための準備をしていると鈴さんが提案してきた。

僕ツ子も少しは需要があると思つんだけどな…。

「別に鈴さんがそういうなりやつてみますけど…。」

「『鈴さん』って呼び方もやめてほしけな。私たち友達でしょ?」「確かにやつですけど…。」

「ならいこじやんー過去のことなんか忘れてさ」

なんか今語尾に星があつたよつた。

「で、どんなしゃべり方でどんな一人称にすれば?」

「ん~、友達としゃべつているみたいにしていればいいよ。一人称は私くらいが普通だね。」

そんなことを言われても簡単にできるはずがない。
一応鈴さんの頼みだから仕方ないよね。

「ま、まあやつてみます。」「だ~か~ら~、変えてつて言つてい
るじやん!」

鈴さんがすごい怒つてる。
ゲーム(ーー?)はもう始まつていたらし。

「すみ…じ、ごめん。難しいです、じゃなくて難しいよ…。」

「いいよ、だんだん慣れさせていけばいいんだから」「

「けど、間違えたら鈴さん怒るし……。」

「……」

鈴さんが無言(ー)…………しまつたーまづこー!

「あははは、少し注意するだけだよ。やつぱり飛鳥つちはかわいい
な~。」

鈴さんが笑っているが、ぼく、私は全く意味がわからなかつた。

私（後書き）

新キャラは出でたら詳細説明します。

国語力がない作者ですが、応援お願いします！（遅っ！）

武闘家科の少年

実習は先生の立ち会いの下本当のダンジョンで行われる。ぼ…わ、私にはそれが一番苦になる時間だと思います…。父さん、母さん、今…逝くよ…。

「何遠くを見ながらロープを持つていろの〜。死んじゃだめだよ〜。

」

ハツ…！

鈴さ…鈴の声で正気に戻る。

といつよりナレーションでも一人称と呼び方を変えなければならぬのですか？

「なにブツブツ言つてゐるの？遅れるよ〜。」

鈴さん、一応あなたが原因ですよ。

時間内になんとか目的地に着き、全員集合となつた。どうやら私と…私たちが最後だつたみたいだ。

「今回の実習は一班三人になつてもいい。……それでは班を作つてくれ。」

その言葉で多くの人が動き出す。
早くメンバーを見つけないといい人がいなくなつてしまつ。

「飛鳥つち、一緒にやるよね？」

「もちろんです……あ、もちろん！」

「ふふつ、あと一人どうする？」

「あと一人はあてがあるから まつてて。」

「ほーい！」

100!

私は〇と呼ばれた少年に声をかける。
〇の〇という人は本名で呼ばれたくないらしく、呼ばれ方を聞いたとき、「なら〇と呼べ」と言われたからそう呼んでいる。

「飛鳥か？」

「な、なに？ 私じゃ不満でした、じゃなくて不満だった？」
「なんだよ、そのしゃべり方。」

「ま、魔術科の鈴という人が『話し方変えて』と言つたから今頑張

つているんですね。」

「フン、お前にはそういうじやれあいがお似合いだな。」

「なんかそう言わるとムカつくなら、せ……のは私の前のしゃべり方の方が良かつた?」

：ぼく何言つてゐるの？

「正直、あのしゃべり方は聞いててイライラしていた。」

無表情で言われて少しムカつく。

「まあよかつたんじゃないか？普通の女子みたいだし、お前なんか
氣を使つていいみたいだつたし。」

「な……何に氣を使つていいつていうの？」

「さあな、そんなお前が氣にしなくていい。といつよりお前、俺
に用があつたんじやないのか？」

あ、〇に話をそらされたから忘れてた。

「もうだ！私と鈴さんと同じ班になつてほしの！」

「お前ど？ふん、いいだろ？せいぜい足を引っ張るなよ。」

「うひて、〇が仲間になつた。けび上から田線がすじにムカつく！」

「へえ～、飛鳥つち剣士科の元一位と友達だつたんだ～。」

「た、ただ席がずっと隣だつただけで……。」

「飛鳥、お前はいろいろの首席と仲良くなるよつだな。」

急に〇が話に割り込んできた。

しかし一応は事実で鈴は魔術科の首席であり、毎回剣士科首席の〇
と鬭つていたということだつた。

私はその二人とは真逆で剣士科最下位だつた。

「鈴！お前は少し間違つている……つは俺の友達ではない！ただ
の知り合いだ！」

なぜそこにキレる……。

私は友達ではなく知り合いと言わされてショックだった。

「なに泣いてるんだ飛鳥。」

「な泣いてないですよー！」

目元を触ると涙が出ていることに気がついた。

「では、開始！」

そんなこんなで実習スタート。

実習の内容はダンジョンを通り抜け、グランズの隣街のヒラブルまで行き、そこでの役所で文をもらいグランズに帰つてくるといつものだった。

「およ？ 飛鳥つちとーは剣ですか。」

「剣は使い慣れているし、魔術はこれでもできるから。」

「そういうことだ。だから俺と飛鳥は前衛だな。」

「鈴は回復魔術が使えますか？」

「まあ、下級魔術の『ホーリー』くらいかな？だから道具を大量に買つたほうがいいかな。」

「そうですね。」

「フン、使いすぎなるなよ。」

〇はそう言つとすぐに道具屋に向かつていた。

「わ、私は剣士科の時の私とは違うんですからーーー。」

それについて行く私と鈴。

武闘家科の少年（後書き）

0

元剣士科の首席。

飛鳥とは一年の時から席が隣だった。

本名は話したくないらしいためわたくしも個人情報のため教えません。

一応「私」が一話でこれが一話だと考えてください。

友達に言つたら「『新たな始まり』が一話かと…」（内容は事実と少し異なります）と言われたので書きました。

「道具がもつほとんどないだと…？」

珍しく〇が驚いている。

無理もない、現在この道具屋に売れる道具が実習生が買い占めていきほとんどないらしいからだ。

「次の入荷はいつなの？」

鈴も参加している。

私は…ワインドウショッピングを…。

「は、早くても明日じゃよ。ルスピカまで向かわなければいけぬからね。」

道具屋の店主であるおじいさんが気圧されている。

ちなみにルスピカはヒラブルから北に向かつた街である。

「…回復道具を有るだけじゃないか？」

「あるのはヒールカプセルが2個にチャージカプセルが1個じゃ。」「これだけで乗り切るのか…。難しいかもね。」

いつになく鈴が真剣な表情をしている。

「それだけを貰おう。あとそこのワインドウショッピングしている奴にその剣を買つてやつてくれ。」

〇が突然じゅうらを指差して言った。

「ちょっと待つて下さい。私買えるだけのお金持つてないよ。」

「安心しろ、俺の奢りだ。貸し一つだからな。」

「いつもは厳しく冷たい。」が優しい。

やっぱり同じ班だからかな。」

今は危機的状況だからなるべくダメージを少なくしたいからかな?」

「なにボケッとしている。早く来い。」

「わかった。」

：後者だろうな、きっと。

街の外へと続く門にたどり着いた。

そこには先生がいた。

「お前ら遅かつたな。お前らの班以外の班は全て出発したぞ。」

「くつ、ますいな。」

〇が悔しがっている。

なぜだろう。

「明日の夕方までに戻つてくるんだぞ。」

出発した。

〇が早足で進んでいく。

「 ～、どうしてそんなに早く歩くの～。」

あまりにも先に行きすぎているため私が止めようとした途で声をかけた。

「 お前ら遅いぞ。早く行かないと最初に戻つてこれないだろうが。これもお前らが鈍くせいだ。」

〇の目的が「一番最初にゴールする」ということはわかつたが、遅いのを私たちだけのせいにするのは納得いかない。少しぐらいは自分にも責任があるだろ？

「わかつたから、少しちも少しほペースを上げるからや、やつちも少しペースを落としてくれない？」

「ああ、いいだろ？。」

「ありがと、ぜろ。」

仕返しに少し呼び方を変えてやろうかと思つた。するとじぞうは顔を真つ赤にして顔をそらした。

「は、早く行くぞ。」

やつぱりかおかしい…。

ダンジョン・そこは魔物（人によつてはモンスターともいつ）が生息する場所。

しかし、その魔物もE級危険地区の魔物に比べたらかわいいものだ。それに苦戦する私たちもまだ半人前以下ということだろうか？

「飛鳥、そつちのウルフお願い！！」

いつもは「飛鳥つち」と呼んでいた鈴も真剣だ。

「わかりました！『焼ける！ フレア！』」

魔法陣が私の周りに現れ、そこから火の玉が発射される。やつぱりまだ威力が小さいらしく、あまり利いていないようだ。

「魔法に頼るな。『閃風刃』」

ゼロが剣を風のように振り下ろす。

「みんな、どいていて。『我に仇なす者、天雷によつて裁かれん
ヘヴンズライトニング！』」

空から白い雷が落ちる。

そして周りの魔物が一瞬によつて消滅する。

「ふつ、その魂、天に捧げよ」

あとは決め台詞で締める。

「どう？魔術を覚えていけばこんな呪文書にない呪文を考えれるし、こんな複合魔術を身につくよ」

「す」「いですね！私もそんなやつをやりたいです！」
「ならまずは剣士スキルからやってみるよ。」

「私があこがれにふけつこむと、ぜろが口を挟んできた。
口を挟むのは彼の趣味なのだからつか？」

「わかつてますよ。そつこえばさつきの閃風刃もオリジナルだよね
？」

「ああ、そうだ。あと敬語とタメ語が混じつて変だぞ…。」

「うるさいな。けど、今回ぜろがここに魔物の群れがいるのを知つ
ていながら『最短ルートだから仕方ないだろ』とか言つていなければこんなことには…。」

「だまれ…」

その威圧感で何も言えなくなつてしまつた。

「とにかくせ、あんな魔物邪魔だから倒していけばいいんだよ。簡
單なこことじやん。」

「だな。」

「…倒していたら逆に時間くこません？」

実験スタート（後書き）

あれ、なんで飛鳥が魔術を？
剣士スキルでカツコよくキメさせるはずだったのに…。
(^ < :)

森を歩いている私たちは暇なので鈴さん、鈴の複合魔術の話を聞いていた。

「それでね、魔術と魔術を組み合わせるってすごい難しいんだよ。魔術一つ一つにある術式をうまく合せないと爆発したりするんだから。詠唱もちゃんとそれに合つたやつじゃないといけないし。」「詠唱も魔術の発動に関係があるのか？」

ゼロが質問する。やはり魔術を組み合わせるひとつに興味あるのだろうか。

「一応ね。けどだいたい合つていれば適当な詠唱でいいんだよ。」「鈴さん、オリジナルな魔術は？」
「うーん、それは術式を一から作つてやるからね。私はそんな面倒なことはしないから。」「そうなんだ。」「やはり魔術の複合は剣士スキルや武闘家スキルとは違うようだな。」「だね。鈴、私も複合魔術をやれるようにしたいです。」「簡単だよ。別に下級魔術を組み合わせるだけででも出来るから」とした。

その間にもひやんと歩っこいる。
ゼロが

「止まつてこるのは時間の無駄だ。それに術式を組み合わせるくら

いなら歩いていてもできるだろ？からな。」

と言っていたからである。

術式を考え始めてから一十分弱、ようやく術式の組み合わせが完成了。

完成したといつてもまだ発動するかわからない。

「いきます！」水よ、火に温められよ。火よ、水に冷まれよ。
水よ、周りを焼き尽くせ。火よ、周りを飲み込め。火と水、
これらを交わらせん。

「一つの自然その一（ダブルアース・ワン）！…』

その呪文から放たれた魔術は私たちの周りの草木を吹き飛ばした。

「…」
「……？」
「……！」

三人で啞然としていた。

「す……す……いよ飛鳥つち！下級魔術の組み合わせだけでこんな上級魔術以上の威力が出せるなんて！…やっぱり飛鳥つちは天才だよ」。

鈴が抱きついてきた。

「おい、一つ質問なんだが…」

「はい、何でしょ？」「

「なぜ元が下級魔術だと知つていながらあんな長い詠唱を言つた？完全に上級魔術並みの詠唱時間じゃないか。」

「え？…、さあ？」

わからなかつた。

半分適当に、半分真剣に詠唱をしていたりこつなつただけなのだ。

「飛鳥つちへ。」

突如、鈴の声が聞こえてきた。

「あ、はい。なんでしょ？」

「元の術式一つとも間違つてたよ？」

「え…本当ですか？」

「ホントホント。どちらも上級魔術の術式だったよ。」

びっくりした。

まだ上級魔術自体に手をつけていなかつたし、そもそも中級魔術も発動できていない人が上級魔術の術式を組み合わせて複合魔術を発動していたなんて…。

「私…」

あれ？

目の前が真っ白にな…つ…て…。

「お～、飛鳥つちお田覓めかい？」

「あれ？ 私…」

「気がつくと私たちちは目的地の前へりこむいた。
しかも私がだれかに… つて

「ええええー？ な、なんでぜろが私を…？」

「ぎやあぎやあ喚くな。耳が痛くなる…。」

「〇は氣絶した飛鳥つちをここまで運んでくれたんだよ。それにしてもまの魔術で氣絶するなんて、もっと魔力を多く持たないと。」

まずそこを注意するのですか。

「あ、飛鳥つち。〇には氣をつけた方がいいよ。〇つてば飛鳥つちが氣絶した時私が運ぼうとしたら、『俺がやる』って言つてたから。」

「すまん、こいつ斬つていいか？」

ぜろが剣を構える。

「ダメです。それよりも下ろしてください。」

ハツとしたか、ぜろは慌てて私を下ろしてくれた。
そしてぜろは鈴に斬りかかる。

「『我を剣から守れ ブレイクシールド。』」

鈴は防御呪文で剣の攻撃をよける。

しかも移動しながら詠唱という難しい技術をこなしてくる。

「つて、そんなことしている場合じゃないでしょ？早く先行いづよ！」

ヒラブルの役所に入つたはいいが、中は意外に広くてビルに行けば好いかわからない。

周りを見ると他のグラントスの生徒がちらほらいる。

「しかし広いな。外から見ると狭く見えるからか？」

「ふふふ、ここは魔法で広くしているのです。」

そこにいたのは女性の係員だった。

「さあ、グラントスへの文を渡しますから」ひかりへ。

私たちはそれに従つた。

しかし、他のグラントス生徒は誰もついて来なかつたことが気になる

。 。 。

魔術（後書き）

はい、今頑張つて一話の文字数を増やしている飛鳥（作者）です。自分が国語力が無いために読者に迷惑かけていないか心配です。

地下へと続く階段を歩いていた私はふとある疑問が浮かんだ。

「あのー、魔法って何ですか？魔術の間違いでは…」「飛鳥！…もしかして魔法のことも知らないの！？」

珍しく鈴が「飛鳥」と呼んだ。

これは重大なことなのだろうか？

「え？ 知らないといけない」とですか？」

「子供でも知っている常識だよーあなたいままでどうやって生きてきたの！？」

「そ、そんなにひどい！？ ねえぜ、あなたは知らないよね？ 知らないって言つて！」

私はこの話し合い（？）の中、発言をしていない唯一の人物に顔を向けた。

「知らない。」

「だよね！？ 常識じゃないよね？」

「… ど、このは嘘だ。」

田すら合わしていなかつた。

完全にバカにされている…。

落ち込んでいると鈴がしゃべり始めた。

「いい飛鳥つち、魔法とは家庭で使うもののことで、魔術は戦闘で

使うもののことなの。使ったことないの？」

「大抵は魔法石でそういうことを補っていますから魔法なんてある

「こう」と知らなかつたの。」

私はつき「魔法石」とちやつかり魔法の存在を肯定していませんでした？

「はいはい、飛鳥つちはかわいいといつことで解決といきましょつじやありませんか。」

なんか納得がいかないがこれ以上話していると時間の無駄だと考へたので先に進むことにした。

地下の最下層にきた私たちは少しの不信感を覚えた。

部屋は一つです』こさびれている。

「い！」です。」

「『完璧嘘だ！』」

三人で同時に叫んだ。

嘘丸見えだろ。

「嘘じやないですよ。町長はこうこうさびれたところが大好きで、ここを町長室にしたのです。騙されたと思って、さあ。」

にこやかな笑顔で語られるとなんか反論しづらー…。

「一つ、聞いていいか。」

ぜろが私たち一人が言えないことを切り出した。

「はい、何でしょー?」

「「」」が町長室ならなぜ他のグラニーズの生徒が「」」ないんだ?」

「あ、いえ。の方々はもう用事を済ませて…」

「ならなぜ早々に出発しない?早く戻らないと成績に影響するだろ

う。」「……」

黙ってしまった。

話し合つた結果、元の場所に戻るのと「」となり、戻るのとし
たとき

「ちつ」

舌打ちする声が聞こえ、そして

「万物の精靈よ、ここに大きな壁を作り上げ侵入者を閉じ込めよー!
!」

何かの呪文が聞こえたと思つたら、目の前に大きな壁が現れた。

「くそー。」

ぜろが壁に攻撃を加えても全くびくともしない。

「お前らが悪いんだー!正直に言つ」とを聞かなかつたから「」なつ
たんだ!」

「なんで…なんで」ことをするんですかー!」

豹変した係員に怒鳴る。

しかしこの壁は何だろうか…。

普通の壁ならゼロの攻撃が壊れるのだが…。

全く壊れない。

それよりも傷一つついていない。

「ツヴァイ坊ちやまの命令だ。坊ちやまがお前らを実習終了時間までこの部屋に閉じこめておけとおっしゃったからだ。その壁は魔法でできている！魔術で壊すことはもちろんのこと、何かで傷つけることなどできはしない！おとなしくそこにはいろー！」

さつぱり意味がわからなかつた。

なぜ家庭用である魔法が戦闘用である魔術を通さないのか…。

「魔法は家庭用だけど以前は精霊の魔術だつたの。今は精霊が人に協力するようになつて詠唱により精霊の力が宿るよつになつたの。さつきあいつが詠唱で『万物の精霊よ』って言つていたでしょ？それは全ての精霊の加護をこの壁がうつけているということなの。」

「さつぱりわからない」という顔をしている私を見て鈴が説明してくれた。

だがそれで理解した。

しかもこいつ、ツヴァイの部下（？）なのか。

…あれ？ツヴァイって誰？

「ねえゼロ、ツヴァイって誰？」

全くわからないし、ゼロは鈴みたいに勝手に教えてくれる人ではないと思つたので聞いた。

「武闘家科の元トップだ。金持ちで自慢したがりやのクズだ。まさ

かヒラブルの町長の息子とは…。」

「…」

壁の向こうから声がしない。

多分あいつはすぐにその場から立ち去ったのだろう。

それにしてもツヴァイというやつは…とんでもないカスのようだな。

「鈴、ぜる。」

私の呼びかけで一人がこちらを向く。

「この壁をぶち壊したいからさ、少し目と耳を塞いでもらつていいかな?」

「飛鳥つち、なんか人が変わつてない?」

「あれがあいつだ。あいつは怒ると口が悪くなるし性格が暴力的になる。あいつは自覚していないようだがな。」

後ろで一人がなにかわけのわからないことを話しているようだけど何だろう??

まあ私には関係ない話だろうけど。

「鈴、私が『ブラックカーテン』発動するからそしたら防御魔術かけといて。」

「え? 飛鳥つちその魔術つか…」

「つるさいなー。詠唱と術式は覚えているから発動できるのー! 移動中私が術を覚えていたの知つているでしょ?」

もつやかましくて仕方ない。

こつちは早くツヴァイの関係者を潰しにいかないといけないのに。

「『闇の幕、敵を包み、光と音を遮断せよ！』　　ブラックカーテン…』」

黒い布みたいなものが鈴とぜろを包む。

「『光の壁、我らを包み、あらゆる物から身を守れ。』　　サークルシールド

」

鈴とぜろの周りに結界ができる。

これで壊した壁の破片が彼女らに当たる」とはない。

「さて…、『契約者飛鳥が命ずる。』の壁にある精霊の加護を解き、
この壁を破壊せよ。　召喚…サモン！　いでよ、黒…白…』」

私の周りにある魔法陣から一人の男女が出てくる。
男の方は髪が真っ黒で、全身も黒い服を着ている。
逆に女性用の方は髪が真っ白で全身白い服を着ている。

「飛鳥よ。お前もうガキじゃねえんだからさ、『黒』つつて呼び
方やめないか？」

「はいはい、ルナ・サン、急ぎたいからこの壁、早くぶつ壊して
ほしいんだけど。」

「飛鳥ちゃん、怒つていらっしゃいますね。」

白もといサンと黒もといルナはまず壁を調べ始めた。

「ほあ～、魔法か。これは土の精霊グランのやつを基盤に全ての精
霊の加護を与えているな…。俺らの加護は消せるが他の精霊の加護
はどうする？」

「そんなの、精霊の中でトップクラスの能力を持つているあなたた

ちがどうにかしなさい。「元が精靈グラントの魔法ならグラントがその魔法を解除してみるのはどうなの?」

サンは考えている様子をみせ、すぐ口ひらを向いた。

「できるとは思いますが、グラントの他の魔法も解除しなければいけないと思いますよ。それでも?」

「そんなのどうだつていいよ。私たち以外がどうなつたつて構わない。」

「わお、飛鳥ちゃん完全に怒ってる。。。」

サンが引いた田で口ひらを見ているが、私にか言ったかな?。

「もう一つ方法があるだ。」

ルナが口を挟む。

何だろう、もう一つの方法は。

「精靈全員にこれの加護を解除してもらえば俺達が破壊できる。」

「なら早くしてきなさい。」

二人ともやっぱり何か変な田で見てくる。

「ルナ、本当にやつすらがない?」

「あ~。いつもは優しくて俺達にこんなことを言ひやつじやないんだけどな。」

「全くね。飛鳥ちゃんをこんなに怒らせたツヴァイって誰なの?俺達もそいつに殺意を覚えるわ。」

そしてこんな会話をして消えた。

なぜ怒つていいんだらう？

私には本当に理解できなかつた。

『『解除』』
アカーマジック

ずっと目と耳が聞こえない状態ではかわいそなうので魔術を解除した。

「もういいの？」

「……まだか。」

「いえ、もうすぐ解除されると思います。そしたらこの壁、ぶち壊してやりますよ。ふふふ…。」

私の発言に一人が頭にハテナマークを浮かべていた。

「何をするきだ？」

「もうやつてもらつています。終わつたら連絡をくれるよ」
『『言つてこます。』』

二人がさらにハテナマークを浮かべる。

今考えるとここを脱出しても現在の時間から制限時間以内にグランズに戻れるかどうか…。

『『飛鳥、聞こえるか？』』

頭に直接声が聞こえる。

『『黒？聞こえるよ。』』

『その呼び方昔から気に入らないのだが…。急いでいるから早めに話すぞ。その壁の魔法の精靈の加護を解除した。破壊可能だ。』

「鈴、ぜろ。今からこの壁を破壊する。また結界でも張つておいて。

』

二人が何も言わずにその指示に従つてくれる。

「世界を支える自然の力、火・水・風・地・雷・氷・光・闇、万物の力宿りしこの魔術、仇なす者全てに制裁を加えて、聖なる加護を我らに与え導け！…』

「あ…飛鳥、そんな魔術どこで？」

「完全なるオリジナルです。詠唱も術式もただ八属性を組み合わせただけだから失敗するかもしれません。」

「ならやめればいいんじやない？一人ずつ倒せば…。」

「そんなことしていたら時間がなくなっちゃう。』

ト…』

八色の光が私の周りから出現する。

そしてその光が壁を破壊し、さらに建物にも降り注いだ。

「おい飛鳥！このままじゃ俺達が瓦礫の下敷きになるぞ！」

ぜろが叫ぶが私は聞かない。

他のことに気をそらすと魔術が途切れてしまいそうだったからだ。今でも限界に近い状態となつている。

「飛鳥つちー私も手伝えない？」

鈴が呼びかける。

返事をしたいたが、そうすると集中が途切れてしまいそうで怖い。

怖いが返事しないとだめそうだったから

「お願い！今でも集中が途切れそうで危ないの。」

早口で言つたが、そのせいで魔術が途切れそうになった。
鈴が慌てて手伝いに入つてくる。

しかし手伝いといつても魔力の補助くらいのものだ。

「飛鳥たちのやうとしている魔術、わかつたよ。これほど膨大な効果なら一人じゃ足りないよ。まったく、飛鳥たちは自分を犠牲にする気？」

魔力の補助をしてくれている鈴が耳元で囁いた。
確かにこれほど強力な効果なら一人では足りないし、一人でも足りないかもしれない。

実際まだ半分も建物を破壊していないのに私の魔力があと少しだと感じる。

しかも鈴は結界を維持する魔力もある。
結界を解くと確実に私達は潰される。

「飛鳥たち、心配しないで。私の魔力は飛鳥たちの倍かそれ以上あるから。生まれつき魔力が多いから魔術での魔力切れは今までないから大丈夫だよ。」

この状況でふざけてくれる。

しかし彼女も苦しい顔をしている。

やはり強がっているが、結局現在の彼女の魔力も残り少ないようだ。

「もう飛んでもいいんじゃない？まだこれぐらいだけど十分じゃ…。」

「

「全壊させなきゃスッキリしない。」

「自分のためだけを考えて自分や他の人に迷惑をかけていいの！？」

鈴が私を叱る。

けどそれは正当だ。

私はさつきまで自分がスッキリするまでここから離れたくないと思っていた。

しかしそれは自分が魔力切れになるだけだし、何よりその前に鈴やゼロに迷惑をかけることとなる。

「… そうですね。わかりました、戻りましょう。グランズに。」

「エレメントエイト」は八つの属性の光で相手を攻撃し、その後自分を指定した場所に転送するという魔術である。

その転送を利用して、私達はグランズに戻る。

しかし転送魔術は距離があればあるほど魔力がいる。

私達が帰れるかはギリギリだろう。

「ではいきます。…『^{ポイント}転送』！」

周りが歪み、私達はヒラブル役所から離れる。

「そういえば文は？」

転送中の状態で私は一人に問いかける。

「それなら心配ない。あのさびれた部屋に一つあった。」

ゼロが手にある文を見せる。

周りがはつきりしてきて私達はグランズ冒険者学校の校門の前に立っていた。

しかし私と鈴さんは魔力を使い果たし、意識を失った。

罠（後書き）

書けなかつたので説明

魔法は家庭用で元は精靈が使う魔術。ここまででは説明済みですが、魔法は普通の人間は使えない。使うようになるには精靈の力が宿つた魔法石をつかうことである。

飛鳥は魔法石で代用と言つていましたけど、実際は知らずに魔法を使つていたということです。

精靈の加護は一つの魔法石に一つなので全部使うのは全種類の魔法石を集めることになります。精靈の加護は精靈達が自分の加護を解除できます。

さらにルナとサンの説明

サン 光の精靈

飛鳥の精靈。他の精靈とは契約をしていない。飛鳥とは飛鳥が生まれたときに契約し、初めて召喚されたときに見た目から「白」と呼ばれ、ずっと呼ばれ続けていた。飛鳥に憑依でき、憑依された飛鳥は性格が穏やかになり、光の魔法を魔法石なしで発動でき、魔術も魔力なし、詠唱なしで発動できる。

ルナ 閨の精靈

飛鳥の精靈。他の精靈とは契約をしていない。飛鳥とは飛鳥が生まれたときに契約し、初めて召喚されたときに見た目から「黒」と呼ばれ、ずっと呼ばれ続けていた。本人はその呼ばれ方が気に入らない。飛鳥に憑依でき、憑依された飛鳥は性格が荒くなり、閨の魔法を魔法石なしで発動でき、魔術も魔力なし、詠唱なしで発動できる。

逮捕！？

目覚めるとそこは学校の保健室だった。

しかし雰囲気が少し（？）違う。

私はベッドに縛りつけられ、横を見るとぜろが手錠をかけられて座っている。

だが私はこの状況にも関わらず眠たくて一度寝をしてしまった。

次に目が覚めると、私は別なところにいた。

ここはどこだろうと思つていると、壁の向こうから声が聞こえた。

『あいつ、いつまで寝ているんだ？』

男の声みたいたが、ぜろではない別な人のようだ。
この人の言つ「あいつ」とは私のことだらうか？

『大罪人のくせに呑氣だよな。』

『ああ、ヒラブル役所を破壊したということが知られていないと思つたのか。』

……もう一人いるみたいだ。
なぜバレているのだろう。

地下は私達以外誰もいなかつた。

破壊して消えた私達は現場にいなかつたということとなるはずだ。

『また見てくるよ。』

ガチャリと音がして扉が開いた。

男は私と同じ年齢くらいの人間だ。

「お、起きたのか。」

「あなたは誰ですか？私の友達は？」

男の顔を見ると不気味に笑っていた。

「あいつらか？あいつらはお前と違つて起きたから違う独房にいる。」

「友達のところに行かせてください。私の大切な仲間なんです。」

「ダメに決まっているだろ。貴様も独房送りだ。」

そう言つと男は私の腕をつかんだ。

「最後に…あなたの名前は？私達が何をしたと言つんですか？」

男は少し考えてしゃべり始めた。

「俺はツヴァイ、武闘家科で『裁きの者』ジャッジメントの人間だ。お前たちはヒラブル役所破壊の疑いで拘束をする。」

目の前にいるのが私達がヒラブル役所を破壊しようと思った張本人だと知ったとき、驚いた。

「あなた、私達をヒラブル役所に閉じ込めたでしょ？どうしてそんなことしたの？」

「決まっているだろ。俺がまた一位に返り咲くためにだ！」

……ブチッという音が私の頭の中で鳴ったような気がした。

「……お前ふざけているのか？私達はそんなことのせいで捕まつたところのか？」

ツヴァイはいまだに不気味な笑みを浮かべていた。

「一位になりてえんならそんなセコい手を使わず実力で頑張つたらどうだ！？」

「実力でこれなんだ。これ以上努力しても無駄だからだよー！」

ツヴァイも私と同じ位の大きさで怒鳴る。

私は小さな声で詠唱を唱える。

「『邪悪な闇よ、仇なすものを闇に飲み込めーーーン』消え去り一度と姿を見せるなーー！」

ダークゾ

漆黒の闇がツヴァイに向かってはしる。

……ハズだった。

しかし魔術が発動しない。

「俺達がお前らを縛りつけるだけでなんの用意をしないと思つたのか？首に魔術を封じる首輪をつけた。」

そう言られて初めて自分に首輪がついていたことに気がついた。

「そりゃこいつはいんじてもできる。」

ツヴァイが指を鳴らす。

そうすると全ての感覚がなくなり体が動かなくなつた。

「~~~~~！」

喋ることもできない。

ツヴァイが私を縛りつけていたものをはずす。

「立て。」

体が勝手に動き私は立つた。
さらにツヴァイが続ける。

「奴らのこるところまで歩いていけ。」

「了解しました、マイマスター我が主。」

次に自分が話そうと思つていいないのに口が動き声が出た。
しかしそこから出た言葉は自分が絶対本気で言わない言葉だった。

「『『主人』…』か。さつきまで反発していたやつとは大違いだな。」

「『『主人』…』か。さつきまで反発していたやつとは大違ひだな。」と言おうとしたときも声が出なかつた。

私は歩き始めた。

歩いている途中、私はどうにかしてこの状態を解除しようと奮闘したが全く意味なかつた。

牢屋まで歩かされ、そこには鈴とぜろがいた。

「入れ。」

牢屋に入る。

よく見ると鈴とゼロも私と同じような首輪をつけている。

「飛鳥つちーー！」

鈴が叫んで私に近寄る。

しかしツヴァイが

「斬れ。」

と言い、私は剣を抜いて鈴を斬ろうとする。
しかしひろが素早く私の剣をはじいてくれる。

「ハハハハハ！仲間同士で戦いあつ、こんなに面白いことはない。」

ツヴァイが去り、私は体を自由に動かすことができるようになった。

「…すいませんでした。」

「気にしないで。飛鳥つちは悪くない。私達も同じようなことをさせられたんだ。」

鈴が私に微笑みかける。

「だけどあれの対処方法は？」

「（バキッ）壊せばいいだろ。」

ゼロが首輪を外しながら言つ。

「…それができるのはこの中であなただけでしょ？」

私と鈴の表情を見てできないと理解したゼロは私達の首輪を破壊しようとし鈴の首輪は外れたが私はゼロの手が首輪に触れる前に私が

剣をぜろに向かた。

「自己防衛機能に切り替えます。私に仇なす者は排除いたします。」

体が思い通りに動かない。

「どうやら戦闘で首輪を破壊する以外は方法が無いようだな。」

「私は事件の首謀者なのであなた方より高度な首輪を^{マイマスター}我が主からいただいているのです。ぜろ・鈴、残念ですがあなた方は^{マイマスター}我が主のためここで私の手で始末します。」

「あなたは首謀者じやない！！私がやったの！」

「残念ですが私の記憶を調べたあとの結果なのであなたの言葉は嘘だとまる見えです。」

剣を使い鈴に突撃する私。

「『我を打撃から守れ ブレイクシールド！』」

しかし鈴は私の攻撃を防御魔術で守ろうとする。だが魔術が弱かつたため魔術の盾は破壊される。

「『風迅雷閃牙！』」

私は剣を振り、斬撃を飛ばし、そこから雷をまとった剣で相手を突くという剣士スキルを使う。鈴が今度は

「『聖なる光の盾よ、我を相手の攻撃から身を守らせよ ガード！…』」

光の盾が出てくる。

ブレイクシールドは一枚で薄い盾だが、ガードは何枚もあり、厚い盾である。

「『閃光脚！』」

ゼロが急に私の前に現れ腹に蹴りをいれる。

幸い全てが思い通りに動かない私は痛みも感じないらしい。

「やりますね…。ならこれではどうですか？『世界を支える自然の力、火・水・風・地・雷・氷・光・闇、万物の力宿りしこの魔術、仇なす者全てに制』うつ…！」

攻撃をかわしながら詠唱をしていたが、ゼロの「爪円舞」（突き三発に蹴り四発を舞うように交互に繰り出す技）が腹に当たりそしてその隙に首についている首輪に突きを当てて首輪を壊した。

「すみませんでした…。私がこんなにも迷惑をかけてしまうなんて。

「飛鳥つち、だからあなたは悪くないって。いくら私でも怒るよ?」

鈴が怒っている。

「こうなつたら…

「やつぱり我が主のために消えてもらいます。」

鈴がいきなり笑い始めた。

何気にゼロも笑っている。

「飛鳥つち…笑える。」

「？？？ なぜ？」

さつぱりわからなかつた。

「あ、で、これをどう破壊する？」

私が鉄格子を指差した。しかし私はそこでさつきの戦闘でのダメージが体に襲いかかってきてその場にうずくまつた。

「…一人とも本気で攻撃したね？」

「そうしないと私たちがやられそうだったから…。」

二人とも私から田をそらしている。

「と…とにかく、これを壊してツヴァイを殺りましょう。」

「そうだね。」

「なら飛鳥、剣を貸せ。」

ゼロに剣を貸す。

ゼロは私の剣での剣術と自分の武術で鉄格子を破壊する。

「何事だ！？」

破壊した音で近くにいた人が走つてくるのが聞こえる。
多分「裁きの者」の人間だろう。

「早くアイツのところに行こ。」

「誰のところだ？」

私は先ほど聞いたあの惡々しい声を聞き驚いて声が出た方向に顔を向ける。

そこにはツヴァイがいた。

「まつたぐ…、あれは悪いと思つたから弁護の余地があつたけどこれも重なつて罪になると弁護できるかな…。」

ツヴァイが何かつぶやいてくる。

よく聞き取れないがどうせ悪いことでも考えているのだろう。

「自己防衛機能を倒して首輪を破壊するとはな。だが倒すのが一足遅かつたな。これから裁判の時間だ。俺は弁護人の位置に立つ。」「ふん、お前が弁護人なら罪が軽くなるよりも重くなりそうだ。…と、言いたいところだが俺達はお前をここで倒す。ここで達とこんなことになるとは思つてなかつたな…。」

ぜろがツヴァイに殴りかかる。

しかしさすが武闘家科のトップの一人、お互いダメージが少ない。鈴が魔術で援護しようとするとゼロに阻まれる。

「俺がいなかつたらこんなことはなかつた。だから俺に任せてくれ。」

結果、すぐに他の「裁きの者」^{ジャッジマン}が現れて私達は裁判所へ連行された…。

「えへ、では今からヒラブル役所破壊事件の裁判を始める。」

裁判長みたいな人が開始の宣言をする。

始まるやいなや私達と反対側に座っている人が立ち上がった。

「被告人の三名は実習ということを利用してヒラブル役所に侵入して破壊したという行為をしました。なので私は有罪を主張します！」

「異議あり！！」

ツヴァイが叫んだ。

「それは偽りである。確かにヒラブル役所を破壊したのは事実だが、それは私が彼らを騙して役所の一室に閉じこめてしまったことが原因である。よって私は彼らは無罪だと主張します！」

「しかし役所を破壊したのは事実なら罪を償わなければならぬ。いくらあなたがその原因を作ったとしても破壊したのは彼らだ。彼らは有罪だ！」

「……」

言い返す言葉が無いようだつた。

ツヴァイは何か考えているようだ。

そして決心してこう言つた。

「役所は私の父が管理しておりちょうど立て直しをしようとしていました。なので破壊されたことにヒラブルの人間はなんとも言いません。さらにはただの魔術の威力で誰も怪我人がいないのはこの飛鳥が魔術を発動させたときに役所にいる仲間以外の人間をすべて

転移魔術で移動させていたのです。」

私達はツヴァイの努力のおかげか無罪となつた。
ツヴァイにお礼を言おうとする

「俺は弁護人として人を弁護しただけだ。」

と言われた。

しかし何故ツヴァイは私達を弁護したのだろうか。

ここはある場所の小さな部屋である。
そこに少女が一人座つている。
年齢は飛鳥達と同じ位である。
少女は誰かを待つているようだ。
するとどこからか声が聞こえてきた。

「私はあの判決には納得しない。貴様はどう思つ?」
「私はただ依頼された人間を殺すだけ。誰がどうなるつと構わない。」

声の主はニヤリと笑い、続けた。

「貴様も『裁きの者』の人間だろ?同じ『裁きの者』しかもトップ

ジャッジメント

ジャッジメント

を殺したというケースがあつたようだな。」

「殺す『^{ターゲット}相手』が誰だろうと関係ない。どんな強者でも私はどんな手を使ってでも殺す。」

「頼もしい。今回の『^{ターゲット}標的』は三名。飛鳥、鈴、〇とこうヤツらだ。」

「

そう言つと少女の前に三人の絵が現れる。

「さつきの裁判で無罪になつた人達…。」

「そうだ。ヤツらを始末しな。今回の任務はそれだ。」

少女は何も言わなかつた。

迷つていたのかもしれない。

しかし誰にもそんなことはわからない。

わかるのは彼女だけである。

「…」解した。

「期待しているぞ、符養。」

声が聞こえなくなる。

符養と呼ばれた少女はまだ三人の絵を眺めていた。小さな部屋にただ一人符養は立つっていた。

「私はなぜ人を殺さなければいけないの…？」

符養は今心の内に押さえていた不安をつぶやいた。

「私は…あのときからどうしてこうなつてしまつたの？」

最後に符養はそうつぶやき、そして部屋から消えた。

逮捕ー？（後書き）

今回で第一部は終了です。

しかし話はまだまだ序章ですかね？

自分も投稿を怠らないように頑張ります！

今回は「ジャッジメント裁きの者」について説明しておきます

ジャッジメント
裁きの者

政府に仕えて町の悪を取り締まる機関。
主に警察のような仕事や裁判をする。

しかし符養のよつて上から暗殺を依頼される者も存在する。

一ヶ月後の私（前書き）

飛鳥つちが大変な変化をしていて
ご注意くださいな

by 飛鳥つちの親友

一ヶ月後の私

あの実習から一ヶ月後。

私は魔術科にも慣れてきて、鈴から口調の改善をしつこく言われて
変えてみたが変わったのは私の口調だけではなく性格も少し変わ
ってしまった気がする。

「鈴、おはよっ。」

朝、私は鈴に挨拶する。

この一ヶ月何も事件がなかつた。

「お～、飛鳥つちあは～。」

鈴が返してくれる。

私は鈴の隣の席に座つていつものような会話を始める。

「飛鳥つち知つてる？昨日久しぶりにウラルからの物が見つかった
んだ～。」

「え！？そんなニュースやつてた？」

ウラルというのはこの世界に平行する世界でその世界に行つた人は
誰もいない。

しかし時々ウラルの物がクロスワールドにくることがある。
昨日のニュースを思い返すがそんなニュースはやつていないとこ
気がつく。

「あ…さか…。」

「そのままかだよ飛鳥つち

鈴がニヤツと笑う。

「昨日見つけたんだ。だから今日ひしひしきなよ。」

「うーん、興味あるけど見るだけ?」

「違うよ。使うの。」

私は鈴の発言に驚いた。

ウラルの物を使った人はいない。

なぜなら使い方がわからないからだ。

「え、使うって…。使えるの?」

「正確には使い方を考えようと言つた方が良かつた?」

その言葉で私はホッとする。

「もう、まぎらわしいな。」

「ごめんごめん。……あ、もうすぐ授業だ。飛鳥っち、また授業の
後にね。」

私は自分の席に戻った。

授業の後、鈴は私を連れて自分の家に向かった。

鈴の家はまだ一度も行ったことなかった。

理由は簡単で鈴が行かせなかつたからである。
しかしどうして今になつて家に入ってくれるのだろう。

「……ごめんね、家が汚くて。」

私は鈴の中を見て驚いた。

汚いほどではない。

完全に「△△」の山だった。

だがよく見ると「△△」ではなく何かの資料のようだ。

その証拠になにやら文字が書いてある。

「それまだ使つから捨てないでね。」

鈴が奥の部屋から叫ぶ。

「これ何の資料？」

「ああ、これら全部私のオリジナル魔術や複合魔術の研究資料。私は
こつやつて魔術の研究しているんだ。」

知らなかつた。

やつぱり複合魔術やオリジナル魔術の発動はここまで研究しなければいけないようで、すぐに出せた私がなぜか恥ずかしい。

「ごめんね。私が簡単に魔術だせて。」

「なんで飛鳥つちが謝るのさ。…あ、本題に戻らなきや。」

私も魔術の研究資料ですっかり忘れていた。

「ほい、これなんだけど。」

鈴が取り出したのは箱のようなものでそこに札が刺さつている。札には赤い帽子をかぶつたおじさんが描かれている。

「…」これの使い方を考えるの?」

「うん、そだよ。」

たしかウラルの機械はすべて雷のエネルギーで動いていると聞く。つまりこれに雷の魔法をあてれば動くのかな？

「『天にある雷、裁きを』…」

「ああ飛鳥つち！ なんで呪文唱えるの…？」

鈴が止めにくる。

私は何か変なことをしただろ？

「え？ だつてウラルの機械は雷のエネルギーで動いているって聞いたことあつたから試してみようかなと。」

「あ、そうなの。じゃあこれに雷の魔術を擊てば動くかもしないとこうことだね。」

「うん、どうせなら最大の魔術を一人で擊てば活発に動くかもしないよ。」

私の提案で一人で雷魔術の上級魔術を擊つことになった。

「『雷よ、我らの敵に裁きの雷で破滅に陥り、破滅の雷で敵を裁け ジヤッジメントボルテック！』」

巨大な雲が私達の前に現れる。
そして雷が機械に降り注ぐ。

しかし機械の様子がおかしい。

起動してもいいのに、全く起動せずにやら電気を帶びている。

「どうしたのかな？… いてつ…」

鈴が機械に触れるが鈴はすぐに手を引っ込める。

「いつて…。ホントどうしたんだろ…。」

「魔術が強かつたのかな？… つて、ちょっと…これ危ないって！」

私は機械が異常な状態になつていることに気がついた。

そして機械が爆発した。

私達はどうにか避難していただため怪我も何もなかつた。しかし鈴が大目にしていた研究書が燃えていく。

このままでは家全体が燃えてしまつ。

「飛鳥つち。ちょっと水系魔術で消火を手伝ってくれない？今度は弱い魔術を使ってさ。」

「わかった。」

二人で別の場所で燃えている火を消しにはいる。

「『飲まれろ！ アクア！-!』」

魔法陣から水が噴き出す。

水は火を消していく。

下級魔術の多くは「ツをつかめば長時間発動させることができる。なので連続で術を発動するより魔力の消費を抑えることができる。

火はすぐに消えた。

しかし鈴は少し悲しそうな顔をしている。

「鈴、ごめんね。私があんなこと言わなければ鈴が大切にしていた研究書が燃えなかつたのに……。」

「そんなことまったく気にしないことよ。」

「うえ？」

驚きすまじマヌケな声が出てしまった。

「だつてさうき悲しそうな顔をしていたからだつまつ。」

「ああ、わつき『今日の』『飯どうしようかな』つて思つてて…。ここにあつたのは研究済みのだから…つて飛鳥つむり？なんでもそんな怖い顔を？」

「うむわーーー私の謝罪の言葉を返せーーー。」

私は鈴を一時間近く説教した。

そして次の日、鈴は昨日何もなかつたかのよつに私に話しかけてきた。

「飛鳥つむりおはようー。」

「あのね、昨日の」と何も思つてないの？

「過去のことば気にしない

この人は過去のことばでウジウジしたくないから「そんな」とを言つているだけで本当は心の底から反省している。

…と思想たい。

「飛鳥つちさ、私だけには普通に喋るよね。」

昼休みに鈴が話しかけてくる。

「……鈴が敬語やめてって言つたんだよね？」

「言つたけど私だけじゃなくて他の友達にも敬語じゃなくて普通に喋ればいいじゃん。〇にもあの寒酒以来敬語でしょ？」

ぜろと会話している時は鈴はいなにはずなのにどうしてこういつ情報が入つてくるのだろう。

私はこの人に監視されているのではないのだろうかという感情が生まれた。

「あなた私を監視しているのですか？」

「監視じゃないよ。ほら、親が子供の成長を見守るようなものだよ。」

「私、あなたの子じゃないんだけど……。」

鈴は戸惑っている。

私は怒っている。

私は鈴のストーカー行為をどうにかしなければいけないと思った。

「鈴、あなたはその……私を監視するのをやめてほしいのだけど。これ以上やるといくら私の大切な親友でも私の最大級の魔術と剣技でお仕置きをしなければいけなくなるよ？」

「わかつたから、剣をおうそ。」

頭を冷やした私とストーカー行為を反省した鈴は話の本題に戻る。

なぜ私が鈴以外の人には敬語で話すのかといつゝことである。

「で、なんでなの？」

鈴が聞いてくる。

「え、えっと…まだ鈴以外の人には話しかけにくいからかな？鈴とは冗談を言い合える…相棒的存在だと思えるからだと思つよ。」「飛鳥つち…私のこと、そんなにも大切に…。」

鈴が泣き始める。

嬉し泣きだらうか、私はそつとしてあげると授業の鐘がなる。

鈴は授業中も泣いていた。

放課後、鈴は私に毎の「ことひこで話しかけてくる。

「今日はじめんね。急に泣きだしてさ。私一度泣きだしたら止まりにくいからさ。」

「うん。私も言つて良かつたと思つてる。」「カジさ、」

鈴は声を真剣にして話をきりだす。

「他の人にも敬語で喋らなこよひに心がけよつね。」

やつぱり諦めていなこよひだった。

帰りの道中、私は誰かの気配を感じながら鈴と話して帰っていた。

「飛鳥っちー、なんかにおわない？」

鈴が話しかけてくる。

何もにおわない。

ということは鈴なりの「誰かの気配がする」ということなのだろう。

「うん、におうね。気をつけたほうがいいかもね。」

「右からする？」

「そうだね。右だね。」

鈴や私が言ったように右から誰かの気配：殺氣がする。
もしこの殺氣の正体が殺し屋アサシンだとしたら殺し屋失格だりう。

「あれ？においが小さくなつた？」

鈴が「殺氣が消えた」と言つ。

私にも殺氣が感じられない。

その瞬間、鈴が倒れこんだ。

私は周りを見渡すがどこにも人はいない。

人の気配がしてその方向：つまり後ろを見ると一人の少女が立っていた。

一ヶ月後の私（後書き）

飛鳥の変わりようがすこくて驚きました。
しかしこれは鈴だけなので安心してください。

ウラル

クロスワールドに平行する世界。つまり私達が住む世界のことである。

時々ウラルの物体がクロスワールドに流れることがあるが逆は無い。
さらに言うとウラルの人々がクロスワールドにいることは無いし逆も無い。

「「Jの人は死んではいない…。」

少女は呟く。

耳を傾けないとつまく聞き取れない。

「あなた誰？」

「今ここJで…死ぬ人間に名乗る名は無い…。」

少女が襲ってきた。

手には短剣、忍者刀がある。

私は身を守ろうとしたが相手の動きが素速くて刀の弾道をそりすべりしかできずに左肩に刺さる。

「「ウ…」

痛くて声が出ない。

少女は容赦なく次の攻撃体勢にはいる。

「『マスター契約者…飛鳥が命ずる、我らを守れえ…！』　いでよ、サン、

ルナ！』」

「召喚術…。」

少女は召喚が完了する前に手裏剣を投げてくる。

私はかろうじてそれをよけて召喚された二人の精霊に顔を向ける。

精霊達は状況を大方理解し私と気絶している鈴を安全なところに運んでそこで話を聞くことにした。

運ばれたところはどこかの倉庫のようだった。

「今回の…敵は、……つ、強いよ。あの動きは…殺し屋の中でも…トップ…トップクラスの実力だと思うよ。」

「飛鳥さん、大丈夫ですか？今私の回復魔法をかけますから。」

「飛鳥、お前がそんな状態なんて情けねえな。お前の精霊として恥ずかしいぜ。」

ルナが私をバカにしてくるがこれでも彼は私を心配してくれている。

サンが私に回復魔法をかけてくれたおかげで痛みは無くなつた。

「あなた達を喚んだのは久しぶりに私の本氣を解除するため。」

ルナとサンは驚いて言葉が出てこないようだ。

「本氣を出すだけじゃダメなのか？」

「それじゃあダメ。さっきも動きが追いつかなかつた。速くてどうしようもないよ…。」

私は弱音を吐く。

白と黒が心配そうに私を見つめる。

そして二人が決心したように同時にしゃべりだす。

「「わかつた。」」

二人が同時にしゃべつたことに気がつき、サンが先に言つ。

「飛鳥さんがそう言つうなら私は手を貸します。」

「時間がねえし、飛鳥が死ねば弄り相手がいなくなるからな。」

黒も承諾してくれる。

私は一人に手を伸ばして叫ぶ。

「『^{マスター}契約者飛鳥が命ずる、我に力を貸し我に秘められた能力を引き出せ!』」

サンとルナが私の周りを飛び始める。

床に魔法陣が浮かび上がり私がその中心にいる。

まずサンが私の中に入ってくるのを感じる。

サンが入り終えると私に聖なる力のような力が感じられる。

次にルナが私の中に入ってくるのを感じる。

ルナが入り終えると私に暗黒の力のような力が感じられる。

二人が私の中に入り終えると私は強烈な痛みに襲われる。

次に私とサンとルナが融合していく。

もう私は体を動かすことができない。

この融合の光で場所を気づかれ殺し屋の少女が現れる。

到着した途端少女は融合中の私達に手裏剣を投げてくる。

しかし魔法陣の結界によりそれは弾かれる。

私の意識がサンとルナと同調する。

魔法陣が無くなり融合が完成する。

「…精靈との融合…あなたがそれを使えるというデータがなかつたため驚く…。」

「これは俺が昔試しに家で使つた以来使つたことがないんです。」

「どの精靈と融合したかは知らないがそれだけで私に勝てるとは思えない。」

少女は鈴に刃を向ける。

彼女も任務があるのだろう、目が本気だ…。

「…『ヘルフレイム』」

漆黒の炎が少女を包む。

少女はすぐに炎から逃げて鈴から離れるが

「『ヘヴンズライトニング』」

光の雷が少女に命中する。

少女は不意に上級魔術を食らつたはずなのに顔色一つ変えないで立つている。

しかし息が切れている。

「…なぜ？魔術は…詠唱がないと発動できないはずだけど…？」

「俺は精霊サンと精霊ルナと融合しています。精霊と融合しているなら詠唱破棄は当たり前だと思うのですが？」

「…理解した……。」

少女は無数の手裏剣やクナイを私に投げてくる。

「『サークルシールド…結界』」

結界を発動させて多くの手裏剣等を弾くが全部は防げずクナイが一本結界を壊して飛んでくる。

「…っ！『ガード…』」

ギリギリ魔術が間に合つて防ぐことができた。

しかし防いで魔術を解いた時には少女が私の目の前に忍者刀を構えて突進していた。

「さつきみたいにいくと思つていてるのか？」

私は剣で忍者刀を弾くが、少女は隠し刀をすぐに出して私の腹を刺す。

「これで…」

「…………？」

「これでテメエを殺れる。『ダークゾーン！』『

闇の穴が開き少女が吸い込まれていく。

「闇の中は怖いから目隠ししてあげる。『ブラックカーテン』」

黒い布のようなものが彼女を包む。

彼女はその布を取り払おうとするが離れない。

布が消えたが彼女は今日と耳が聞こえない。

「……」

無言でいたが彼女の目から涙が出ていた。

『私はどうして人を殺さなければいけないの？』

彼女の心の声が聞こえる。

ルナの能力で人の心の奥の声を聞くことができる。

『なぜ私が人に殺しを依頼されるの？』

『私は殺しなんてしたくない！』

『どうして私がこんなことをやらないといけないの…』

彼女の心の声が聞こえる。

彼女はもうダークゾーンに沈んでいた。

「……『融合解除』」

融合を解除する。

本当は戦いたくない彼女と戦うのは嫌だ。

「『解除』……」

闇の穴が消え、そこには少女が現れる、田も耳も聞こえるようになつたようだ。

「……なぜ助けたの？ あままにしておけば私を倒せたはずなのに……。」

「本当は戦いたくない人と戦いたくない。私はできるなら話し合いでつけたいから。」

「……！」

自分の心の内を知られて驚いている。

私はルナとサンを元の場所に帰し彼女の隣に行つて話し出す。

「私もあなたなら戦いたくないと思う。けどそれをやらないと始末屋に始末されるかもしない。だから戦うんだよね？」

彼女は小さく頷く。

予想が当たつてほつとする。

もし違つていたらどうしようと不安だった。

「私は親を小さい頃に亡くしている……。そして裁きの者に拾われて殺し屋として育てられた。その時に感情は無くした。」

「けど今あなたは泣いている。感情はあなたにもまだあるの……。」

大きな声で鈴が起きる。

鈴にも「これまでの話をした。

「それはね……。」

鈴は黙つてしまつ。

「私は今になつてビビりして人を殺すのかわからなくなつてきた。」「もういいよ……。」それ以上話さなくともいいよ。」

これ以上は彼女もつらいだらうと思つた。

「けど……」

少女が呟く。

「けど私はあなた達やもう一人の少年を殺さなければ……。」 そうしないと……」

「そんなやつら……私が倒す……。」 あなたをそこから守る……だからもうそんなことしないで……。」

少女と鈴は驚く。

少女は少し考えたがサンやルナと同じで決心する。

「わかつた……あなたと約束する……。」

「そういえばさ、飛鳥つちこの子の名前知ってる?。」

「あ、忘れてた。」

戦闘に集中していたし一度教えないと言われたから聞くことを忘れていた。

「……符養。」

符養は自分の名前を呟く。

私達は自分達の名前も言つたほうがいいのか相談した後に言つとう答えを出した。

「私は飛鳥。この人が鈴ね。」

「知つてる^{ターゲット}。私の標的だつたのだから……。」

あ、知つてたの……。

しかしながらほつとすると。

これは私もわからない。

「これから私達は友達だよ、符養。」

「……はい、わかりました。」

「む～、1ヶ月前の飛鳥つちと同じで符養も固いな～。」

鈴が文句を言つているが私には関係ない。
だが一つ言つならこの人はなぜこんなにも人が敬語を使うのを嫌うのだろうか？

「別に悪いことではないから……。」

「固い！ 固いんだよフーは！」

なんか変なあだ名を付けはじめている！

「鈴、しゃべり方を変えるのはもう少ししてからでもいいんじ……」「……」

符養が私をジッと見てくる。

「ふ、符養、……なに？」

「フーちゃん……。」

ニックネームが気に入り私にも呼んでほしいところだった。符養が目をキラキラして言ってくれるのを待っている。

「と・に・か・く！」

符養が寂しそうにしていた。

今度こつそりさりげなく言つてあげよう。

「鈴は何で人が敬語を使うのを嫌うの？」
「だつて…敬語つて堅苦しいイメージあるし、敬語で話されると体中がかゆくなつてくるから。」
理解した、この人は自分勝手だ。

私も前と同じしゃべり方でいいと思えてきた。

「鈴さん、そんな理由で私のしゃべり方を変えたなら元に戻しますよ。」

「飛鳥つちとの距離が離れた気がするよ！？」

「私は本気だからね。今まで敬語のしゃべり方だったから鈴と話す時も敬語でいけるか？」

さつきまで重かった空気がもうなくなっている。

鈴はやっぱりそういう空気が嫌いなのだろうか？

「ん？」

何やら変な匂いがするのに気がついた。見ると「ヘルフレイム」の炎と「ヘヴンズライトニング」でできた炎が燃えていた。

近くに「危険」と書かれた箱があった。

「あれって火薬の箱じゃ……。」

「そう……。」

符養が顔色一つ変えずに頷く。

「逃げなきや！『ヘルフレイム』の炎は水の魔術を使っても消えない！」

「……つかまって。」

符養が手を差し出す。

私と鈴は符養の手につかまる。

遠くで「ドーン」という音が聞こえた。

「フー、力持ちだね。」

「腕……痛い……。」

大丈夫ではないようだった。

「じゃあ、帰ろつか。」

「…私、帰れる家ない…。」

そういうえば符養は裁ジャッジメントきの者を裏切つたのだから帰れる家がないのは当然だ。

「じゃあ私の家においでよ。私も家族がいなから。」

家族は私が小さいころに死んでいる。

だから私には家族がどういうものかわからない。

「飛鳥の家、行く。」

無表情だったが符養は嬉しそうだ。

「む～、飛鳥つちフーを独占してずるこよ！私も飛鳥つちの家に行きたい！」

「鈴には帰れる家があるでしょ。あと私の家狭いし…。」

鈴がすねている。

私達はそれをスルーして家に帰った。

「飛鳥つち！なんで私を見捨てるの…？」

忍者符養（後書き）

符養編短いなと思つわたくしで「」がでこまする。

符養
忍者・殺し屋アサシン

元裁きの者ジャッジメントの忍者。

幼い頃に両親を殺され、殺した張本人である裁きの者ジャッジメントに拾われる。本人はそのことを知らない。

若干メンタルが弱い。

実は飛鳥に…あれ？符養どうしたの？

「それはダメ…。」

な…ならなんで忍者刀をこちらに向けて…ギャ-----!

新たな武器

符養が現れた次の日、私はとある鍛冶屋に訪れていた。

「いらっしゃって飛鳥の嬢ちゃんか。どうした？」

「ここにちは鉄のおじさん。今回はちょっとと依頼に…。」

「どうした？ うちは鍛冶以外は請け負わねえぜ。」

私は天井を見る。

鉄のおじさんも私の目線に気づき、それなりの方向を見る。

天井の上から覗き込む顔が一つ

… その顔は自分の存在を気づかれたことに気づき、素早く天井から降りた。

「この子の忍者刀と私の剣のことなんだけど…。」

「…誰だい？ この嬢ちゃんは…。」

「符養…。」

符養はいつもどおりの無表情で自分の名前を呟く。

「で、この剣とこの忍者刀を直すのか？」

「うん。昨日この子と戦つて剣にヒビが入っちゃって…。」

「安物だからなあ…。」と呟いている。

鉄のおじさんが私と符養の剣を眺めて悩んでいる。

決心したように鉄のおじさんは私達に話しだす。

「「」の一いつの剣は安物だから壊れるんだ。もつと強い剣が欲しいと思わねえか?」「

「そうなるなら私は欲しいけど…。」

「私も同意見。」

珍しく符養が「…」を付けなかつた。

彼女も強くなりたいのだろうか?

「そうか。なら新しい剣を作るためにヌリンクト鉱山に行つて鉱石をいっぱい採つてくれ。」

「え、なんで…?」

「強くしたいんだろ?なら行くしか道はねえと思つんだが?」

符養は「ちらりを見て私に任せている。

私は行こうか迷う。

ヌリンクト鉱山は実習で行つた森より遠く、モンスターも強い。

森はただの魔物モンスターの住みかだが鉱山は巣窟ダンジョンであるため危険度が増す。

「行つてみるよ。…そういうば行くとしたら私達剣が無いのだけれど…。」

「他で補え!…と言いたいところだが、ヌリンクト鉱山は巣窟ダンジョンだからな。この剣を使え。だがこれはウチの宝みたいな物だから絶対に壊すなよ。」

貰つたのはとても立派な剣だつた。

符養にも同じように立派な忍者刀を渡す。

私はこの剣に触れて剣の力を感じとつた。

それは凄まじいものだつたため、私は思わず

「う、これすぐださー。」

と言つてしまつた。

「ダメだーー！」

しかしあぐにおじさんに却下された。
そして私と符養は店をあとにする。

「飛鳥の嬢ちゃん、変わつたなー。」

私と符養は誰か手伝つてくれる人を探そうとした。

「やつぱり最適なのは鈴かな？」

「ダメ……。」

符養が抱むよつこいつへ。

「う、うひつて？」

「彼女は昨日の私との戦闘で今日は普通に生活するだけで手こつぱいの状態……。」

「やうなの……。」

「それ以前に飛鳥を彼女に取られるから嫌だ。」

「うの子は……。」

うが符養は昨日よつこいつへ。少し黙こよみつこいつへ。

私はそれが今日は鈴がいないからだと思わないでおこう。理由は鈴と符養の中が悪くならないようにとすることなのだ。

「なら、ぜろは？」

「0…。私の三人目のターゲットだった人…。」

「そうそう。その人を…」

「やだ。」

「ダメ」ではなく「やだ」だった…、この子は意外とわがままなのだろうか？

もししくは…、……考えるのはよそい…。

「じゃあ誰ならいいの？」

「誰でも…。」

「じゃあゼロね。」

「やだ。」

結局、符養のわがままで誰も同行せずに一人だけで行くことにした。

「符養、こうこうわがままを言い続けると団体行動ができなくなるよ…。」

「うん、わかった…。これから言わない…。」

よかつた。

これを続けていると本当にこの子と鈴の関係が険悪にならうそうだつたから。

「行こ……。」

私達はヌリント鉱山に向かう。
しかしひランズの外に出る門に来たとき、一人の少女が門番の人と
口論していた。

「どうして行かせてくれないのでですかーー？」

「だから外出許可証がグランズ冒険学校の生徒手帳が無いと出すことはできないんだよ！」

「さつきからグランズの生徒だつて言つているじゃない！…忘れただけだからいいじゃない。」

「ダメだ。」

この会話を聞いているとどうやら彼女はグランズの生徒だが、生徒手帳を家に忘れていて取りに行くのは面倒だということなのだろうか…。

「飛鳥、あの人助けてあげよう…。」

「うん、いいけど…。」

とことんと私と符養は門で困っている少女を助けることにする。

「すみません、彼女どうしたのですか？」

「この子は許可証を持つていません。」

「なら私のこの同行許可証を使わせてください。これで彼女は外に行けるということです。」

「あ、ああ。わかったが、その子はどうするんだ？」

門番は符養を指差す。

「もちろんこの子もこの許可証で通してもらいますよ。」

「しかし、普通同行許可証で同行できる人数は一人までのはずだが

…。」

「普通は…です。」

私は自分の持つている同行許可証をちゃんと見せる。
それを見せられた門番の人は驚いた表情をする。

「…これは…！」

「そうです。その許可証は『ゴールデン許可証』です。これなら何人でも同行させることができます。」

「…私にはこれが金色に光っているようにはみえない…。」

「…。」

符養によつてこのおふざけが終了される。
もちろん『ゴールデン許可証など無い。』

結局符養は私の持つていたスペアの許可証を使って門をくぐることに成功した。

少女が私に話しかけてくる。

「ありがとう。あなたもグランズの生徒だつたのね？」

「はい、私は魔法科四年の飛鳥。そしてこの子が…」

「あなたが噂のアスカ！？噂は聞いてるよ。剣士スキルを全部マスターしたんだつて？」

突然少女が私に詰め寄ってきた。

「そ、そうですけど…。」

少女から微かに鈴みたいたい匂いがしてくる。

「あなたは誰なんですか？」

「あ、『ごめん』『めん』。私は召喚科四年の琴葉。……この子は？」

琴葉は符養の方に顔を向ける。

「……忍者、符養……。」

「忍者……といつことはあなたはグラントの生徒ではないの？」

「そう……。」

符養は自分が殺し屋アサシンだといつことはマズいと思つたようだ。

「あなたはどこへ行くつもりなんですか？」

「私はヌリント鉱山に行くつもりなんだ。あれにて今精霊がいるらしいの。」

「ちよつどこちらもヌリント鉱山に行くつもりだったんですね。一緒に行きませんか？」

「いいよ。」

符養が私が「一緒に行こう」と聞いたとき少し不機嫌になつた。しかも琴葉がOKしたときにさらに不機嫌になつた。

喋らなくなり、樹の上に昇つてしまつた。

「……。」

「さすが忍者だね。音一つなしで樹に昇れるんだね。」

「あの子はちよつと機嫌が悪いみたいで……。……符養——降りてき

てよー。」

符養は上から降りてきてくれない。

この子も鈴みたいに怒つてあげたほうがいいのかな?
けどあの子メンタルが弱いから…、扱いが難しいから…。

「…………フーちゃん。」

「何?」

符養が降りてきた。

昨日呼んでほしいと言つていたが、その次の日に使つてしまつなん
て……。

「符養つかまえた!」

私が符養を捕まる。

符養が恨みの目で私を睨む。

「飛鳥…私を騙した…私…」

「そんなこと言つと私フーを嫌いになるよ?」

「こめんなさい…。」

案外符養を手懐けるのも簡単みたいた。

「あ、飛鳥に抱かれてる…。」

「ちよつ…、誤解をまねくよつな言い方やめてよ。」

「…一人とも、イチャイチャするなら私のいなこといひでやつて
行くわよ。」

琴葉のおかげでなんとかこの場は符養から逃れることができた

いた。

「ねえねえ、忍者ってどういづ職業なのー!？」

歩きはじめてすぐに琴葉が符養に質問する。

符養は私の横にいて琴葉から距離をおいている。

「私は依頼されることをするだけ…。それが殺しでも…。」

琴葉の顔から笑顔が消え失せる。

私は符養に小声で囁く。

「符養、それは過去の話しどしょ…もつ殺しひはしないって約束したよね？」

「…『じめん。』

「琴葉さん、この子は殺しひはしないって約束したから殺しひはしませんよ。」

私は誤魔化すためだとはい、自分が嫌いである嘘を言つてしまつなんて…。

「なーんだ。それを聞いて安心したよ…。符養ちゃんは依頼されることをするなら、今飛鳥といふことは依頼されたことなの？」

「いえ、この子がさつき言つたのは全て過去のことなんです。今は符養と私は友達ですから。」

そして私は符養を守る。

殺し屋アサシンをやめて始末屋スイーパーに命を狙われる符養を…。

この子には私しかいないのだから。

「……飛鳥。」

符養には私の思つてゐることが伝わつたようだつた。
そして符養は私だけに聞こえるようになつて囁いた。

「飛鳥は私を守らなくていいよ…。飛鳥は私が守るから…。」

符養の言葉が私の体を貫いた。

恋…とかではない。

私は知らない間に符養にそこまで無理をさせっていたのだ。
彼女は私のためになんでもしようとする。

そのせいで符養は私が守るといつ誓いを符養が私を守るといつ誓い
にしようとしている。

正直自分が何を言つてゐるのかよくわからなかつた。

「…………飛鳥？」

符養の言葉で正氣を取り戻す。

「なんでもない、なんでもない。や、行こ。」

「そう…。」

符養が怪しく私を見つめた。

新たな武器（後書き）

最後の方、自分でも何を書いているのかわからなくなっていました。

さて今回はこの世界の精霊について説明をさせていただきます。

精霊

魔法を使う者として人間に魔術を教えた。それぞれ地・火・水・風・氷・雷・闇・光を司る精霊が一體ずついてそれらの精霊の生息地が決まっている。その生息地にある街は生息地に住む精霊によつて名前が異なる。

例えば、精霊グランが生息する地域にある街はグランズと呼ばれているよつこ。

ちなみに友達からの要望で恋愛ネタをやつてみたのですが、あれでOKですか？

魔法石の採掘（前書き）

ユニーク1200人突破ありがとうございます！

今後も頑張つていいくので応援よろしくお願いします。

魔法石の探掘

私達はヌリント鉱山についた。

今私達は入り口に立つてゐるわけだが、採掘エリアはここからすぐにあるモンスターエリアを通りぬけなければならぬ。

私は途中からなぜか符養が私を監視し続けているような視線を感じるので迂闊に自由行動できない。

「符養、さつきからなんでそんなに怖い顔をしているの？」

「飛鳥、さつき嘘ついたから…。」

「嘘？」

全く心当たりがない。

彼女はどのことを言つてゐるのだろうか？

「…私に何か怒つてるの？何があるなら言つてほしい…。」

「符養、ごめん。何のことを言つてゐるのかわからないのだけど…。」

「

符養は私に悲しそうな顔をしてそのまま私より先に進んでいった。なぜか私と符養の仲が悪くなってしまったようだった。

「

「フー。」

「……」

彼女お気に入りの呼ばれ方で呼ばれても反応なし。

「自分の答えは自分で探せ」…、というやつなのかな…？

「何があつたか知らないけど彼女の気持ちも考えてあげてね。」

琴葉が私に近づいてきて囁いた。

しかしそうにそれに気がついた符養が私を琴葉から引き離す。

「へえー。符養ちゃん、飛鳥さんを避けているんじゃなかつたの?」

符養はハツとして私からすぐに離れる。

再び符養は私に顔を向ける。

悲しそうな顔をしている。

「飛鳥……なんで怒つているの……？あの時怒つたような顔をしていた……。」

符養の言つてこいる「どがこいつの」となのかわからない。

私は混乱してきた。

わからないからといふことで符養に対して怒りが増し、本当に怒つてしまいそうで怖くなってきた。

「符養……何かわからない！私がいつ怒つっていたのかー。」

「…………。」

符養は今の私を怖がつていて。

琴葉も私を怖がつてているようこみえたが、琴葉が口を開く。

「飛鳥……。あなたもう少し冷静になつて。今も怒つているかい。」

琴葉に言われて初めて自分が怒つていてるのに気がつく。

もしかするとその時も同じことになつていたのかもしない。

「……『ごめん。符養、教えて。』

「……『私が飛鳥を守る』と言つた時に怒つてた……私が守つてはいけない？」

「あの時か……」と理解する。

あの時は確かに符養への怒りがなかつたといえれば嘘になる。しかし顔に出るほど怒つていたとは思つていなかつた。

「あの時は驚いたから……符養。」

「何？」

「符養は追われている身なんだから『私が守る』なんて言わないの。」

「

符養が寂しそうな顔をした。

「だけど改めて言つけど符養は私が守る。あなたが守るんじゃなくて私が守る。だから私は約束を破つた符養に怒つたの。」

「けど……私は飛鳥を守つてはいけないの……？」

符養は私に問いかける。

しかし私はそれには答えない。

私はそれを決めるのは符養だと思つたからだ。

「仲直りが済んだら早く入りましょ。」

中は灯りがないと暗くて何も見えなかつた。

私はすぐに松明を探してそれに火の魔術を使って灯りをつけた。

「これでいいですかね？」

「うん、いいと思うよ。」

「フー、これ持つて。」

私は符養に松明を渡そうとするが、符養は私を見たままぼーっとしていた。

「……ちょっとフー？ 聞いてる？」

「あ、うん…。 聞いてる…。」

「この松明持つて。」

「…わかった。」

なんだか符養が嬉しそうだった。

私何か言つたかな？

琴葉が横で微笑んでいた。

私はよくわからなかつたが、先に進むことを優先する。

今のところ何も出てきていないが、ここはモンスターエリアである、どこでモンスターが出てきてもおかしくない。むしろ出てこないことが珍しい。

「…飛鳥。」

符養が呼び止める。

「何か聞こえる…。」

確かにモンスターの鳴き声みたいなものが聞こえる。

私達は暗闇の向こうにいると思われるモンスターを待つ。

「ヒュッ

何かが飛び出る音がした。

モンスターの形からみてどうやら獣型のモンスターみたいだ。

それと同時に符養が走り出す。

「『戒めの光よ、闇にのまれて破滅への敵に降りそそぎ、浄化せよ
魔界の太陽！』」

闇の光が敵に命中…しなかつた。

符養が足止めしているが私の魔術に気がついて、即座によけた。

「『契约者琴葉が呼び出す。敵を倒す！ いでよ、デーモン！』」

琴葉が描いた魔法陣から魔物デーモンが出現する。

デーモンは手から雷を出してモンスターに攻撃するが、やはりよけられる。

それを理解したデーモンはモンスターに接近し攻撃をはじめた。

「どう？これが私の最強召喚獣の五体の一体、『魔界の大佐 デーモン』」

「す…すじいです。」

「あ、デーモンは暴れるから符養ちゃんを戻さないと…。」

デーモンの戦い方に見とれて、琴葉の言葉を聞き逃してしまった。デーモンはモンスターと戦闘中だった符養にも攻撃する。しかし符養はそれをして私達の元に帰還する。

「……私に恨みでも？」

「『めんね。早めに氣づいていればこなことにな…。』」

符養は怒つてはいないが、琴葉を警戒するようになつた。
しかし符養は無意識の内に警戒しているため、自覚していない、あの子は鈍いから…。

デーモンがモンスターにどどめをさした。

私はデーモンが暴れてよく崩れない鉱山の洞窟の方を感心していた、いや、実際に崩れたら私達が危ないけど…。

「リリには何度も来ているんだ。」

デーモンを元の空間に帰還させながら琴葉が続ける。

「契約獣を増やすためや精霊を探すに来ているんだけど、ここの中モンスター達は魔術をよけれるみたい。しかも強いから私も一人だと三体以上を相手する場合は負け確定と言つてもいい。」

「あの強いデーモンでもですか？」

「ええ。デーモンだけじゃなくて、私の最強召喚獣でさえ四体は厳しいし、六体なんて…。」

「…私も基本人とか戦闘を行わないからモンスターは難しい…。」

「

琴葉と符養が落ち込む。

私もモンスター達を怖がつっていた身だから今でもモンスターと接近戦で戦うことはあまりしたくない。

ルナとサンを呼んでおいた方がいいのかもしれない。

「飛鳥は接近戦で戦えるよね？」

「は、はい。」

考え事をしている時に不意に名前を呼ばれて焦つてしまつ。

……やはりルナやサンは出でないでおじい。

「符養と飛鳥で私が契約獣を召喚するまでの間だけモンスターを引きつけておいてほしいの。……あなたの噂からあなたが魔術を優先して使いたいのはわかる。でも、そういうことを克服することが大事だと私は思うの。」

「わかっています。……私にはフリーがいます。フリーが私を守ると信じています。」

「……私も飛鳥が私を守ると信じる……。」

二人の信頼度は共にシンクロシンクロ同調していった。

モンスターエリアを歩いていると、符養が話しかけてきた。

「……飛鳥、もし戦いで魔術を使いたいなら私みたいに剣に魔術をこめて使ったほうが良いと思つ……。」

「それ、難しそうだね。……ってフリー！？あなた魔術使えるの？」

「……（口クリ）簡単なものなら。だけどそれだけで十分使える。強い魔術使える飛鳥ならもっと有効になるとと思つ……。」

という会話をした。

もしモンスターが出たら試してみよう。

……しかし、採掘エリアに到達するまでにモンスターの出現が皆無だった。

それならそれで幸運だと思いたいが、琴葉はそう思っていないようだった。

「おかしい……。こつもなうじに来るのに田代べりこと戦ひませむのに……。」

「田代……、私達今回は一体としか戦ひていないですよね?」

「ええ、だからおかしいの。……やつぱりにに精靈が来ているの?」

「精靈ですか……。」

「……考えていても仕方ないからとつあえず鉱石の採掘でもしようか。」

琴葉は採掘をしようとしていたときも今回の異常を考えていた。精靈か……、私もルナやサン以外の精靈に会つたことないな……。

それは置いておいてして私や符養の真の目的である採掘が始まる。

……だが誰も鉱石について知識が無いため、一応鉱石っぽい石を(特に光っている石)集めることにした。

「どう?なんかよさそうなのあった?」

琴葉が質問していく。

しかし私はよせうな鉱石がなかつたので何も言わず作業をする。

「何?」

符養が琴葉に鉱石を見せる。

それはとても大きかつた。

しかも一つだけではなく、それを四・五個持つていた。

「フー、すう……。これどいで見つけたの?」

「……向ひ。これくらいでよかつた？」

「これだけで十分だよー。あと、後はこれを袋に入れて精靈を見つけるだけか。」

琴葉が驚いた表情で私を見る。

「え、別にいいよ。私だけで精靈と契約するから。一人にそんな手間はかけさせたくないし…。」

「いえ、私達は精靈を見てみたいだけです。手伝うのはついでです。」

「

本当のことを言つと精靈を見る」の方がついでである。精靈はサンヤルナを飽きるほど見ている。

ビツセ、他の精靈も同じような者たちなのだろう。

「……ありがとう。」

琴葉の感謝の言葉で私と符養はやる気がしてきた。

「そういえばここにいると思われる精靈って誰なんですか？」

「ん~と、ここはたしかグラントの仲だつたはずだから精靈グラントじゃないかな？」

精靈グラント、私達がヒラブルの役所で閉じ込められた時の魔法の元々の持ち主…。

別に会つたこともないし、どういう者か知らないし、あれはツヴァイが悪かったのだが、私はなぜかグラントに怒りを感じていた。

「…飛鳥、また怒っている。…………リラックスして…。」

符養に言われて力を抜く。

そうすると、怒りが収まってきた。

「もう大丈夫だよ。ありがとね、フー。……？」

ここで初めて自分が符養のことを「フー」と呼んでいたことに気がついた。

あの時符養が嬉しそうにしていたのは、私が「フー」と呼んだからだとわかる。

言わないほうがいいのか…、しかし言わなくなると符養が悲しむ。私は仕方なく呼び方をそのままにする決意をする。

「飛鳥に感謝されて私も嬉しい……。」

「そう、それはよかつた。私も…フーが嬉しそうでよかつたよ。」

琴葉が気まずそうな顔をしている。

これ以上モタモタしているといけないようなので

「さ、精靈と戦いに行こ。早く行かないと精靈が逃げるかもしれないからや。」

切り上げた。

琴葉の話によると、グラントは鉱山の最深部にいることが一番可能性があるらしい。

最深部は採掘エリアをより奥あるのだが、まだ採掘エリアといつとここで「モンスター」魔物が出現してきた。

「やつぱりグラントの奥だね。」

「……琴葉、しゃべつていい暇はない。」

私はやつとモンスターが出てきたと内心喜んでいた。
符養から聞いた戦い方を試すチャンスがきたと。

「……飛鳥、魔力を剣に流すようなイメージで、剣の中で魔術を発動
するイメージをもてばできる。」

符養に言われた通りにやつてみる。

相手は土属性のモンスターだから風属性の魔術を使おう。
まずは魔力を剣に流して……

「『吹き飛ばせ ^{ブレス} 吹息！』」

剣が緑色に光る。

私はその剣でモンスターに攻撃する。

「『斬波！』」

剣を振り、斬撃が飛ぶ。
しかし、いつもと違う。

それは斬撃が風を纏つていたことだ。

風を纏つた斬撃はモンスターをなぎ払つ。

「……やつぱり飛鳥は私よりこの戦い方がむいている。」

符養が囁く。

私もこの戦い方に慣れれば前より強くなると思つ。

最深部。

グランが侵入者が侵攻してきてることに気がついた。

「この気配は……もしや」

魔法石の採掘（後書き）

今回、題名が題名なので採掘をするシーンをもつと軽く書きたかったのですが、これが私の限界です。——

毎回キャラや世界について説明しますが、今回は休ませてもうつといいでですか？

だめ？

なら琴葉について説明を…。

琴葉 召喚科 四年

召喚科の上位。

飛鳥の大ファンでもある。

契約する召喚獣は強い者じゃないと契約しない。

なので、強いモンスター求めて遠くへ旅することもある。

今私達は数え切れないモンスターの大群と戦っていた。

私にとつては新たな戦い方の練習になつていいが、他一人は連戦の疲れとモンスターの強さで苦戦していた。

「『風よ、我の意志に従い敵をなぎはらえ
ト！』」

この魔術を剣に込めずに、普通に発動する。
ほとんどのモンスターは魔術をよけるが、数が多いため逃げ遅れる者もいた。
少しでも多く倒せるなら私は構わなかつた。

「飛鳥……、魔力大丈夫？」

符養が声をかけてくれる。

「うん、大丈夫だよ。私これでも魔力多いねつて鈴にほめられたらいいだから。」

「……鈴も魔力多い方なの？」

「あの人は別格で魔力がきたことが一度もないんだって。……けど、エレメントエイトの発動時には魔力がきて気絶しちゃつたからあれが初めてきたことに……？」

会話を続けながら戦闘をする。

符養は琴葉を守る役割を守つてゐるためにあまり敵をなぎ払うこと
ができない。

「……エレメントエイト…？どういうやつ？」

「それはみせられないよ。私と鈴の魔力が満タンでも空になる寸前になるくらいの魔力が必要だから。」

符養が残念そうにする。

見せたいが、あの術の消費魔力と威力の問題上無理に等しい。どうにか規模を縮小する方法があるが、私がそれに手を出さないでその方法も無理になる。

「『我に仇なす者、天雷により裁かれ、天へ魂を捧げよ！　ヘヴンズライトニング！！』」

剣に新たな魔術をセットする。

「『我に逆らう者よ、地獄の業火で焼き尽くされ、魂を永遠に燃やせ…。　ヘルフレイム！！』」

次は普通に魔術を発動する。

黒い禍々しい炎が敵を焼き尽くす。

「『裂破斬！！』」

白い雷をまとつた剣で斬りつける。

斬つたあと、白い電気が周りに放出される。

敵は先ほどの攻撃であらかたは片付いたが、私が魔力を多量に消費したらしく、力が抜けて体が動かなくなってしまった。

「飛鳥！？」

符養が駆け寄ってきた。

「飛鳥大丈夫？」

「フー…大丈夫だよ…。ただ疲労と魔力の大量消費で動けないだけ…。」

「よかつた…。……これ飲んで。」

符養がカプセルを渡してくれる。

これで疲労と魔力が回復するが、効果が出るまでに時間がかかるため、その間は符養が背負ってくれることになった。

「『主、琴葉が貴様を呼び出す。いでよ、ムシャヤ！』」

見慣れない鎧…鎧自体あまり見たことがないのだが、それと絶対見たこと無い剣を持っている。

「お呼びでござりますか？^{あるじ}主。」

「うん。この人が回復するまで私たちの護衛をお願い。」

「御意。」

ムシャが剣を抜いて歩き出す。

私はおそらく符養も抱えているだろう質問を契約者に投げかける。

「この魔物は一体なんなんですか？喋るし…。」

「この子はムシャ。サムライという職業らしくてブシだつて言つているわ。で、あの鎧がカツチュウでの剣がカタナっていうものみたい。ワの心は忘れないらしいわ。」

説明を聞くとますますわからなくなってきた。

…とりあえずムシャは異世界の人だと思つておこう。

その後も幾度かモンスターが出現するが、ムシャによつて倒される。私の体は全く動かなかつた。

そこまで疲労が蓄積していたのだろうか。

「……飛鳥の体まだ動かない？」

「うん。けど大丈夫だよ。少しづつ動くようになつてるから。」

「……そつ。」

本当は少しづつ動くようになつてはいない。しかし、符養を心配させないようにするためにここのような嘘をついた。

そんな状態で私たちは大きな部屋に來た。ここに精霊グランがいるのだろうか？

そう思つて周りを見渡していると、奥に古そうな杖を持つた老人が現れた。

この老人は一目見た瞬間に人じやないと確信した。その証拠に浮いている。

「よく來たな。飛鳥。」

私の名前を知つてゐる…？

「…………どうして私の名前を…？」

「…それは言えん。だがこれだけは言おう。…飛鳥よ、仲間を連れて早急にこの場から立ち去れ。貴様らとは戦いたくない。」

「なら、私と契約してくれない?」

琴葉が前に出る。

私はこつそり魔術を発動する準備をする。

「戦えないのなら私と契約して。ここまで来たのに手ぶらで帰るなんてごめんよ。」

「それはできぬ。貴様のような雑魚を相手にしている暇はないのにな。」

琴葉が怒りにまかせてモンスターを召喚する。

「『^{マスター}契約者、琴葉が呼び出す。いでよ、デーモン!』ムシャも行きなさい。」

「御意。」

ムシャとデーモンが攻撃に行くが、グラランが岩を飛ばすと、当たつた一体のモンスターは消滅した。

「うそ……。」

「貴様のモンスターなど、我らにとつては蚊のようなものだ。」

私は準備していた魔術をグラランにぶつける。

「『天に捧げよ地獄の闇、裁きの雷により、焼き尽くし、大地に聖なる水と風を吹き流せ! ヘルジャッジメント!』」

私の使えるだけの魔力を消費し発動した。

しかし相手も魔法を発動し、私の魔術の威力を弱める。

そして、グラランは手で攻撃を受け止めた。

「これほどの魔術で儂を倒せると思つなよ。」

攻撃を受け止めたグランが私に向かって言った。

精靈には魔法のほうが有効なので、私みたいな魔術師は不利である。そして、私は急に出現した岩の壁に囲まれ岩の中に閉じ込められた。

「あの者がいると少し面倒だ。」

体が動かない。

意識ももうううとしてきた。

……飛鳥が岩に閉じ込められた。

私と琴葉だけでグランを倒さなければならないという状況になつた。しかし飛鳥は先ほどの魔術の使用で魔力を使い果たしたかもしれない。

「貴様等だけで儂に勝てると思つのか?」

「……勝てるとは思つてない。……私は飛鳥が逆転の方法を使つまでもあなたを止めるだけ。」

琴葉が「逆転の方法?」といつよくな顔をしていたが、無視して戦闘にはいる。

飛鳥なら魔力が空でも絶対逆転の手を持つている……！

「外ですごい戦闘の音だけが聞こえた。」

戦闘の音が時々止む。

私が目を覚ました時には部屋の中が息苦しかった。

相変わらず私の体は動かない。

なんとかこの状況でも脱出の方法を考えないといけない。

と、脱出する方法を考えていると、外から声が聞こえてくる。

「儂がこんなにもてこずるとは…。人間を侮りすぎたか?…しかし、姫があの段階まで成長しているとは…。」

…「」のグラントの言葉から察するに、琴葉と符養がやられたところになると、
許せない!

「『契約者飛鳥が呼び出す!…』 いでよ、サン!ルナ!』」

召喚に魔力はいらない。

だから現在魔力が空っぽの私でも召喚が可能となる。

そして、いつものように召喚された二人は私の召喚を待っていたか
のよつや顔をしていた。

「喚ぶと思つたぜ。…お前の思つてていることはわかってる。」

「精靈同士戦うのは嫌?」

「いや、俺らは今お前の召喚獣だ。契約者の命令は逆らひつことはできない。」

「そうですよ飛鳥ちゃん。相手がグラントおじいさまでも私達は飛鳥ちゃんの味方です。」

サンもルナと同様の事を言つ。

この二人ならそう言ってくれると思っていた。

「けど、私魔力を使い果たして動けないの。どっちか私に憑依してくれない？」

「そういえばあそこまで一人がボコボコになっていても素の飛鳥になつていないのでそのせいか……。」

それは関係ないと思つけど……。

すると、ルナとサンがジャンケンをし始める。
そして

「よし！俺が勝つたからお前が飛鳥に憑依しろよな。
「残念。私もグランおじいさまと戦いたかったのに。」

おい、私ははずれか！！

「いいじゃねえか。お前は飛鳥と一緒に戦えるじゃねえか。
「そ、それもそうだけど…。」

今動けたらこの一人をたたきたい。

「それで決まりね。なら早くしてくれない？時間がかかりすぎると二人が危ないとと思うから。」

二人は口論中だったが、私の言葉で口論をやめて私の言葉に頷いてくれた。

「いくよ…『^{マスター}契約者飛鳥が命じる、サン、我に力を貸し我に秘められた能力を引き出せー。』」

サンが私の中に入る。

それで私は聖なる力が私の中に感じた。

サンの憑依が完了すると私は体を動かし、立ち上がることができた。これは精霊が普段空気中に存在する魔力を吸収して生きていることが関係している。

だからサンの力を得た私は魔力を自動回復できるところとなる。

「さあこきましようか、ルナ。」

言葉遣いが丁寧になってしまふが…。

「『Jの壁を一人の魔法を使って壊しましょう。』

「飛鳥…。そのしゃべり方やめてくれないか?なんか氣色わるい…。」

「やつはいつも直りません。壊しますよ。」

一人で魔法をぶつける。

「『聖なる光の槍よ、我の意志に従い敵を貫け! セイントラン

ス!』」

「『テモンズレイン』」

私はいつも癖で詠唱を唱えてしまつた。

ちなみに術名、詠唱は魔術の時と全く一緒だが、術式が魔法のものとなつており、魔術の時は格段に違う威力となつている。

闇の針のようなものが一点に集中してそこに聖なる槍が突き刺さる。

壁が壊れ、外に出る。

そこには符養と琴葉が何度も吹き飛ばされ、相手に傷一つ『ひる』とができなくても懸命にグラント戦っている姿があった。

「あ…すか?」

符養がこちらに『氣づく』が、その後に倒れる。

琴葉もグラントに『やられてしまい』、壁に叩きつけられ、氣絶した。

「貴様も儂と戦うのか…ルナ、サン。」

「俺らは飛鳥の召喚獣だ。契約者の命令に従うのが普通だろ?」

「私もルナと同様の意見です。あと私、実はグラントおじいさまと戦いたかったですし。」

私の中のサンがグラントに話しかける。

憑依状態でもこういうことができるのか…。

「なら貴様らも敵とみなそうではないか。」

「待つてください。」

私が止める。

「私達が勝った場合、私と琴葉さんと契約をしてほしいのですが。」

「よからう。貴様らが勝った場合だがな。」

「すいぶんと余裕だった。」

私は早速魔法発動の準備を始める。

「『ライトバースト』」

その魔法を剣に溜める。

アイコンタクトでルナに援護を求めて一気に攻撃を仕掛ける。

「滅・破朽斬！！」

突きの斬撃を連続で飛ばし、最後に横一閃の斬撃を飛ばす。ライトバーストも加わっているので、まともにくらえれば無事ではないだろ？

「『ストーンウォール』」

石でできた壁が突然現れ、攻撃を阻まれる。しかし、砕けた石がグラントを襲った。

「『ダークゾーン！』のまれな。」

さらにルナが魔法でグラントに攻撃する。グラントが闇に引きずり込まれていった。

「やつた！？」

「こんなもので倒せたらあの一人はそこで倒されてない。」

ルナの言葉は本当だった。

グラントはすぐに穴から出てきた。

「強すぎます…。」

「諦めるなよ。お前は俺とサンが守るからだ。」

「貴様うよつ数十倍生きておる儂をこんなことで倒せるわけがない。」

…しかし、まだ私には切り札がある。

しかしあれは魔力の消費が大きいし、それを使えば符養と琴葉に危険が及ぶ。

だから私はあれを使わずにグラントを倒す！

精靈グラン（後書き）

遅くなりました、すみません。

次回でこの精靈編は終了です。

今回はグランの説明でも

グラン 精靈

グラントの精靈で属性は土。

精靈の中で最年長。

人間を好まず、常に洞窟の最深部など、人間がめったに来ることができない場所にいる。

戦いの末に

「『冷氣よ、敵を凍てつかせ！　アイス！』」

氷の呪文でグラントを凍てつかせようとしたが、前と同じで魔術を素手で受け止める。

やはり最上級の魔術を魔法に変換したものでなければいけないのだらうか。

…やつてみるしかない。

「『浄化された汚れなき冷氣よ、敵を凍てつかせ、天へ召せよ！　ライトロードフリーーズ！』」

術はグラントに命中し、グラントが凍りついていく。

「く…。おのれ！」

「飛鳥、今のうちに俺とも融合しておけ。やつらのほうが勝率が上がる。」

グラントが動けないうちにルナが私に話しかけてくる。

「飛鳥ちゃん、私もずっと思っていました。グラントおじこさまが今動けないからお願ひ。」

サンも私の口を使って話しかけてきた。

私もうすうすそう思っていたが、ルナを私に憑依させる暇がなかつた。

「わかりました。グラントさんが動き出す前にはじめましょう。……

『マスター、契約者飛鳥が命じます。ルナ、我に力を貸して我に秘められた能力を引き出してください。』

ルナを憑依させる。

これで数的には精靈一人分の力を得ていて、そのためグラントを倒すことができるはずだ。もし一人一人がグラントと同じくらいの力があればだが。

「……」

グラントはルナが憑依しているときに完全に凍ってしまった。

「チャンスと思つていいの？」

「……多分な。」

私は魔法を剣にこめる。

「『クロスリング』」

剣の刃の周りに黒と白のリングが出現する。

さらにどの技で攻撃すれば確実に倒せるか考えていたときにふと思つた。

これ、もしかすると氷ごとグラントも碎けるんじゃない？

……そんなはずはないだろう。

精靈は死ない

多分。

「おい、早くしたほうがいいぞ。」

ルナが声をかけてくる。

「う、うん。早くしないとね。」

「…もしかして飛鳥ちゃん、切ると氷」とグランおじいさまも砕け
ると思つてているのですか?」

「……。」

正答すぎて言葉もでない。

「あ、正解だつたの…。」

「大丈夫だ飛鳥、今グランのじいさんは今氷の中に閉じ込められて
身動きが取れないだけだ。つまり氷を斬れば氷が割れて動けるよう
になるが、動けないから急所を突いてじいさんを倒してやろうとい
うことだ。…ってわかつたか?」

実際のところ先ほど私が岩の中に閉じ込められていたようなことを
思えばいいのだろうか?

とにかく私はグランに打ち込む技を考えていた。

…これはどうだろうか?

「『閃滅闇光円斬!』」

最大の威力を出すことができる私の一番の得意技。
その技をグランに浴びせる。

クロスリングの効果もあり、グランにはけつこう大きなダメージを
与えることができるだろう。

氷が壊れてグラントの体が空気に触れた。

動けるようになるくらいになつたくらいでグラントの体が倒れた。

そのまま倒れた状態で動かない。

融合を解除して倒れている二人を近くへと運ぶ。

「まさかあのじいさんを倒しちまつたか。」

「けどそれまで普通に行動していたグラントがなんで凍らされただけで負けるんだろう?」

「それはですね飛鳥ちゃん。」

黒との会話にサンが割り込んできた。

「グラントおじいさんは精霊最年長、ご老人ですから。飛鳥ちゃん、ご老人に寒さは死に直結する危険なことなのですよ。」

やつぱり精霊も死ぬのか…。

しかし、琴葉もグラントの状況だと契約するといつ約束が果たせない。

「『傷ついた体を癒せ キュア…』」

回復魔術を二人にかける。

しかし下級の回復魔術なのでだれもすぐに目を覚まさない。

しばらく待つてみると、符養が目を覚ました。

「……あれ? 飛鳥、グラントは?」

「倒したよ。サンとルナと一緒に。」

そつとつて符養の後ろを指す。

符養はその方向を向き、倒れているグラントを見て驚いた。

「……飛鳥、本当にすごい。」

「倒したって言つても私だけの力じゃないし、偶然弱点をつけただけだし……。」

「ああ、弱点をつけなかつたら飛鳥は負けていた。」

「でも必要なのは過程ではなく結果です。『もし』とこつのはないんですよ。」

サンがフォローしてくれた。

「あれ？ グランは？」

琴葉が目を覚ました。

琴葉は自分の後ろにいるグラントを探して、サンとルナを見つけると

「あれ！？ なんでここに精霊サンと精霊ルナがいるの？ ここグラントの洞窟じゃ……」

「正真正銘グラントの洞窟だ。俺らは飛鳥に喚ばれてここに来ただけだ。」

琴葉の顔をグラントに向けながらルナが答えた。

琴葉は混乱してしまい、今ならどんな子供じみた嘘でも疑いなく信じてしまいそうな状態だった。

「…………って飛鳥、あなたルナとサンを召喚することができたの！？」

よつやく氣づいたようだつた。

「何で早く言つてくれないのよお！」

「だ…だつて話したらややこしくなりそうだし…。できれば氣づかれずに終わらせたらな、と考えていたくらいで。」

「すごいことなんだよ！精靈と契約できる人なんてごく稀にしかないんだから。その中でもルナとサンは契約できた人が一人もいないと言われるほどなんだから。」

サンとルナつてそんなにすごい精靈だったのか…。自分のことに関する話ではあまり話してくれなかつたし、私も知りたいとは思つていなかつたから少し驚きだつた。

「精靈サン、精靈ルナ！私と契約を…」

「…と…は…さん？」

「は…はい。」

「ルナとサンとは契約させないよ？もし無理にするなら私が許さないから。」

「もちろんです…。」

琴葉がおとなしくなつたのを待つていていたかのよつてグランが起き上がりつた。

そしてなぜか私を孫を見るように見つめた。

「……」

「ぐ…グラン、約束です。私があなたを倒したので琴葉さんと契約してください。」

「いいだろう。しかし儂は儂を倒したものとしか契約はしない。」
契約者マスターがしろと言わない限りはな。」

つまり、私と契約しないと琴葉とは契約しないといふことなのだろうか？

しかし、私も契約すれば戦闘時にグラントの力を使用することができるようになる。

「わかりました。では契約しましょう。」

私はグラントに手のひらを向ける。

「『精靈グラント、汝を契約者飛鳥契約せよ。』^{マスター}
『承知した。』」

グラントが手のひらを合わせる。

すると、周りに魔法陣ができる、すぐ消えた。

「これで契約は完了した。」

「では、これからようじくね。」

「……」

皿をやらいし、黙ってしまった。

「じゃ……じゃあ次は琴葉さんとの契約ね。」

「いいだろ？。」

琴葉も私と同じようにグラントとの契約を始める。

そして同じように契約が終了した。

「これでお主との約束は完了したな。」

「ええ、よろしく。」

「グラン、ありがとうね。あなた私達のことあまり好んでいないよう見えていたから。」

「貴様等は今でも儂の中では招かれざる客だ。」

グランが「もう帰れ」という素振りをしたので帰ることにする。しかし、ルナとサンを元の場所に移そうとしたときには

「すまん、グランの爺さんに話があるからまだ帰すのは待つてくれ。」

「では飛鳥ちゃん、私達は先に行きましょう。」

「サンは？」

「私はルナが帰れる状態なのを飛鳥ちゃんに伝える役目ですから。」

飛鳥達が帰つていった後で、ルナとグランが話をしていた。

「どうだった？」

「ああ、貴様等の力を借りなければ儂に勝てないとはな。」

「なら伝えておくよ。けど爺さん、そんなこと言つたらあいつに嫌われるぞ？」

「別にいい。姫のためだ。」

姫…その言葉は聞かせてはいけない。

その存在は精霊だけの秘密だから。

「飛鳥ちゃん、ルナから伝言です。」

グラントの洞窟の出口付近でルナがグラントとの会話を終えたよつだつた。

「なんて？」

「グラントお爺さまが『精靈の力を借りなければ勝てないとはな』と言つていたようですよ。」

その内容を聞いて、私は最近の戦闘を思い返す。確かに最近の私はルナやサンの力を借りていた。

「だからまずは私やルナに一人で勝てるくらいに強くなつてほしいらしいです。」

サンが続けた。

「ですから……帰つてすぐに私と戦いましょう。」

「……本当？」

「そうですね……今回は符養さんの修行も兼ねて一対一で戦いましょうか。」

「……飛鳥、頑張ろ。」

符養もやる気だった。

だが、サン相手に一対一ででも勝てる気がしない。

「……『ルナ、サン、元の場所に戻れ！』」

「あつ、ちょ……。」

サンとルナを強制帰還させる。

二人とも「いいのかな？」といつような顔をした。

だが、家に帰った時にサンが笑顔で家の前に立っていた。
そして修行後に符養とも一対一の修行をしておけと笑顔で命令された。

どうせ明日にはブツブツ文句を言う人ができるはずだ。
あの人は鎮めるのが難しそうだな…。

戦いの末に（後書き）

今回でグラント編終了です

今回は飛鳥の精霊憑依モードを説明します

憑依モード

飛鳥が精霊の力を自身が使用できるようにした状態。

この状態の時、憑依させた精霊によって性格が変わる。

しかし、精霊を複数憑依させた時組み合わせによっては通常の性格になるときもある。

例をあげると、今回のようにサンヒルナという対になる属性の精霊を憑依させたときになる。

ちなみに符養戦での複数憑依での飛鳥は怒りモードが発動していたため例外。

昨日はグラントの戦いで、本来の目的を忘れて家に戻っていた。といふことで次の日の放課後、私は符養とともに鉄のおじさんの鍛冶屋にきていた。

「おじさん、持つてきたよ。」

「おおー！ そうか、なら見せてくれ。」

私はおじさんに持つてきた鉱物を見せた。
おじさんは持つてきた鉱物を見て驚いていた。

「嬢ちゃん… こんなに上質な鉱物ばかりとは恐れ入ったぜ。しかもこれは異常なまでに見つかる可能性が少ないとから精靈自身が持ち歩いていると言われている精靈石じゃねえか。」

私はその精靈石を見てみたが、その石を採掘した記憶が無い。もしかするとグラントが入れてくれたのかもしれないと思つた。

「その石も新しい剣作りに使えます？」

「おうよ。これを入れれば魔術の威力が格段に上がるぞ。」

「精靈」という名前が付くから精靈の力を持っていると思つていたが本当にそつだとは…。

あとで鈴から聞いた話だが、この精靈石には魔力が宿つており、その魔力を自分で生産できる石で威力を増加させるのは発動した魔術

に石自身の魔力を乗せるかららしい。

だからいつもより少ない魔力を使えばいつもどおりの威力しか出ないかもしないといつことになる。

「ならお願ひします。」

「了解！なら一週間後にまた来な。今の剣は返つてくるまで使っていいいいからよ。」

一週間後に新しい武器を手に入れると思うとワクワクした。早く一週間経つてほしいと思つくりに待ち遠しかった。

「…あ、飛鳥。」

突然符養に呼ばれてびっくりした。

「な、何？」
「あ、の……、その……」

何か言いたげだが、何を言おうとしているかわからなかつた。しかし、言おうと決意したようだ、

「昨日の精靈が言つていた修行…。」

「…忘れてた。」

サンが昨日言つていた修行…、時々来るから普段は符養としていてと言つていたことを思い出した。

しかし昨日で身体が疲れきつていて回復しきつていな。この状態でやつても能力向上は難しいかもれない。

そのことを符養に話すと

「…だめ。」

の一言で却下された。

修行後、家に帰った私達は各自の部屋に行つた。
私はベッドに突っ伏したままそのまま襲ってきた眠気に従い、眠りの園へ遊びに行つた。

夢は見なかつた。

目を覚ますと知らない天井の下にいた、疲れているのだろうか。
身体を起こして周りを見ても私の家にある部屋の光景ではなかつた。

「あれ？」

思わず声が漏れた。

またツヴァイガ私に何かをしたのだろうか。
しかしそうだとしてもここにある物は見たことがない物ばかりだ。
とりあえずここを探索しようと思つ。
符養もここに連れて来られたかもしれない。

部屋を出て、階段を下りて下の階に行つた。
そこで

「あ、飛鳥起きたの。今日は虎ちゃん達と疲れ果てるまで遊んでたの？」

鈴がいた。

「鈴ーー！」「なーーのーー？誰がーーに連れてきたのーー？」

鈴はよくわからぬことこの顔をして

「…飛鳥、どうかしたの？ーーはあなたと私の家じやない。」

私は今やっと違和感を覚えた。

鈴の口調がいつもと違つ。

いつもの鈴なら私を「飛鳥つか」と呼ぶし、もう少しのんびりした喋り方だ（眞面目な時以外は）。

さらに初めの鈴の言葉に含まれていた単語「虎ちゃん」。

私はそんな人は知らない。

つまりこの人は鈴であつて鈴ではない別の人なのだ。

「あなた、誰なの？」

鈴が衝撃を受けたような顔をした。

「飛鳥…まさか記憶が無くなってしまったの？」

「あなたは鈴の顔をしているけど私が知つてゐる鈴じやない。鈴は普段私を『飛鳥』とは呼ばない。」

「飛鳥…、どうしちゃつたの？私を忘れ…」

「冗談はもうやめてよ。もう冗談じゃ済まさないよ。」

私は心の奥で「やつぱりつづつ風に喋るのはダメなの？」と言つ

ながら笑ってくれる鈴を期待していた。

しかし、

「……」

黙ってしまった。

そして

「ふふふふふ

突然笑い出した。

と思うと突然普通になり

「あ～、面白かった。なんで飛鳥がいきなり始めるから困惑っちゃつたじゃない。けどなんでこんな」としようつと思つたの？」

彼女は私が「冗談でやつていたと思つて」いるらしく。

仕方がないから彼女を氣絶させて外へ出て現在地を確認しないと。彼女を氣絶させるために剣を抜こうと手を腰に当てたが、

剣がなかつた。

寝るときはそのまま外すのを忘れて付けたままだったのに無くなつている。

さらに氣づいたことだが、見たことない服を着ている、自分だけじやなくて鈴も。

そしてさらに鈴が大きく見えた。

私と鈴の背は同じ位だったはずなのに鈴が圧倒的に高い。

「いいで私は確信した。

私は別の世界に来てしまったのだと。

しかしその場合、二つの疑問が残る。

一つ目は本来この世界に存在する私はどうなったのか。

二つ目はなぜ私がこの世界に来てしまったのか。

「飛鳥、どうかしたの？」

鈴が心配する。

しかしそれは今重要じゃない。

ここはどの世界なのだろうか。

ここがウラルという考えはあるだろうか？

ウラルの物がクロスワールドに流れてくれることは知っているがクロスワールドの物がウラルに流れてくれる」となど聞いたこともない、人なんて余計にだ。

しかしここにある物はウラルから流れてきたという物と似ている物がいくつかある。

「飛鳥、本当にさつきからどうしたの？」

確信した、ここはウラルだ。

壁に文字が書かれた紙が貼つてあり、その文字がウラルの文字だからだ。

先程から鈴が話しかけていることに気がつかなかつた。

事情を話して協力してもらうのが一番だわつ。

「あの…、実は私あなたの知つている飛鳥ではないんです。」

「？」

意味不明だという顔をされた。

「何らかの事情でこの世界に飛ばされて来たんです。ここではどうなったのかわかりませんが、多分大丈夫だと思います。」

「……そう。……なら帰る方法を見つければいいんだね。」

……え？

簡単に受け入れられた。

「え？ ちょ……すんなり受け入れちゃっていいんですか？」

「慣れてるからね。」

……さつきの言い方はクロスワールドの鈴に似ていると思った。

「へえ、向こうでは私はそんな性格してるんだ。」

「おかげでこちらは疲れますけどね。」

「けどこっちの飛鳥だって一人称が『ぼく』だし、人見知りな性格してるよ。」

それは自分も同じだ。

鈴や符養に対しては慣れてるからいいが、他の人には人見知りが激しい。一人称だって1ヶ月前までは「ぼく」だった。

私ってそんなに性格が変わったのか……と自分の変化を実感する。

その後もお互いの友人関係などを話した。

その中で特に気になつたのがお互いの世界の関係だった。

「つまり、一つは平行世界ね。パラレルワールド」

「ぱりれ…何ですか？それ。」

「『もし』の世界って言った方が一番いいかも。」

鈴が言つには例えば、一つの選択肢があるとする。

自分がAの選択をしたとする、すると同時に自分がBを選んだ世界もできる。

このBの世界はAの世界とは一度と交わらない、ゆえにAからみての平行世界となる。

「けど私はあまり先の未来が変わらない選択ではすぐに、一つの世界がくつついて元の一つの世界になると思うの。…で、一人の飛鳥が入れ替わったのはこれが関係あると思うの。」

「え？私の世界と鈴さんの世界は全く違いますよ？」

なんだか「鈴さん」という呼び方が懐かしかった。しかし鈴はいつもの呼ばれ方なのか気にせずに私の質問を返してきただ。

「なら、全く違う世界でなんで同じ人が産まれたの？」
「それは…」

答えが出なかつた。

「これはお互いの世界がくつついてきている証拠。同じ顔でも名前が違うというような人がいる場合はまだそこまで深刻ではないと考えた方がいいけど、一緒ならもつ危ないと考えていいわね。」
「そんな…。」

これは間接的に世界は一つになり、一つの世界はバランスが崩れて滅びると言っているようなものだった。

「まあただの私の推測なんだけどね。」

「真に受けていた私が恥ずかしかった。
しかしそんな危険があると思い続けなければいけないことがなくなつて安心していた。
ふと他のことを話しそぎて鈴に聞いていなかつたことがあったのを思い出した。」

「そういえば聞きそびれていたんですけど、」

「何?」

「私の家族つてどんな人なんですか?」

先程の会話で飛鳥はここに居候しているだけで別に姉妹ではない（鈴の妹は現在海外に留学中）と話していた。

ならどういう経緯でここにいるのか、自分の家の人はどういう人なのか、それを知りたくなつてきた。

「飛鳥、一応こっちの飛鳥はあなた自身じゃないからあまり詳しくは話せないけど…私もあまり知らないけどね、あなたは元は神社の子だったみたいよ。実際にあなた式神を呼び出すこともできるし。そ…」

「こっちの私も召喚が使えるんですか!?」

「え?まあ…、そうだけど…。…『も』?」

召喚が使えるということはこちらの世界にもサンとルナがいるということ、もしくはどちらか一人がいるかもしれないということ。二人は人外なので元の世界に帰れる方法を知っているかもしれない。私は鈴を無視してすぐに彼らを呼び出しあげた。

「『『^{マスター}契約者飛鳥が命じる、我の前に現れ、我を元の世界に返したまえ。 いでよ…サン、ルナ！…』』」

召喚時にあらわれる魔法陣は浮かび上がらなかつたが、私の目の前に一人の友人が現れた。

「おい飛鳥、なんだよさつきの呼び出し方。いつもと違つて戸惑つたぞ。」

「私たちの呼び方も違いましたよね。…サンとルナでしたっけ？」

この一人はこっちの世界では違つ名前だつた。
せつからく一人に会えたと思つたが…。

までよ、二人は私と初めて会つたのが私が産まれた時だとしたら…
名前が無く、名前を幼い私に付けてくれと頼んだのなら私はこの二人の名前を知つてゐる。

「…黒、白。ある事件があつて人手がほしいの。手伝つてくれる？」

「お？なんだかいつもの飛鳥っぽくないがまあいいぜ。」

「飛鳥ちゃんの力になれるなら。」

私は一人に私はウラルの飛鳥ではないこと、クロスの一人のこと、私がどうやってここに来たのかを一人に全て話した。

「なるほど、そういうことか…。」

「で、飛鳥ちゃんは私たちに何をしてほしいのですか？」

「「」の世界の空間の壁に穴をあけて私をクロスまで運べない？」

「いやいやいや、普通に無理だつて。」

「飛鳥ちゃんすみません。私たちは式神、幽靈が人に触れるようになつただけのような存在ですからそういう超能力的なものは…。」

即答だつた。

私は希望を失つた。

私はまた同じ現象が起こるまでここにこなればいけない。落ち込む私に鈴は

「飛鳥、そんなに落ち込まずにここで私たちといこの暮らしを楽しむのもいいと思うわよ。…もちろんいつもの飛鳥も帰ってきてほしいと思つていいけど、向こうでも私がそつやつて言つていいかもしれないし、なによつすぐここに帰るなんて寂しいじゃない。」

と言つてくれた。

そうだ、別にすぐ帰らなくとも余裕はある。

ここ暮らしを体験するくらいいいじゃないか。

なぜ私はすぐに帰りたいと思つたのだろう。

これを逃したら一度と体験できないことをなぜ…。

「けど私が帰らなかつたらクロスに飛ばされたかもしれない私はどうするんですか！？」

「だから言つたでしょ、向こうでも私がゆつくりこいつつて説得しているつて。…どうせあなたの家にサプライズ訪問しているわよ。私がそんな性格ならそうするかな？」

私はのほほんとしている鈴を思い出していた。
確かに彼女ならありえそつだつた。

「わかりました。けど帰れる方法が見つかり次第私は向こうに帰ります。」

「え？ うん、わかった。…………嫌われた？ もしかしてシンデレラ？」

……鈴がなにやら気にしていたが気にしないでおけ。私は白と黒をかえした。

黒は「ルナか… 今度飛鳥に頼んでみるか」と言っていた。

違ひ世界（後書き）

飛鳥が普通の女の子になりました。

この章は伸ばそうと思えばいつまででものばせるのですが（このまま飛鳥をウラルに永住・おっとだれか来たよつだ）下手をすると次の話で終わるかもなんですね。

ではウラルの鈴の説明を今回はします。

音鶴 鈴 しゅうづ 秋雨高校一年生

ウラルの飛鳥が居候している家の主、成績優秀。

親は海外にあり、妹もアメリカに留学している。

お嬢様だが、普通の人たちと変わらない生活をしている。（これには少し深いわけが…）

どこかで訓練したのか戦闘ケンカでは異常なまでに強い。

ウラルの友人

その夜、私は鈴の家に泊めてもらつた。（元々ウラルの私が居候していたためここで寝るのは普通だと鈴にあきらめていた）そして夢でウラルに住んでいる私がクロスに飛ばされた夢を見た。

朝、見た夢を思い出しウラルの私も異世界に飛ばされていたことで一応無事なことに安心する。

そのことを鈴に話すと、

「あの『飛鳥』は向こうの私に世話になつていいのか…。」

安心しているようだつた。

クロスの鈴も多分同じだろう。

「そういえば」

思い出したように鈴が話を切り出す。

「昨日メール…手紙を離れているところに一瞬で送信できる機械があるんだけど、それで友達に事情を話したんだけど、『今日会わないか?』だつて。どうする?」

「あ、お願ひします。一応私の友人にどんな人がいるのか知りたいですし。」

そこにウラルの符養がいればどんな人なんだろう。符養とは違つて明るい性格なら笑うかもしれない。

「どうしたの？ずいぶん楽しそうだけど？」
「い、いえ、なんでもないです…。」

僕、私は鈴に連れられて外に出た。

監禁生活をしていた姫が初めて外に出た気分になつた。

外は灰色の地面に覆われ、両横も灰色の壁に挟まれていた。

「ウラルの地面は土じゃないんですか？」

「一応土なんだけど車のためなのかな？そういう乗り物があつてそれが走りやすいように土をコンクリートつていうやつでコンクリートを割れば土が見えるわよ。」

ま、そんなこと生身の人間ができることじやないけどね。
そう付け足した。

私はこんな堅いものを壊せるものを見てみたかった。

…魔術なら簡単にこれを壊せるかもしれないな、と思つてみたが今使えたとしても事件になるな。

しかし、

「飛鳥、すごい田^ミが輝いているよ。」

「だつて、見たこともない物ばかりですよ。ウラルの物は一生で見れるか見られないかくらいの物なのにこんな『どこにでもある』みたいな状態なんですか？」

「確かにそうかもね。…飛鳥はこの世界について研究してたの？」
「い、いえ、どちらかといつと向こいつの鈴がしていたくらいかな。」

気づかずクロスの鈴に話すような感じになっていた。

鈴は

「へえ、言われてみれば私もファンタジーに興味あるかな?」

と答えた。

気にしていないようだった。

なら普通に接すればいいかなと思ははじめた、さうに考へてみれば鈴に丁寧語で喋ることがおかしいんだという考へに達していた。

「でしょ? やっぱり鈴も根本の性格は一緒なのかな?」

「かもね。あ、こりよ。」

話に夢中になつて危うく通り過ぎてしまつといつだつた。

私達は鈴が指した方向の家の中に入る。
私は知らない人の家なので緊張した。
中に入ると人が迎えてくれた。

「よお、神にも事情話して向かつてもらつていいんだが、よかつたか?」

「大丈夫、問題ないわ。」

「ええっと、その人は?」

「あ、こいつは水星竜。私の幼なじみで何でも屋。」

「何でも屋はお前もだろ? …てか、本当に俺のことわからないのな、いつもなら俺を見る度に睨んでたのに。」

…この人と私の間に何があつたのだろう。

竜と呼ばれたその人は私の顔を見た後、鈴に視線を戻し、

「で、俺に何させようと?」

「あの力で私達を飛鳥の元の世界に連れてって。」

「…何がしたいか知らないがそれは無理だと思つゞ。あれは万能じやないつて何度言えばわかるんだ?」

何のことだろ?」

「鈴、『あの力』って何?」

竜が「へえ、タメ語か。」と言つていたがタメ語という意味がわからなかつたのであまり氣にしなかつた。

「『あの力』って言つるのは超能力のこと。竜はそう言われるのが好きじやないから『あの力』って言つているだけ。」

超能力…?

どういうものか理解できなかつた。
もしかすると魔術の一種かもしけれない。

「飛鳥、超能力は魔術の一種じやねえからな。」

竜に心を読まれた!?

これが超能力?

「ちげえよ、もっと強大だよ!」

これも読まれた!?

超能力恐るべし…。

「はあ…。飛鳥の天然つぱりはどの世界でも変わらないみたいだな。
こいつの勘違いは正すのに苦労するぜ…。」

この飛鳥の天然っぷりは竜にしか適応されない。

ついでにいうとさつき竜はただ飛鳥の表情を見て何を考えていたか推測していたのだ。

飛鳥はこれに気づいていないのである。

「飛鳥…話を戻すけど、いい？超能力は魔術と関係ないわ。けど魔術に近いようなものね。だけど大切なのは科学と魔術が交差しない限り物語は始まらないの…！」

「…ならもう物語は始まっているよね？」

「おい飛鳥、お前よくそんなツツ『//』を出せせるな。…ああ、元ネタを知らないからか。」

…本当にウラルでは知らない単語が出てくるな…。
これが蔑称なら怒りたくなるな。

「竜さんの…『ちゅうのつりょく』…でしたっけ？それが使えないなら他の方法つてあるの？」

「…無いわね。」

あつさり言われた。

「けどいつかは見つかるはず。…よかつたあー、今がGWで。」

『ゴールデン』ということはすゞいいことなのだろうか？
まあ鈴や竜が安心しているから大丈夫なのだろう。

「じゃ、時間があることだから他の友達にも会いに行こうか。…
つて、逆に来ちゃったか。」

……時間？

何の時間だろ？

と思つていたら上の階から慌ただしく走つてくる音が聞こえた。

「飛鳥いるの！？」

「異世界の飛鳥と入れ替わつたって本当！？」

二人の男女が部屋に入ってきた。

その内の一人は見たことある人だった。

「琴葉！」

召喚科四年、私と符養と一緒にグランと契約を結びに行つた人、琴葉その人だった。

「！」……誰？ その人。 「

あ、この世界の琴葉は名前が違うのか。

私は自分がこの世界の人の名前が向こうの世界の人と違う名前であること（とは言つても実際鈴にしか会つていなかつたが……）に驚いた。

「やっぱり飛鳥であつて飛鳥じゃないのか……。」

少女は残念そうな顔をした。

「すみません。」

私はそういう言葉しか言つ」としかできなかつた。

「べ、別に飛鳥は謝る」となによ。」

「ですけど……。」

「飛鳥、俺はこれは事故だと思つ。だから仕方ないと黙つ。お前も仕方ないと思つて思え。」

少年の方も私を励ましてくれる。

しかし私は改めて今の私は私自身ではないことを感じた。

「ま、落ち込んでいても仕方ねえから自己紹介するわ。俺は水星雷牙。飛鳥とは同じ中3だ。」

「で、私は水星虎。私もここと同じで飛鳥の同級生。」

虎はそのままと、自分の胸に手を当て

「わからない」と、得意気に話した。

私は返し方がわからなかつたのでどうあえず微笑んでおいた。

鈴は

「虎ちゃん、別にわからないことは家で私が教えるから大丈夫よ。向こうの世界と少し違う点があるかもだけど常識知らずとかじやないし、こっちの勉強がわからないくらいだからね。」

「ふ、こっちの飛鳥の時は私が教えてたのに……。」

「それも私が教えてました。」

鈴が即答で冷たく返す。

「学校でわからなかつた時の」とです……。」

なんだろ？ 鈴と琴葉が私の取り合いでしていりゆうにしか見えないんだけど……。

「ならもう一つ方法で分担すればいいだろ？ はい、この話終わり。」

竜が無理やりしめる。

するとまた一人、部屋に飛び込んできた。

「チーツス。飛鳥は大丈夫か？」

「大変な状態だから呼んだんじゃない。」

「？ 僕には普通に見えるけど？」

私は一応会釈しておいた。

そうした直後後ろに後ずさり

「飛鳥じゃ……ない……ー？」

といつ少し失礼なことを言つた。

「すみません、私も飛鳥なんですが……。」

「神、状況も詳しく知らないでそんな失礼なこと言つんじゃねえよ。」

「

雷牙が怒りながら神に飛びかかる。

神はじやれているのだと思つて笑いながら相手をする。

「神、遊びながらでもいいから話を聞いてよ。」

神という人はこういう扱いを受ける人なのだなと私は思った。

「なるほーどーねー。」

「伸ばすなうぜえ。」

「雷牙とー戦いながらーならー仕方ないーだろ? 竜さんよお。」

「切れよ普通に。」

事情を聞いた神は私のほうを見る。

みんな反応は似たようなものなんだと思ひつ。
しかしこの人ふざけすぎでしょ。

「神、飛鳥が睨んでるわよ。」

「え?」

「神さんふざけすぎだから飛鳥がイカついているんだよ。」

「この反応はこのちの飛鳥と同じだからな。」

虎が私の思いを代弁してくれた。

……

「あれ?」

「? どうしたの? 飛鳥?」

「いや、なんか足りないなーと思つて……。」

しかし何か全くわからない。

私が神にもう慣れてしまつたため、何かをしてしまひつのを忘れている。

「……あ、紹介。」

竜が思い出す。

その言葉に私も思ひ出す。

「やつだ紹介。神さんの名前しか聞いてないんですよ。……えーっ
と、『水星』とか、『音鴨』とか、こうのうのをウラルではなんて
言つてですか？」

「名字？」

「あ、そういうんですね。あと詳しいこととかを聞いてないです。」

みんな『ああ～』と思い出す。

私は神に顔を向けた。

「……あ、えーっと、俺は戸富神。とみや 竜達と同じで高一だ。あとこの
つらと一緒に何でも屋まがいなことを学校でやつていてるかな。」
「そういえば鈴たちの『何でも屋』って詳しへばざりついとをや
つているの？」

「まあ正しくは『探偵部』っていう部活なんだけど、まあ学校で困
つている人の依頼をうけて解決するっていう活動かな。」

「あ、こいつでいう組織ギルドみたいのですね。」

みんなキョトンとしていた。

あれ？ 私何が変なこと言つたかな？

「おー飛鳥、やっぱりお前の世界つて魔術が存在しているんだな。」

「え？ はい、そうですけど？」

「あああークロスに行つてみたいー！ 飛鳥が羨ましいーーー！」

「え？ え？」

鈴の言つていることがよくわからなかつた。

私にとって元の世界の生活は普通だったからわからないだけかもし
れない。

「け、けどクロスではダンジョンにいくと魔物モンスターがでるから危ないですよ?」

「モンスターなら私は問題ないわ。私、我流の格闘術持つてあるし、竜は超能力があるから。……神はまあ、……足手まといね。」

「ひどつ！」

「我流の格闘術つて……喧嘩殺法と素直に言えよな。」

確か鈴も我流の格闘術を使う時あるな。さすが平行世界、と誉めてあげたい。

「なーなー飛鳥、飛鳥の世界つてこんなかんじ?」

神が本を持ってきた。

その中身を見ると絵がたくさん書かれており、その絵の人が何かをしゃべっているが

「あの、神さん。」

「? 何だ?」

「私、ウラルの文字読めないんですけど……。」

「え? こうやって普通に話せるのにか?」

「ええ。なんで話す言葉が同じなのに書く言葉は違うんですかね。」

「ねえ、ちょっとクロスの文字を書いてよ。」

虎に言われてさらに文字を書く道具を持たされた。私はある単語を書いた。

「うわあ、本当に違うのね。」

「これなんて読むの?」

「これは『飛ぶ鳥』、つまり『飛鳥』と書いてあります。すぐに単

語が思いつかなかつたので自分の名前を書いたらやいましたが良かつたですか？」

「よかつたよ。意味不明な言葉よりもいいよ。」

私は虎に讃められて照れる。

「ま、今から帰れるよつになるとまでは私たちの言葉を覚えてもらひことになるんだけどね。」

……また私は鈴によつて変えさせられるのか。
そう思つと私は今の自分の未来を考えると倦怠感が襲つてくるかんじがした。

「大丈夫よ飛鳥。ちやんと私たちが守つてあげるから。」

「うん……。」

「なんだ、元気ねえな。」

「私達は力貸すよ?」

「ありがとう!」とこます。けどまた大変な目にあつたんだなつて思つたら……。」

私は少しの間鬱状態から帰つてこなかつたらしー。

ウラルの友人（後書き）

登場人物増えました。（とはいっても少しの間だけだけど）
けどこの登場人物の数はクロスの世界の登場人物と同じ位じやない
ですか？

ああ、クロスの人間が書けなくてないと悲しい。

今回はウラルでの主人公の竜です。（主人公だからってそんな回は
一つも書く気〇ですけど）

水星竜　みずほしりゅう　秋雨高校一年

三週間前に突如超能力に目覚める。その力は見たものは黙秘してい
るため不明だが強力な力を秘めている。
飛鳥の元保護者から「飛鳥を頼む」という約束をしているが、他の
人にはそのことを隠している。

「『れは』『はる』や『しゅん』って読むの。」

竜の家から帰つてきてすぐ、私はウラルの文字を覚えさせられていた。

もうすでに私は「ひらがな」という文字と「カタカナ」という文字をマスターしていた。

そして今「かんじ」という字を習つてこる。

それよりも普通なら9年近くかかることを5年でマスターしろところのはさすがに難しこと思つ。

「飛鳥一回教えただけで熟語とかも全部覚えるつてす、」
「や……やうかな。」

「やうよ。普通なら一回で覚えるなんてできなにわよ。……読みは大丈夫だつたけど書ける?」

「うん、大丈夫だと思つ。」

「じゃあ、この本を今日中に読んでおこて。全部で23巻あるけど読めるだけでいいからね。」

と、鈴が本を私に渡す。

私はその1巻を手にとつて読み始める。

挿し絵があり、文字ばかりだけど私の世界の本より神に渡された本に似ていると感じる。

「おお、もう早速読み始めるんだ。」
「……」

鈴が何かを言ったようだけど私は本を読んでいて聞こえなかつた。

鈴は

「ははは……」のところもせつくりなんだ。」

「鈴」

「は、はいー?」

「うぬやこ。喋らないかどこか行つていて。」

鈴は静かに部屋を出る。

全く……この世界の鈴はあつちの鈴と一緒にうぬやこな。
まあどこか行つてくれたし、静かに本を読むか……。

。 。 。

思えた。

「帰りたい」

無意識に思つていていたことが口に出てしまつた。

そうだ、私は帰りたかったのか。

そう思うと私の目から涙が出てきた。

私は誰もいなか周囲を見回し、誰もいないとわかると思う存分泣いた。

私は悲しかつた、寂しかつたのだ。

知つている人に似てゐる人は大勢いたが、本人はいなかつた。

私はそのことに寂しさを感じていたのだ。

楽しそうとは思つておらず、「帰りたい」ということしか考えていなかつた。

今なら符養と一緒に修行していただろう。

それも今は無い。

鈴につきあわされることも無い。

符養が夜私のベッドに入つてくることもない。

きついサンヒルナの修行も、モンスターとの戦闘自体無い。

だがそれは私にとつては意味不明な世界にひとりで飛ばされる」とよりはましだつたのだ。

私が泣いていると鈴が扉を開けて駆け込んできた。

「ちよ、飛鳥！？なんで泣き始めるのーー？」

「どう……して……見てたの？」

泣きながらでうまく言葉が出てこない。

「飛鳥に言われたけどやつぱり涙になつて、一瞬に行かずこいつを
り見えたの。そしたらこきなり泣き出すから。」

「やう……。」

「やういえばどうして泣いてたの?」

私はまだ気持ちが落ち着かなかつたから落ち着くまで少し黙つてい
た。鈴もそのことを察知してくれて落ち着くまでの間、何も言わなかつ
た。

ようやく落ち着いた私はすぐに話し始める。

「やつぱりこつも友達がやつてくれることをしてくれなかつたこと
が寂しくて……。やうん、本当は素直に帰りたかったの。私は私の
世界に帰りたい!どうしてこんなわからないところに飛ばされたの
!?友達はみんな私の知つている友達じゃなくなつたし!もう……
「わかつたわかつた。また怒つてきてるよ。」

「あ、ごめん。けど飛鳥がそう思つてこるなん……。」

鈴は悲しそうだった。

しかしなぜか少し嬉しかつた。

「だ、だけど私はこっちの鈴達と離れたくない。私にとつてはどの
世界の鈴でも大切だから。」

「ふふつ、私達自身は出合つてつ日田なのにな。けど私はそう感じ
ないんだよね。前から一緒にいるみたいだ。まあこっちの飛鳥と住
んでいたからだとは思うけど。」

不思議と笑顔になれた。
しかし鈴はそのあとに悲しそうな顔をした。

「けど、私も本音ではこっちの世界の飛鳥を心配しているの。けど
私にはどうすることもできない。だからあなたを帰す方法を探して
るの。ううん、あなたが帰れば飛鳥が帰つてくるつて思つてるから
……だからあなたを帰したいだけ。……だけど、私もあなたのこ
とが大切よ。」

鈴は微笑んだ。

私はまだ帰れるわけではないのに鈴との別れが寂しくなつて鈴に泣
きついていた。

「はこはい、今日は簡単に引き下がつたけど明日竜を叩き折るから
今日は私が言つたことを終わらせよ。」

ずっと泣いていた私を見て泣き止ませるためにか鈴が言つた。
しかしあるワードのせいで私は鈴の言葉の前半しか聞けなかつた。

「え……鈴、竜さん叩き折つたら竜さん死ぬんじゃ……？」
「言葉のあやよ。本当に叩き折る気は無いから。」
「な、ならいいけど……。」

鈴は立ち上がり、夕食をつくるつとキッチンに向かつた。
私は少し考えてから本を読むのに取りかかつた。
あと半分、読み切ろう。

クロス

飛鳥がおかしいと符養から聞いたんだとツヴァイが〇に話した。

今は急いで魔術科に向かっている。

符養は飛鳥が別人みたいになつたとしか言わないらしい。

「やつぱり片方は抜けているとはい、裁きの者シャッジメントの中でも派閥とかあるのか？」

「あいつは特別な所だつたからあまり交流がなかつただけだ。そうでないとしてもあいつはあまり人と接さないタイプの奴だ。」

「そうか、俺はどんなやつか知らないから是非見てみたい……つて、なんでお前もついてくる？」

〇が見た限りではツヴァイは〇に内容を伝えたあと、クラスメートと軽い組み手をしていた。

「用事を思い出したと抜けてきた。俺だつて今の飛鳥が心配だからこうして様子を見に来てだな。」

「お前のそれは心配じやない、単に面白がつてているだけだろ……。」

〇とツヴァイは同じ科だ。

だから2人は1ヵ月前あの事件の時以降、（ライバル的な関係として）よく会話したりよくチームを組むことがあり、仲良くなつた。

そんな仲良し2人は魔術科の飛鳥のクラスの前に到着した。

0は教室に入り、飛鳥を見つける。

飛鳥も入ってきた0をみて「そんなはずは……」という顔をしていた。

0が飛鳥に近づき、言葉を発そうとしたが、飛鳥のほうが早かつた。

「骸亞…さん…？なんでこんなとこに…？」

若干目に涙を浮かべているのが見えた。

0は「骸亞」というワードを聞き、懐かしい日々を思い出して笑いがこみ上ってきた。

ツヴァイと元々飛鳥と話していた鈴はなぜ0がこんな反応をしているのかがわからなかつた。

確かに今の「クロスにいる」飛鳥はいつもの飛鳥じゃない。だつてこいつはウラルの飛鳥なんだからな、と0は思つた。0はクロスの飛鳥にもみせたことがない優しい口調で言つた。

「久しぶりだな、元気だつたか？飛鳥……。」

ウラル

私は本を読みきつたと同時に、同時に、晚御飯を食べていた。鈴は驚異的なスピードだと言つていた。

私は元々本が好きでとてもぶ厚い本ばかり読んでいてそれを読み続

けらうちにぶ厚い本を30分くらいで読み切つてしまつぽどになつていた。

鈴が貸してくれた本は500ページもなかつたはずだから一冊5分から10分で読み終わつてしまつ。

「いやいや、速読のとよく知らないけどラノベ5分はさすがに無理よ。絵本じゃあるまいし。」

「鈴はこれどのくらいかかるの?」

と言つながら鈴の本を一冊見せる。

「えつと……集中すれば2、3時間くらいじゃないかしら。」

それが普通くらいなのかと思つ。

そのとき、私は誰か懐かしい人に会つた。

いや、そんなはずはないと思い直す。

私はさつき……今も鈴と会話していた、他の人がきた気配もない。しかしこの感じとつた記憶も私自身のものだ。

つまりこの記憶はクロスにいる私のものだ。

二人揃えば別人といえど違う世界の自分達なのだ。

……だけど何故この記憶を私が感じたのだろう。

夕食後、鈴にそのことを話すと

「うーん、その記憶は向こうで誰かが送つたとか。」

「なんで？」

「それは、事件を解決できる重要な人物が記憶のビジョンの中にいたからじゃない？」

「けど、その記憶は懐かしさが強くて内容が見えないの。」

「まるで暗号ね……。」

「鈴、ウラルの私が会つたら懐かしいって思える人って誰？」

「やっぱり親じゃないかしら。……待つて、もしかするとあいつ…

まさかね。」

「あいつ？」

親以上に大切な人がいたのだろうか？

まあ私も親がいないし、サントルナが親みたいなものだけど。

「骸亜つていうんだけどね。飛鳥の親代わりの人よ。……つていつも私や竜と歳は変わらないんだけど。けど飛鳥にとつてあの人があ一番大切だったみたい。あいつが死んだとき、すごい怒つて竜に攻撃してたっけ。」

「死んだって……竜さんが殺したの！？」

「いや、本当に死んだかすらわからないけど建物内の戦闘でね、私たちが外に行つたあと二人だけで闘つてたの。で、竜が勝つたらしくて建物から出てきたんだけどね、骸亜は出てこなくて結局建物は崩れたわ。けど、瓦礫からあいつの遺体は出てこなかつたの。」

「だけ出でこなかつたことからその時のウラルの私は竜さんが殺したと思い込んで……。」

自分がものすごく怒るとどうなつてしまつのだらつ。

私だとウラルの自分より酷くなるかもしれない。

剣をもつて強力な技や魔術を詠唱がめちゃくちゃな状態で乱発して魔力が切れるまで容赦なく敵に撃ち続けるだらけ。

「けど思い返してみれば、その時以来飛鳥がキレたところみてないな。あれから竜にはキツいことばかり言へけど、基本楽しそうだし。

「 そりなんだ。けどそれまでにすごい時間からなかつた? 私自身がそりなんだから。」

「うん、だけ今でも飛鳥は私たちに心を開いてくれてないと思つ。

……飛鳥、」

「? 何?」

「私こっちの世界の飛鳥が帰つてきたらあの子を私の家で養子にしたいんだけどいいと思つ?」

「え……」

言葉が見つからなかつた。

私はウラルの鈴と過ごしていて姉ができたみたいで嬉しい。

しかしウラルの私はどう思つだらうか。

もし私が「いいと思う」と言つたらあつちの人生を勝手に私がきめたことになるのではないか?

「そ、そういうのを私が答へてもダメだと思つ……。」

「やつぱり? けど自分がこっちの飛鳥の立場ならどう?」

「私はいいと思う。鈴はしつかりした人だからこっちの私をしつかり守つてこると思つから。」

「そんなこと言つけどあなた、自分のもとの世界に帰つたら私に姉妹になつてほしいうて言われるのよ。」

「それは速攻で拒否する。」

クロスの鈴も「ひの鈴みたいにかやんとついてくれて年上なら考えるけど。

……あ、符養がいたから無理か。

彼女なら「私が飛鳥の妹になる……」つて言つた。

「……なんか私の場合ほんとしてくれたのに傷つく。」

鈴が落ち込んだ。

「「ひのちの鈴はあつちの鈴を知らないからそんな反応するんだよ。一度会えば私が拒否する理由わかると思つ。」

「……そんな」と言つてこるけどもしかしてあつちの私のこと嫌いなの?「

「嫌いじやないよむしろ好き。けど、一緒にいると疲れるつていうか……。真剣な時はウラルの鈴みたいに…かつこいいのこ……。

「

私はかつこよくな「よ、と鈴が言つた。
いや、多分そう言つた。

急に田の前が真つ暗になつて意識を失つてしまつたからだ。

そんな感覚だつた。

地面や壁といった堅い感触がなく、どこにも触れていない。
と、堅い感触が戻つた。

「飛鳥つち！」

その声で目が覚めた。

そこには鈴がいた。

だが、さつきより少し幼い。

それと呼び方。

ああそつか。

私はクロスに帰つてきていった。

絆（後書き）

クロス帰ってきた飛鳥。

しかしまたウラルへと行かなければならぬ事情ができた…？

異世界での物語もいよいよクライマックス！？

次回！『別れ』

……と、半分あつていて半分はずれでいる次回予告です。

次回は飛鳥の世界の物語ではなく別世界の別時間での人物の物語でもやううかなと思つてたり思つてなかつたり……。

異世界と異世界での物語が交差し始めた

とは言つてもまだまだ序章なんですけどね

戸宮神 しん
秋雨高校一年

竜の親友だが竜は否定。

中学は竜や鈴と違い、中学一年まで予知夢を見ることができた。

竜達とは中三の秋に偶然出会い、意気投合して仲良くなつたらしい
……。

お調子者でよく鈴や竜からスルーされることが多かった。

異世界の物語

「これは、飛鳥がクロスという異世界の飛鳥と入れ替わったときの事件より少し前……俺が高校に入つてすぐくらいだったかな……。

俺は教室でぼーっとしていた。

昨日のこと思い出していたからだ。

顔には飛鳥とかいう少女に殴られたあとが無数にある。

そんなとこりに神がきた。

「竜、お前昨日あんなことがあったのによく学校に来ようと思つたな。もしかして真面目ちゃんかあ？」

「ううせえ。なんか休むと落ち着かないと思つたから来ただけだよ。今日はほとんど寝るつもりだ。」

とは言つても昨日の傷の痛みせいであまり眠れないとは思つが……。神は溜め息をつき

「お前、骸亜のこと考えてたろ。」

「ああ。」

「……やっぱりあいつのこと……好きだったのか？」

俺は無言で神を二回ほど殴り蹴つた。

まだ足りない気がする。

いつそ殺すか……？

「待て待て！冗談だつて！なにも殺すまではないだろ！」「

「心を読むな。こんなのが冗談でも殺したくなるレベルだ。シリアル
なシーンなら余計に殺したくなるわ！」

「…………すまん。」

…………はあ。

確かに俺は骸姫のことを考えていた。

あいつは瓦礫の下になつた。

俺が殺したようなものになつていたから飛鳥に殴られたんだろうな。

そして、プロローグ的なものはこいつらへんでいいか？

俺は骸姫との戦いを思い出していたんだ。
事はこれの一日になるかな。

神から電話がきた。

俺はいつもの冗談だと思つて電話をとつた。

「もしもし、なんだ？」

『竜、大変だ。』

「あ？ 何が大変なんだよ。」

『とにかくしてくれ。』

俺は神に言われたとおり神の家に向かつた。

その道中、鈴と会つた。

鈴も俺と同じ道を歩いていいる。

「鈴、お前も神に呼ばれたのか？」

「ん？…ああ、竜。ええそうよ。あいつがあんな真剣な感じで話を
もちかけるつて珍しいわね。」

「真剣な感じで話をもちかけること自体少しねえと思つが。」

鈴は「そう？」と云つたが、返事はしなかつた。

まあ確かに最近変なことばかりおこるからな。

だが普通にしていれば真剣な話をもちかけることなど一年に一回か
一回くらいいだろ？。

「わつにえはあいつ落ちついているよつてふのまつてたけど、すこ
い慌てたわよね。」

「そんなん全く感じなかつたぜ？あとお前心理学者になつてみれば
？」

「嫌よ。私は私の道があるの。」

そりばなく言つてみたら即答で拒否された。

俺は神が俺達をよぶ意味を考えていた。

……。

「……なんか

「特に必要じやない物をなくして慌ててこそうね。」

鈴が俺と同じことを考えていた。

鈴もそれに気づいたようで俺を見て微笑んでいた。

しかし俺達はこうふざけあつていただけなんだ。

本当は神がくだらない理由で俺達を呼び出すはずがない。

あいつは馬鹿だが真剣な時にしか真剣な顔をしない、真剣な時にふざけることはあるが冗談で真剣な真似をするなどありえない。

ましてや焦つているのを隠していた、これはもう真剣そのものだと確信してもよいだらう。

神の家の前にきていた。

俺と鈴は顔を合わせて同時にうなづく。

さつきまでの冗談を言つ合う2人ではない。

そんな気も起きない、もし鈴がそうするなら俺は鈴を全力で殴る。

「入るぞ。」

「うん。」

インターホンを押し、ドアを開ける。

「神、俺だ。あと鈴も一緒にだ。」
「……れ

かすかに「入れ」と言つたのが聞こえた。
入つてそのまま奥の神の部屋に入る。
そこに神がいた。

「……よつ。」

元気がない。

いつもうざいくらいテンションが高いがこいつは真面目な時は信じられないほどテンションが低いからな。

「で、話つてなんだ?」

「了承してくれるつて期待はしない……。」

「は?」

「なんでもねえ。」

神は咳払いする。
すぐ話にはいる。

「家に昔友達だったやつから電話がきたんだ。『よつ神、久しぶり
だなあ』って。」

そこまでは普通の旧友だ。
神は続ける。

「そいつとは今は険悪なんだ、あいつが転校するときに起こつた事
件でな。で電話の内容が『明日、全てのやつに絶望を与えようじや
ねえか。もし協力してくれるなら今日夕方5時までに俺たちの秘密
基地に来い』って。」

「それで? 行かなきやいい話じやねえか?」

「んなもん放つておけるか! あいつにどれだけ恨まれてたつて俺は

あいつを親友だと思つてゐる。だからこんなこと止めなきゃいけないに決まつてゐるだろ！？」

「けど、それが罠かもしれない。神の……私たちの性格を考えて私たちを誘き出すための偽の内容かも。」

「嘘だつて構わねえ。友達がそんなクソみたいな考えを持っているならそれを正してやるよ。」

神の決意は固そうだつた。

俺はそういう考えを持つてゐるのは神らしいと思える。

「まつたく、お前はその旧友が心底大切なんだな。」

俺たちはその秘密基地と呼ばれる場所へ向かつた。

鈴の考えは正しかつた。

いや、三人ともそうなるとわかつてゐた。

それよりも……

「敵多いな。俺が中学の時に見たやつらも数人混じつてゐるよ。鈴、そこに箱谷いるよ。」

「あ、本当だ。私もあいつは知つてゐる。お~い、箱谷元氣~？」

箱谷とは中学時代よく俺に絡んできたやつだ。
敵は不良ばかり、全部で100人くらいか……。

まあ俺たちが全力出せばそちらへんの不良なんて何人きても相手にならぬいな。

「鈴、俺とお前で突破する。神は後ろからの援護を頼む。」

「「了解。」」

二人が同時に了承する。

俺が能力を使い、鈴が突進する。

「竜、30秒後に真後ろ。鈴、10秒後に左右同時。」

「なんで私はそんなすぐなの！？」

神は数秒後のこととを予知できる能力がある。
もつと未来を予知夢で見ることができたが、俺や鈴に会う少し前に
その能力をなくしたらしい。

神が言った通り一人が鈴の左右から攻撃、鈴はそれを見ることもせ
ずに相手が攻撃するより先に反撃、相手は一瞬でＫ・Ｏ・。

鈴はそこからものすごい鬼畜っぷりを見せた。
倒した一人を持って、振り回す。

「ちょっ！」

「私はね、今苛立つてるの……。こんなんじや私は満足しねえ！」

本気モードに突入してしまったようだ。

久しぶりだなあ、あいつの本気。

あいつの本気モードを最後に見たのっていつだつたかなあ……。

「なら俺も鈴のストレス発散の邪魔するか……。」

俺は自分の能力を発動する。

「波動圧」

俺が言葉を唱えると、不良全員が地面に叩きつけられて動かなくなつた。

「ちょっと竜！」

イライラしている鈴が獲物を奪われ、怒つて俺に飛びかかってきた。

「なんで私の獲物奪うのよ！」

攻撃しながら俺に怒る。

俺は鈴の休む暇ない攻撃をよけながら返答する。

「お前がイライラしていたほうがあとの強敵とあたつた時に突破しやすいだろうが。」

「竜の言い分はわかつた。けど私はこのイライラを今すぐにでもスッキリさせたいの。だから能力使うのやめろ！」

俺は能力を使用しながら鈴の攻撃をかわしていた。

鈴の攻撃が強くなる。

俺は力いっぱいになつた分攻撃速度が遅くなつた鈴の攻撃を軽々よける、これはもう能力使わなくてもよけれるのでないかというくらい簡単によけられた。

「いい加減夫婦喧嘩はやめにしろよ。」

「「どこが夫婦だ！？」」

一人で神を殴る。

鈴はそれで怒りがおさまつたようで、俺達はやつと先に進めるよう

になった。

やれやれなだめるのが面倒なヤツだ。

奥へ進むと、骸亜がいた。（俺は知らないが神がそういうの）
骸亜以外にも俺らより年下の女の子がいた。

「よう神、そむうのお一方は？」

「俺の今の親友だ。」

「そうか……ちよつとよかっただ……。」

骸亜が何か呟いたが、何を言ったのか聞こえなかつた。

「てめえー！ どうしてこんなことじよつとするんだ！ 昔は……あの事が起つる前までは……」

神が言いかけた時に神は吹つ飛んだ。

「骸亜さんを悪く言つならぼくが許さない。」

少女が飛ばしたようだ。

しかし、彼女は元いた場所から一步も動いていない。

神は起き上がり、「どういうことだ……？」という顔をしている。

「あいつも超能力者なのか……？」

「ぼくは超能力なんて使ってませんよ。これは……」

「飛鳥、それ以上手の内を晒そつとするな。あと、怒りで我を忘れるな。」

「す、すみません、骸亜さん。」

飛鳥といつ少女はビクビクしだした。

骸亜はそこまで怖い存在なのか？

「神。骸亜とは私が戦う。」

「どうした？ここなら普通俺と神でいくといひじやないか？今日は喧嘩好きの血が騒いだつて言つても許さねえぞ。」

「違うのよ。なぜかあの子は私にとつて大切に思えるの。私はあの子を攻撃したくないの。」

知らなかつたが、鈴にはロリコン属性があるよつだ、虎に注意するよつに言つておかないと……。

「わかつたよ、ロリコン。」

「誰がロリコンだ！」

「シヨタコンと神は骸亜と、」

「シヨタコンでもねえよーー！」

「俺は飛鳥と戦う。」

「無視するなーーー！」と鈴が怒つたが、無視。俺は飛鳥に向かつて走る。

骸亜も俺が走り始めた瞬間に飛鳥の前へ走る。俺は波動の能力を使い、骸亜を吹き飛ばそうとする。しかし、骸亜に当たる前に波動弾が爆発する。

「が、骸亜さんに攻撃させません！」

飛鳥が怯えながら言つ。

「竜、しゃがめ！」

神の声が聞こえる。

俺は体をかがませ、術者であると思われる飛鳥に波動弾を撃つ。しかし撃つてすぐ爆発し、爆発したところから黒い服を着た男が床に倒れる。

「黒！」

何もないところから真っ白な服を着た女の子が男に駆け寄る。

「大丈夫だ……、そんなにきいてない。」

「ど……どういふことだ……？」

骸亜がため息をつき、飛鳥が怯えている。そして骸亜が飛鳥の頭にポンと手を置き、

「こいつは陰陽師の家系でな、生まれつきここの2人の式神を使うことができるんだ。」

「なん……だと……。」

超能力者ならぬ靈能力者だつたとは……。

式神の2人は神に攻撃をしようと神に走る。俺は波動圧を飛鳥に撃つ。

飛鳥はまともにくらい、式神の動きが鈍る。

「飛鳥！」

骸亜が叫び、飛鳥を助けに行こうとするが、俺は更に波動弾を天井に放つ。

天井が壊れはじめ、骸亜は飛鳥の元へ行けなくなる。

しかし、俺も鈴と神の2人と分かれてしまった。

そして俺の能力使用制限時間の2時間をきつてしまつた。

やつぱり先に不良をなぎ払つのに使わなきやよかつたな……。

「飛鳥は無事なんだうな……。」

「どうして国を破壊しようとか言つてゐるヤツがそんなに飛鳥にこだわる?」

「国を破壊するなんて嘘に決まつてゐるだろ。……そうだな、俺と戦つて勝てたら教えてやるよ。」

骸亜が俺に走つてくる。

俺も骸亜に向かつて走り、2人同時にお互いを殴る。

俺達は吹つ飛び、お互い立ち上がつた。

「どうしたあーさつきの能力は使わないのか?」

「……生憎時間切れでね。」

先ほどのようにまた殴り合つてはお互い吹つ飛び、また立ち上がる
のが続いた。

「やるな……。」

「……お互いに素手の力は互角か。」

「それだと、俺が能力使つたらお前は負けることになるぜ?」

「俺だつて本来の俺ならこんなじやない。」

それは是非本来の状態を見せてもらいたいな。

「お前と殴り合つて1つわかつたことがある。」

「なんだ……？」

「お前は悪いことのために俺達を呼び出したわけじゃない。」

「……。」

骸亜が黙る。

その反応からして当たりなのだろう。

と、突然天井が崩れはじめた。

「もうそんな時間か……。」

「？」

「気にするな、俺の事情だ。時間がないから話すが、俺の目的は、飛鳥をお前らに託したいんだ。」

骸亜から聞いたのはいきなりで何を言ったのか把握するのに時間がかかった。

骸亜は続けた。

「俺はこことは別の遠くへ行く。飛鳥はついてこれないんだ。……いや、あいつは俺のそばにいてはだめなんだ。」

瓦礫が多くなり、出口をふさがせはじめている。

「……飛鳥を、頼む。」

「行け！俺のことはいい！」

と、目の前に大きな瓦礫が落ちてきて、骸亜の姿は見えなくなつた。

「おー！お前が言っていた遠くつて死後の世界じゃねえよなー？」
「心配するな。俺もあとから行く。」

俺はその言葉を信じてここを出た。

思えば、その時使えない能力を無理やり使つても助ければよかつた。

建物を出た。

外には鈴、神、飛鳥がいた。

「骸……」

「骸亞さんは無事なんですか！？」

神が言いかけたのに飛鳥がそれを押しのけて聞いてきた。

「ああ、あいつもすぐくるって……。」

そう言つていたら、建物が完全に崩れた。

骸亞はそれ以降、見なくなつた。

異世界の物語（後書き）

今回は飛鳥達クロスの物語ではなく、ウラルの物語をやりました。意外に現実のネタを使いつくことができるの楽しかったです。

物語の交差^{クロス}はさらなる交差^{クロス}を生む。

といつまでまた新しい平行世界の物語を書くわけではないです。

次回はちゃんと飛鳥の物語をします。

次回が異世界編ラストかな？

……もしかするともう一回続くかも。

氷冷飛鳥^{ひれいあすか} 14歳

骸姫が大切にしていた少女。

陰陽師の子であり、式神の黒と白とは生まれた時からのつき合い。性格は臆病な性格でクロスの飛鳥と違い、その性格を直していない。

またウラルへ

自分の世界に帰つてこれた。
それを理解するのに数秒かかった。

「飛鳥つち。大丈夫？」

「……」

何回鈴が呼びかけてくれているだろう。
私はずっとぼくつとしていて鈴が何を言つているのかわからなかつた。

「飛鳥つち！」

「つ！……鈴？」

「ぼくつとしていたけど大丈夫？」

「う、うん。」

鈴以外に周りに符養と〇がいた。

自分の今の状態を確認してみると、……今の自分の服はウラルのものだつた。

「……この服……」

「一応お前は今ウラルの飛鳥だ。2人を入れ替えさせようとしたら体までついてしまつたんだ……。」

「え、どういうこと？」

〇は口をおさえたが、鈴が私の手をつかみ、私を起こしながら

「〇ね、空間魔術が使えるの。」

空間魔術……「指定した場所に移動する」という一つある地点Aから地点Bに瞬間移動するような魔術である。しかし、この魔術は数百年前に滅びたはずだ。鈴はそんなこと気にせずに続ける。

「す、じ、よ、ね、こんな魔術使えるなら、魔術科に来ればいいのにね。」

「残念だが、俺は少ししか空間魔術を使えない。さらに言つと俺の魔力の量はお前ら魔術科の生徒の平均的な魔力量にどうあがいても届かん。俺の魔力はさつきの魔術でほとんど空だ。」

……こんな状況で思うのもなんだけど、初めて〇に勝った気になれた。

起こされた私はすぐ符養に抱きつかれる。

それに少しムツとした鈴も私に抱きつき（さらこいろいろなところをベタベタと触つてきたり、頬を擦り付けてくる）、話を続ける。

「あとね、〇の本名が分かつたんだよ。ウリヤリュのあしゅかっちが教えてくれたんだ。えつと……『ガイア』って言つりしないんだけど、飛鳥っち一號に書いてもらつた字がウラルの言葉だからわからないの。ほら。」

頬を擦り付けてくる鈴に字を見せてもらつと「骸瓶」と書いてあつた。

それを見て私はもう「飛鳥っち一號」ハシヅチコムヒとを完全に忘れた。

「それって……。」

「…………はあ…………。」

〇がものす」とい大きなため息をつく。

「飛鳥……、もしかしてウラルでの俺の事件を聞いたのか?」

「え……あ……、うん。ウラルの鈴から聞いた。」

「ちつ……まあ、こうなることなんて予想してなかつたしな……。」

〇は呆れていた。

自分も少し意味がわからない。

えつと、〇と骸亜は同一人物、それに加えて〇はウラルの人、だけ
どそれだと骸亜はウラルの私より年上だつたはず……、けどそれは
年齢を偽ればどうにか……。（自分なりに苦しい言い訳だなあ）
よつて骸亜＝〇は成り立つ。

「飛鳥……どういづ」と?」

私に抱きついている符養が抱きついたまま聞いてくる。

「あ………は、話すからまずは私に体を擦り付けてくるヤツを
どけてくれない?」

「……わかった。」

符養は鈴を私から引っ剥がし、それに怒つた鈴は符養とじじゃれあい
という名の戦闘を始める。

「2人とも、家が散らかるから外でやつて。」

2人は素直に外に出る。

「で、ぜろ。……「ううん、骸亜。どうしてあなたはここにいるの?」

「……お前は向こうの飛鳥と違つて俺にタメ口とはな。」「だつて、私とウラルの私は別人だから。」

0が苦笑する。

外で2人が暴れる音が聞こえる。
他は何も聞こえない。

「違う世界の自分自身なのに別人発言とはな。」

「だつて彼女も自分の意思で動いてる。私が動かしているわけじゃないし、まずそれ以前に私は彼女に会ったことすらない。……それより話をそらさないで！なんであなたはこっちにいるの？」

「……それはもう少し後に話す。ちょうど邪魔な2人が消えたから行くぞ。」

0は私の手を握り、呪文を唱えようとする。

「ちょっと待つて、どこに行くの！？それより魔力は？」

「つるさいやつだな……。こういうところはあつちと変わらねえな。」

「

0が何かつぶやいたが、聞こえない。

「魔力はさつきマナカブセルをのんで回復させた。帰りはお前が空間魔術を使え。」

「え！？私空間魔術使えない！」

0は無視して呪文を唱える。

「『我の残した大切なものの、そのため我戻る。パラレルジャンプ！』

「

少し下手な詠唱により、また私がクロスに帰つてくるまでの空を飛ぶ感覺におそわれた。

空を飛ぶより、宙に浮いているのに何かに押しつけられている……そつ、急加速したときのようなそんな感覺……と思つていたら、堅い地面の上に立つていた。

「ここって……。」

「ああ、ウラルだ。」

しかも鈴の家の前だつた。

「……あれ？ 鈴の家を知つてるの？」

「ああ。クロスの飛鳥をまたこつちに持つてこないといけなかつたからウラルの飛鳥から住所を聞いておいた。住所さえわかれれば座標指定はできるからな。」

「それより、何で私がまたこつちに来なくちゃ……」「今の自分の体は元々誰のだ？」

「あ……」

そういうえばウラルの私のだつた。

〇は私の返事を聞かず、呼び鈴を押した。

……しばらくして鈴が飛び出してきた。

「骸亜！ それに飛鳥。 なんでここにー？」

出てくるなり、大声で叫んでいた。

私はふざけてこつちの私をイメージだけでだが真似をしてみた。

「あ、あの、骸亜さんがクロスについて……。私嬉しかつた。けど骸

亜さんがまた私をここに預けるって言つ、たツ……」

〇が私にジトコピングしてきた。

「何いきなり変なことしてんのだ。もしかしてこいつちの飛鳥の真似か?……全く似てないぞ。」

「さうよ飛鳥。こいつちの飛鳥なら自分のことを『私』なんて言わないつて言つたはずよ。」

痛恨のミスだつた。

やつぱりアドリブ……即席でやつたのが間違いだつたな……。

「で、骸亜、なんであなたここに!死んだんじゃなかつたの?ていうか……少し背縮んだ?」

「……

〇は黙つていた、どうしたんだろう。

「理由はあとから話す。とりあえずまずは2人の飛鳥の体を元に戻さないといけないから龍を呼んでくれ。」

「……わかつたわ。」

鈴は〇がここにいること以外でも驚いていたようだ。
私は夜の空を見上げて呟いた。

「やつぱりウラルの空もクロスと変わらないな……。」

「おい飛鳥。ここに突つ立つても通行人に怪しまれる(特に俺が)。中に入るぞ。」

と、私も〇について鈴の家に入った。

ここを離れて1時間程しか経っていないはずのことでも懐かしく
思えた。

「骸亜さん！」

私達が鈴に連れられ、リビングに入った時に私が〇を呼んだ。
……いや違う。

私が呼んだのではない、『私』が呼んだんだ。

「ぼく、また会えて嬉しいです。」

「……まだ1時間くらいしか経つてないだろ。」

「でも、また長い間会えなくなるって思っていたんです。」

そこにウラルの私がいた。

声も姿も、鏡を見ていると思えるくらい一緒にいた。

「〇、やつぱりその人がウラルの私？」

「そうだ。こいつがウラルの飛鳥、氷冷飛鳥だ。」

『私』が頭を下げる。

「あ、私はクロスのあなたです。」

私も自己紹介をして頭を下げる。

「よ……よひし……です。」

見た感じ、やはり昔の私を見ているようだった。

飛鳥はどうしたことか〇に寄つていき、〇にしがみついた。
私が〇に涙目でくつづいてるようで恥ずかしい……。

それを察したかの私は私を鼻で笑つた。

体が元に戻つたら私の最強の魔術で葬つてあげよ。

「竜に連絡つけてきたわよ。」

先ほどまで竜さんに連絡をしていた鈴が部屋に入ってきた。

「ああ、助かる。」

「神は？あいつも呼んだ方がいい？」

「それはいい。あいつもは一応まだ喧嘩中だからな。」

「けど神に対し怒つていよいよつには見えないけど？」

「ふつ……、あいつも来ると悪いせい？」

私たちには竜さんが来るまで待つこととした。

「あ……あの、ぼく……」

声がすると思つて振り向いたら『私』がいた。

「は、はい。なんですか……？」

「わ……わた……」

「綿？」

「…………綿つて、ふわふわして気持ちいいですよねー。」

「……はい？」

『私』は顔を真っ赤にさせて部屋を飛び出でていった。0も鈴も畠然としていた。

「あの子……、フワフワしたもののが好きなの？」

「いや、普通くらいだったと思つが……。」

と、白けた空氣にチャイムが鳴った。

「あ、竜が来たのね。」

鈴が玄関まで迎えに行つた。
私とのは取り残された。

「……」

お互い沈黙が続いた。

「ねえ、ぜろ。」

「……なんだ？」

「行きの時言つたと思つけど私、空間魔術使えない。」

「帰りに教える。」

私は少しの腹が立つた。

この人はさつきも後にと言つてその場で教えてくれなかつた。

「そりいえばなんで同じ体のよつたものなのに私とウラルの私の体を戻そうとするの？」

「今のお前はウラルの人間のよつたもんだ。ウラルの人間は魔力を持たない。だから今お前は魔術を使えない。魔術が使いたくないなら話は別だがな。」

「ならなんでその話を今話すの！？行く前に話して私が了承してから行くとか考えないの？」

「お前なら頷くだろ。飛鳥と長年一緒にいたんだ。」

私はそれで今まで溜まつたいた怒りが爆発した。

「だから私はこっちの私と違うって言つたでしょ！」

「…………うるさいやつだ。違う世界の同じ人間なんだ。考えは似たようなものだろ。」

「…………お前、こっちの私にも同じ」と思つてるの？」

「フツ……思つていいわけないだる。お前以外に思えるやつなんていない。」

「こいつに對してものす」く怒つてこるが、今の私の体じゃ返り討ちになつてしまひ。

私は今の自分の無力をこ涙が出てくる。

「どうした？魔術は使えず剣もない、頼りの精靈……今は式神だな。まあそいつらは俺に攻撃してこないよつに飛鳥が言いつけてある。そんな状態のお前が俺にどう攻撃する？俺は剣はないが武術がある。同じ丸腰でも体得してこるものでこいつも差が出るんだな。」

「…………それでも私はお前に一発入れることくいうはできる。」

「ならこいよ。」

私が一歩踏み出した瞬間

「やめてください。」

「飛鳥」がの前に立つていた。

「骸亞さんにはぼくが攻撃させません。どうしても闘いたいなら、ぼくを倒してからにしてください。」

「飛鳥」は闘う気だつた。

〇をかばう「私」を見た時、私は自分の体が「飛鳥」の体だと改めて気づく。

もし〇のまま私が〇に返り討ちになつて怪我したら、その後痛みを背負つのは「飛鳥」なんだ。

「なんか飛鳥す」叫んでたみたいだけじづしたの？」

そこに鈴が竜さんと神を連れて入ってきた。

竜さんと神は〇……骸亞がいるのを見て驚いていた。

「何でもない。〇いつが体が元に戻る嬉しさのあまり発狂していただけだ。」

「そ、うなんだ……。」

鈴が引いた目で私を見てくる。

「鈴、誤解なの……〇が勝手についた嘘なの。」

……と言いたかったが、話がややこしくなるため〇のままにした。

「……飛鳥。」

〇が呼ぶ。

私はこいつに〇一発入れようか考えながら〇に近づく。

〇は私の頭に手をのせ、

「さつきは言ひ過ぎた。確かにお前の言ひどなり、同じヤツりでも考えは違つかもな。……俺みたいに。」

「へ……うん？」

最後に〇が言つた言葉が聞こえなかつたが、私の中の〇に対する怒りは治まつていた。

「おい、骸亜。」

神が〇のところに来ていた。

「お前死んだんじやなかつたのか？どうしてそつちの飛鳥と同じ世界の人間つてことになつてゐる。」

骸亜に質問する神の顔は、昼間見たふざけている人物と別人に見えた。

「……まあ全員揃つたから言つてもいいか。」

みんなが〇に注目し、〇が話し出す。

「俺の本名は『骸亜』だ。だが、ウラルの氷冷骸亜でもある。そして俺の生まればクロスであり、ウラルでもある。」

みんなの頭に「？」が浮かんでいた。

またウラルへ（後書き）

今回で異世界編終わらせるつもりでしたのに、グダグダと続いて終われませんでした……。

最後、ギャグみたくなりましたが、ギャグではありません。ちゃんとども自分も真剣です。

次回いよいよクライマックス！

みなさん、ハンカチの用意は……いらないかな？

水星 たいが
虎 らいが
雷牙

中学2年生

竜の妹と弟で雷牙の方が兄。

2人共クロスの飛鳥と親友である。

よく竜にいたずらをする。

ぼくと私

……正直骸亜以外全く声が出なかつた。
それに気づかないのか骸亜は話を続けようとする。

「俺は……」
「ちょっと待て。」

神が止める。

「いきなり電波なこと言われて混乱してるのでそこから続けられると余計わからねえよ。」

「そういうと思って今からそのことと説明してやる」と思ったんだがな……。」

「確認してからにしろ。説明入れられても混乱して頭じや頭に入らん。」

骸亜は少し黙つた。
そして少し黙つたあと

「もう頭は整理できたか？」

全員が頷いた。
もちろん私も。

とはいっても神が言ってくれなかつたらまだ混乱していただろ。

「続きを話す。俺はこの世にじへ稀な異世界の自分と全てを共有してしまあんだ。」

……やっぱり意味がわからなかつた。

私は……私達はまた説明があると思つて声を出さなかつた。

「つまりだ。俺は記憶、感覚、体、意識を共有したんだ。記憶から始まり、最終的には意識を共有する。」

「その共有はいつから始まつたんだ？」

「書物を見た限り人によつて共有し始める時期も進行スピードも違うみたいだが、俺は……俺達はと言つた方がいいのかな。神、お前と喧嘩して俺が引っ越ししたくらいからだ。ちょうど一年半前か。その時に『二人』の記憶が一氣に流れてきた。記憶を共有つて言つてもわからないと思うが感覚的には見たものが一つあるんだよ。ウラルの飛鳥と話しているのとクロスの飛鳥と話しているのが見えていた。始めは時々ウラルの飛鳥に話さないことをクロスの飛鳥に話していたことも逆もあつたな……。」

骸亜が懐かしそうにしていた。

私も一年前の骸亜……〇を思い出した。

そのとき実際によく会話になつていなかつた気がする。

骸亜は続けた。

「実際に声を聞いたはずがないのにそいつの言つたことや声を知つていて、実際に食べてないのに味を知つていて、殴られてないのに痛みを知つている……。複雑な気持ち、いや、気持ち悪かつたな。次に感覚がそうなつて……。」

骸亜の話は長かつた。

説明だけでも長いのに途中昔話までして余計長くなつた。

昔話の時はウラルの私以外は少しイライラしながら聞いていた。

まあ結論を言つうとこの骸亜はクロスとウラルの2人の骸亜が融合し

た状態で、その体の融合が1ヶ月前……私がヒラブル役所を破壊した直後くらいに起こって、1週間前に完全な融合を果たした、……

とこう感じだらうか？

「以上だ。何か質問は？」

「長い。」

神が手を上げて皆の意見をまとめて言った。

「ああ、それはすまん。途中脱線したりしてな。」

「……あ、そういうばだが、」

竜が手を上げる。

「骸亜、どうしてお前は俺の能力のことにについて知っている。確かに飛鳥にこの能力のことを話したし、実際に使用しているところも見ていて。だがお前は飛鳥から聞いたにしては行動が早すぎや。お前はまるで以前から俺の能力について全部知っているみたいなんだよ。」

そう言わればそうかもしれない。

骸亜が知ったのは多分今日の昼休みくらいだろう。

なんとなくそんな気がする。

昼に竜の能力について知つてその夜実行するためにこじらへるのはいくらなんでも早すぎやる。

骸亜は

「調べたんだよ。無いと思いながらクロスでな。……すげく見つけたよ。まあ見つかったのは類似した内容だつたけどな。」

骸亜は少し疲れたというような顔をした。

私は竜の力について無知といえるほどなので周りのみんなと同じように真剣な顔があまりできなかつた。

骸亜は竜に近づき、

「実はな……」

骸亜が竜の耳に囁く。

竜はそのことを聞き、驚いていた。

横を見ると鈴が少し顔を赤らめていた。

そのときに困惑している「私」をみつけた。

竜は骸亜と話し始め、鈴も神と何か話している。

私はさつき一人が何を想像してゐるのか疑問に思いながらもソファに座つて一人クロスにいる符養や鈴のことを考えていた。

「あの……。」

急に話しかけられて体がビクッとする。

声のした方を振り向くと、「私」がいた。

「な、何？」

「ちょっと違和感を覚えて……。」

「????」

飛鳥は私が意味不明だとわかつたのか慌てて説明した。

「すいません。『ぼく』なのにぼくと全く似てなかつたから……。」

ああ、なるほど。

確かに今の私は彼女と違うと思う。

私は彼女に微笑みながら、彼女に言った。

「私も1ヶ月前まではあなたみたいだった。けど、私の親友が私を
……ぼくを変えてくれたの。」

「……親友？ もしかして鈴さん？」

「そう、あっちの鈴。あの人『堅苦しい』っていうのが今まで
一人称も丁寧口調もやめさせられたの。」

「そういえばぼくも言されました。」

飛鳥は苦笑いをする。

飛鳥に苦笑いを浮かばせる鈴に私は若干だが呆れる。
しかしここか飛鳥は羨ましそうだった。

「けど羨ましいです。ぼく……わ、私もあんな日常す」してみたい
です。」

「意外と馴れるつまらない……むしろ大変だよ？ モンスターとか
と戦わないといけないし。」

「ですけど羨ましいです。明るい性格の私がいて、鈴さんや骸亜さ
ん達とクラスメイトとして対等に話せる、そんな世界……。」

たしかにこっちの世界の私からみたら私の立場つて羨ましいのかな？
どっちかっていうと私はこっちの世界の方が羨ましいと思えるんだ
けどなあ、やっぱり……。

「ぼ……私もそんな風になりたいなあ。」

「……一緒なんだ。」

飛鳥の頭の上から？ マークが浮かび上がる。

「……あ、『」めん。多分なれると思つよ。私達は元々の性格も中身

も似ているんだからね。」「

「え？ あ、はい。」

「ほひ、そこも堅苦しい。」

「あ、」めんね……「めん。」

……私にやらせると言葉が乱暴になるといつか、敬語といつもの自体ができなくなりそうとこいつか……。

後のことばは鈴に事情を話してきつちり指導してもらつた方がいいだらう。

私の喋り方がこいつなつたのもあつちの鈴のせいだから同じ成果が期待できるだらう。

こいつの鈴はお嬢様だからもしかすると今の私より数段きれいな言葉遣いになるかもしねり。

「話は終わつたか？」

後ろを振り向くと骸亜が目の前に立つていた。

もしかしてと思い、周りを見ると鈴や神、竜もいた。

どうやら話を聞かれていたようだ、

「飛鳥、あなたは今の喋り方でも十分だと想つたが？」

「あ……あ、あ……鈴さん……。」

話を聞かれていたのがよっぽど恥ずかしかつたのか（まあ私も恥ずかしいのだが）飛鳥は顔を真つ赤にして言葉にならない何かを發していた。

私はその飛鳥をひとまず置いといて（骸亜にでも任せてもいいかな）、鈴を捕まえ、少し離れたところに連れていった。

「鈴、言い過ぎじゃない？」

「私はただ飛鳥はあのままで良いって思つたから……。」

「けど彼女が明確な意思表示をしたんだよ？参考にならないかもしれないけど私があの状態だった時はあんな風に意思表示した記憶はないよ。いつも人の意見に従うだけだった。」

「……うん、言われてみればあの子も自分の意見を積極的に言つたことなんてなかつたかも。」

鈴は賛成してくれた。

「で？私を説得したのは何か理由があつたからじゃないの？」

「それはね……」

私は鈴に飛鳥の喋り方、性格を変えるように頼み、その理由まで全てを話した。

その本人のところをチラッとみたら、予想通り骸亞に対処された。

「わかつたわ。絶対向こうの私より行儀の良い飛鳥を育てるんだから。」

「ははは……。せめてゲーム感覚でやるのだけはやめてあけてほしいな。」

話も終わつたことだし鈴に戻ろうと提案する。

鈴もOKしてくれて戻るとちょうど飛鳥が立ち直つていたところだった。

「おお、話は済んだのか？」

「ええ。早速本題を進めましょ。」

本題と言われて一瞬何かと思つたがよく思い出してみたら、まだ元

の体に戻つていないと気づいた。

骸亜は飛鳥を竜の前に移動させていた。

私も行かなければいけないと思ったので行く。

「よし、竜はじめてくれ。」

竜が頷き、そして私と飛鳥に手を置いた。

「『イタズラ好きな魂を司る双子の悪魔、飛鳥と飛鳥、二人の魂を入れ替えよ。』」

一瞬体の感覚がなくなり、ふわふわした感覚だけがあつたが、すぐに感覚が体に馴染むような感じがした。

そして、体から魔力がみなぎるのを感じ、やつと私は元の体に戻れたのだと思った。

「竜、さっきのあれは魔術？それとも召喚術？」

さっきまで飛鳥だったためか竜は少し戸惑つていたがすぐに落ち着いたようだ

「いや、あれは俺の能力だ。俺は体に悪魔を宿している。それ以上は俺もうまく説明できないんだ。」

「飛鳥、」

背後から骸亜が話しかけてきた、いい加減背後から話しかけてくるのをやめてほしい。

「あのれ……」

「今から空間魔術の方法を教える。」

いきなり言われた。

確かに教えられないと帰れないが、いくらなんでもいきなりすさまる。しかし、それが〇だと諦める。

多分、骸亜も別れがつらいだらう。

「……どうこいつやつの方なの？普通の魔術とは違うの？」

「ああ、だがいたつてシンプルだ。空間座標……まあ住所でもいいが。それを術式にウラルの言葉で組めばいいだけだ。」

「え、……？」

ウラルの言葉つて……私漢字つてやつをまだ完全に覚えてない。しかも読むことまだできるけど書いたことなんてない。

「大丈夫だ。ここにはウラルの言葉を知っているやつばかりだ。まず俺がお前の家の住所を紙に書いてやるからそれで術式を組め。」

骸亜が紙に文字を書き私は骸亜の手を持つ。

私は骸亜からもひつた紙を見て術式を組もうとする。が、ある声に遮られた。

「待つてください。」

飛鳥だつた。

「あの……その……ありがとうございました。あなたがいなかつたら多分変われなかつたと思います。」

「かもね。けど、私とあなたは同じ『飛鳥』なんだから敬語なんておかしいよ。自分に敬語つて変でしょ？」

あつ……と言つたきり飛鳥は何も話せなかつたみたいだつた。

「骸亜、今度こいつ來たらまたあの田のリターンマッチとこいつが。」
お前、本氣出してなかつたろ?」

「武闘家の技を使わせると絶対にお前は俺に一発当てれないぞ。」

「なら、こつちは神と鈴を加えていいか?」

「……そつすると飛鳥がこつちに加わるぞ。」

骸亜も竜と別れの話をしていたようだった。

「飛鳥、ありがとね。あなたがいなかつたらあの子に養子の話をす
る勇気が出なかつたと思うわ。」

「ふふ、なんかもう会えないみたいな言い方だね。またいつか遊び
に来るしそれかクロスに一緒に行こ。あっちの鈴とも会わせたいし。」

「

各自別れの言葉を交わした。

そして骸亜からもらつた紙……紙を……

「どうした?」

「紙……無くした……。」

骸亜が頭に手を当てる。

骸亜は仕方なく新たに紙に住所を書き、それを鈴に渡す。
次に紙に住所を書いて私に渡す。

「鈴、それが飛鳥のうちの住所だ。いつか来る時にでもそれを見て
来ればいい。飛鳥、術式できたか?」

「あ、うん。」

私は術式を組み、術を発動させる。

「『空間を超える魔力よ、我らをその魔力で飛ばせん。』
メンシヨンー。」

横を見ると、飛鳥が私にか骸亜にかわからぬが微笑んでいた。
しかし一瞬だつた。

私達は空間を飛んでいた。

私は骸亜の手を握つていたが、骸亜は私の手を離した。

「ゼロー。」

「ここいらへんなら俺は自分の家に着ける。心配なら明日学校で俺の
クラスに来い。」

私はそんなつもりはなかつた。

だつて〇を信じてゐから。

やつと地に足がつく。

そこで私が見たのは取つ組み合いをしている符養と鈴だつた。
私はやつぱりあの鈴と似ても似つかないと想つ。

けど、ここが私の帰る場所なんだよね。
この日常が私の普通なんだ。

ぼくと私（後書き）

祝一周年！今まで読んでくれてありがとうございますm（――）m

今回で異世界編完結です。

ですが、いつかウラル飛鳥やその他ウラルの人物のその後の物語を書きたいと思っております。

今回は骸亜についてでも

骸亜 がいあ

ウラルの骸亜とクロスの〇が一人の人間になった状態。

今は一人の体だけでなく、精神も一つになり、完全に一人となつた。

現在クロスの〇の家に住み、武闘家科四年である。

テスト～準備～

「飛鳥、契約して。」
「……は？」

あの異世界へ飛ばされる事件から一週間が経っていた。
あの事件の次の日に何事もなかつたかのようにサン・ルナの修行
があつた。

今、私達は鉄のおじさんから武器を受け取りに武器屋に向かつてい
る途中である。

「ふ、フー？ いきなり何言に出すの？」
「飛鳥が学校に行つたら離ればなれになる……。」
「そりだけど？」
「……私が飛鳥を守れなくなる。」
「う、うん……。」
「……飛鳥、契約して。」
「ちよつと待つて、そこからどう考へたらそつなるのかわからぬ。
そもそも契約つて何？」

符養は「やつぱり飛鳥を守らな」といけど、こいつ顔をしている。
私のやつさの言葉からびくをびくと巡つたらああいつ結論になるのだ
らうか？

「……飛鳥は鈍感。」
「まあ敏感な方ではないことは直観してゐる。」
「契約の意味もわかつてないの？」
「……もしやとは思つてこたけど……？」
「……そつ。結婚。」

……まさかのボケに入つたよ。
しかも符養は顔を赤らめてる。

この子のことだから本気つてこともありえるが……。
しかし、出会つて一週間ちょっとの人間に求婚するか？

「……符養、私にはそんな趣味ないからね。」

「……わかつてゐる。冗談。」

ホッとする。

やつぱり符養にはそんな趣味ないよね。

「……といつのも嘘。」

……前言撤回。

彼女はしばらくの間家に入らせないようになつた。
ところがこの子私がウラルから帰つてきたあとからなんかおかしい。

鈴とも仲がよくなつてゐるし、2人の間に何があつたのだろうか？

「符養、これ以上ふざけると怒るよ？」

「……ごめん。」

「別にふざけるのはいいけど……鈴になにか吹き込まれた？」

「……うん。」

この子が素直な子でよかつた。

今度鈴に会つたら精靈を憑依させて自分の最大級の魔術をお見舞いしてあげようかな。

「……けどやつときは鈴に関係ない。ただ鈴の家で読んだ本に書い

てあつただけ。」

最近符養が鈴の家によく遊びに行くのは読書するためだったのか。私が読む物は大抵学校の図書館とかそういうところにしかなくて買えない本だったからな。

……それにしても鈴、あなた家にどうこいつ本を持つてるの？

「まあ、うちにはあんまり本が無いから、フーが欲しいんだつたら今度買つてあげるよ。」

「うん……。」

鉄のおじさんの店に着くまで符養は自分が買いたい本のことをずっと話していた。

符養が話している本の量を聞くと帰りには両手にいっぱいに本を抱えて帰ることになりそうだった。

とにかく、おじさんの店に入ると鉄のおじさんが剣を鍛えているところだった。

「おお、来たか嬢ちゃんたす。」

「あれ？もう剣はできたって言つてませんでした？」

「ああ、これは嬢ちゃん用の杖だ。」

「杖？」

確かによく見ると剣ではなく杖だ。

しかしほとんどの剣といつてもいいくらいだった。

「今度テストがあるだろ？それでの実技試験で使うものだ。ほら、

嬢ちゃんは魔術科だが武器が杖じゃないだろ?」

私はこの年から剣士科から魔術科に転向したので武器も使い慣れている剣である。

鉄のおじさんは一矢のとしながら続ける。

「魔術科のテストで剣は使っちゃならねえ。だからお前さん専用の杖を作つていいわけだ。剣としても使えるんだから使いやすいと思うぜ。」

「なら、もうできるって言つた剣はいらないんじゃないですか?」

「俺もそう考えたさ。だがこの杖は剣としてはちょっと使いづらくてな。だから普段はそこにある剣を使ってほしいんだ。」

おじさんが指差した方を見ると、剣があいてあつた。

私たちはその剣を取つて使い心地を確かめようとすると。

しかし剣に触れた瞬間、私は確かめる必要が無いと思つた。

この剣は私とともに相性の良い。

符養をみて見ると、彼女も同じ反応をしていたからきっと彼女にも使いやすい剣だったのだろう。

「使いやすいとすぐにわかつたる。」

おじさんが私たちの反応をわかつてていたかのように話す。

「それは嬢ちゃんたちの剣を見て、二人と相性の良いような剣を考えて鍛えた剣だからな。そんな反応じやなかつたら俺が驚いているよ。」

「やつぱり、おじさんってプロなんだ……。」

「……おい、若干遠回しに失礼なこと言わなかつたか?」

「だ、だつて初めて会つたはずの符養が使いやすい武器を作るなん

て刀匠と呼ぶ以外ないですよ。」

「へつ。おだてたつて何も出ねえぞっ！」に初めて来る客が武器を修理してほしいとか武器を作つてほしいとかの注文なんかがよくくるからな。」

私はただただ感心する以外なかつた。

私と符養はおじさんの作業が終わるまで店の裏で新しい武器を試すことにして、

それをおじさんに譲り合つて、

「ああ、なら地下の訓練所でやつてくれ。せーならお前ら以外にも人がいるから良い練習になるだろ。」

それに私は驚いた。

「え？ おじさん、道場とかやつているんですか？」

「違えよ。そこにはお前らと一緒にで俺の客だ。新しい武器が欲しいとか装備の強化・修理といろいろな注文があるんだが、今嬢ちゃんの杖の製作が大変だから順番待ちになつてるんだよ。……まあ俺が杖作りが得意じやないのも遅い理由だがな。」

その言葉どおり、おじさんの店はほとんど剣や防具ばかりで杖は取り扱つていない。

剣みたいな杖だからかよけいに製作が困難になつていてるのだつ。

「ならお言葉に甘えて。」

私達は地下への階段を降りる。すると途中で符養が

「……飛鳥、さつきの話の続きを。」

「え? なんだつけ?」

「……。」

また符養に呆れられた。

しかし符養に呆れられたといつドジャブのおかげで彼女が言いたいことを理解した。

「思い出した。フーと契約してほしいことだつたよね?」

「……。(ノクン)」

符養が無言で頷く。

私は別に彼女が契約してほしいと言つたのを忘れていたわけではない。

ただ、その後の[冗談でその]ことも嘘だと思つていただけだ。だが自分としてはさつき思い出した本を賣つとの話をしてほしかつた。

「……で、フーはどういつ契約をしてほしいの?」

「(ノクン)…婚や……。」

私は言い切る前に無言で、しかも無表情、無詠唱でフレアを放つた。至近距離で魔術を撃たれた符養は放たれる前に回避体制をとつて私の至近攻撃を見事に回避した。

「飛鳥ーさつきのは危ないじゃん!」

符養が自分の感情を出していた。

彼女も自分の感情が表に出たのに気づき、慌てて自分の感情を押し殺す。

だが、今の自分はそんなことに驚いて手を止められない。

私は次の魔術の準備をしながら

「符養、冗談はやめなさいって言ひてるよね?」これ以上やると本題の方も却下するよ?」

「…………ごめんなさい。」

『おー、そんなところでケンカとかすんなよー? やるなら地下でやれ。』

上からおじさんの声が聞こえてきた。
私は冷静になり、符養に改めて聞く。

「で? 本当に契約つてどうこう?」と?」

「…………うん。飛鳥改めて言つね。」

符養は落ち着いているように見えて、落ち着いていなかつた。
その証拠にまた自分の感情を殺すことができていなかつた。
まあ私はその方が可愛くていいと思ひなさう。

「飛鳥、私と召喚契約して。」

「…………え?」

あまりの突然のことにはじめて契約してと言われた時のよつな顔になつていた。

だが、さつきの言葉でその時に符養が「守らないと」という顔をしていた理由を理解した。

「…………」

私は頭を整理するために黙つた。

符養が黙っている私を見て不安そうにしている。

よつやく整理し終えた私は、符養に話を聞く。

「大体予想はできてるけど、どうして召喚契約したいの？」

「飛鳥を守りたいから。」

いつもの「……」といつのもなく、即答された。

符養は続ける。

「……飛鳥を守りたい。あなたが学校にいるとき私達は離れ離れ。その時がすごい心配。だからいつでも私を喚べるよつに。」「フー……。」

「……だから契約して。」

私は迷った。

符養の理由を聞いて私は召喚契約を交わしてあげたいとは思つたのだが、今まで人と召喚契約を交わしたことない。

「……」めん、少し考える時間をお願い。」

今度琴葉あたりに聞いてから考えて符養と契約をするか決めよう。しかし当の符養は、先ほどの言葉で契約を断られたと思ったのかひどく落ち込んでいた。

「……フー。」

「何？」

「私はあなたと契約したくないわけじゃないよ。」

「……ならどうして？」

「……」「めん、それは言えない。言つたらフーを傷つけると思つか

なんとなくそう思った。

符養はまた落ち込んでいた。

……私は一体どうすればいいのだろう？

まあそんな話をしても進まないので、私達は地下へ降りた。
そこにはいろいろな人たちが各々いろんな人たちと手合わせしていた。
私は長年おじさんの店に通っていたが、こんな地下施設があるとは思わなかつたので、このスケールをみて改めて驚く。
と、感銘を受けていると遠くから聞きなれた声が聞こえてきた。

「あ、飛鳥つちだ。」

声がする方向と逆の方へ行こうとする。

「何で逃げるのさあ。」

「フー、今はあの変な人と関わってはいけないよ？」

「……？」

声の主は私を追いかけながら詠唱を唱え始める。
私もそれを迎撃するために詠唱を始める。

「『魔力でできた鎖、我の意思に従い我の支持する者を捕らえよ
バインド！』」

「『聖なる盾、全てを跳ね返せる盾、我を守る強靭な盾よ、今我を
襲つものを跳ね返せ！ リフレクトシールド！』」

鎖が飛んでくるが、私が出した盾で跳ね返す。

そして魔術を出した本人に鎖が巻きつき、術者自身が捕らえられた。私は完全に動けないのを確認すると、彼女の元へ歩み寄った。

「……声かけただけでいきなり逃げて、そのつえ私を捕まえるってどうこ ciòこと？」

「鈴は絶対私やフーに飛びついてくるじやん。あと、捕まえられたのは自分が魔術を出したからでしょ？私はそれを守つただけ。言うなれば正当防衛よ。」

「ふー。」

私は仕方ないので鈴の鎖を解除してあげた。
解放された鈴は起き上がりながら、

「飛鳥つちはぢいじこにいるの？」

「鉄のおじさんが今私のために杖を作つてて、それを待つていると
ころ。ちょうど新しい武器も手に入つてそれを試すのも兼ねてだけ
ど。鈴は？」

「私？私も上の魔術武具店で買った新しい杖を試すためだよ。」

魔術武具店？と思ったが、すぐにその驚きは納得に変わった。

私達が降りてきた階段以外にも階段があつたのだ。
つまり、ここはいろいろな武器屋が競合して造つた新しい武器を試
す施設なのだ。

「飛鳥つち、手合わせしてくれない？」

「え？ いいけどフーが…。」

「あれ？ 飛鳥じやん。」

声がした方を向くと、琴葉がいた。

琴葉も武器を新調しに来たのだろうか？

「何？飛鳥の新しい武器今日できたの？」

「うん。これす””に私に合うんだよ。」

「使ったの？」

「ううん、はじめてこれに触った瞬間感じたの。」

「へえ～。そういう風に感じれるってことはその武器を作った人、すごい腕のいい人なのね。」

改めて私はおじさんがすごい人だと知った。とそのとき、私はとあることを思い出した。

「琴葉、ちょっと話があるんだけど。」

「？ 何？」

「ちょっと呪喚に関する」となんだけど。」

「呪喚」という言葉を聞いて、符養がハツとした。

しかしそのことは私だけが気づいたようで、他は何の反応もしていなかった。

「だからちょっと向こうで話せない？」

「え？ うん。いいけど？」

「飛鳥っちー！ 私との手合わせはひとつするんだよーー！」

「ちょっと戻つてくるまでフーとやつてて。フー、いいよね？」

符養は無言でうなづいた。

しかしその顔は他の人には無表情にも見えるだらうが、嬉しそうに見えた。

私と琴葉は人が少ないところへ来た。

「で？ 話つて何？ 召喚のことなんでしょ？」

「……うん。 フーが私と召喚契約して欲しいって言ったの。」

「符養が！？ けど人との契約なんて聞いたこと……。」

「うん。 それについて聞こうと思ったの。 契約法に人と契約してはいけないと書いてあるの？ それか人と契約したら何か人体に影響とかあるの？」

契約法とは召喚契約するためのルールみたいなものである。

琴葉は思いつめたような表情で言った。

「前者は何にも書かれていないはずよ。 多分人と契約するなんて考
えてなかつたと思うから。 後者については私からは何も言えない。
前例が無いもの。 もし契約するなら符養に何かしら影響があると思
つて。 運が悪いと彼女、死ぬわよ。」

私はそれを聞いて覚悟が揺らいだ。

もし、契約をして符養を喚んだ場合、符養が死ぬかもしないとい
う不安が起こつた。

琴葉はそんな私を見て私をフォローしてくれるようにこう言った。

「さつき言ったことは私の考えだし、確立は低いと思うわ。 もしそ
んなことが起こるなら他の召喚獣にあるはずだから。 彼らも生き
物だもの。」

「……本当？」

私がだした声は涙声だった。
しかも涙目だった。

「うん。」

「琴葉、変な心配をさせて『ごめん。』

「いいわよ。私も力になれなくて『ごめん。』

「じゃあ、戻ろっか。」

テスト～準備1～（後書き）

今回からは結構長い話になると想ひます。
「なると思つ」というのは自分が面倒くさがつて、短くしてしまい
そうだからです。
そんなこと絶対にさせませんけどね。

さて、今回の話ですが、いよいよ来ましたよテスト。
一年やってやつとテスト……いいですね～一年以上の間があつての
テストって……。

自分もそんな学生生活を送つてみたいです。

とはいえストーリー上では新学年から一ヶ月ですから現実でいう中
間テストみたいなものになると思うんですけどね。

まあですけどこの学校では年に三回程しかテストをしません。

理由は単純で細かくやつても生徒の戦闘力なんてそんな短期間で伸びるわけないからだそうです。

だからって今回テストの話をして、さうにいつかまたテスト回をやるというわけではないです。

なんかいつもより長くなりましたがね。

今回はこれにて

テスト／準備2／

私は符養たちの下へ戻る途中に琴葉からこう言われた。

「飛鳥、せつかくここに来たんだから私と戦わない？」

「でも私、先に鈴と手合わせする約束してるし……。」

「うん、そうかあ。……なら、符養もいることだし、S2のタッグマッチしない？」

「いいけど私と手合わせしたい琴葉と鈴で組むことになるけど？ 知り合つたばかりなのに大丈夫？」

「あ、あの人は、それはちょっと厳しいかも。那人自由人っぽいからさ。」

わかる、と思った。

あの人は自由すぎて呆れるほど自由人だ。

「なら1人ずつ私と戦る？」

「うん、大丈夫。那人魔術科トップの鈴でしょ？ なら頭良いしうまく作戦をたててくれるでしょ。」

そういう話をして私達は残つた2人のところへ戻つた。

手合わせしていた鈴と符養は互角、鈴の方が少し上くらいの戦いで、鈴の魔術を符養は避けて間合いをつめて斬りつける。

鈴はそれを当たつてるんじゃないかと思うくらいストレスでかわしかわしながら詠唱した下級魔術を符養に当てた。

当たつた符養は後ろに吹き飛ばされ、倒れたがすぐ起き上がる。

そして符養も術と術の合間に全く無いくらいの早さで魔術を連発す

る。

しかし鈴は防御魔術で防御した。
……そこで私が止めた。

「はい、そこまで。2人とも良い戦いだつたよ。」

「……飛鳥。」

「あ、飛鳥つち。短時間だつたはずなのにすごい疲れたよ。」

「……鈴が本気できたら私も全力で戦うしかなかった。」

「私も少しでも手を抜いたら負けるつて思ったもん。あ～、もう動けん！」

と言つて鈴は床に仰向けになつた。

私は鈴と符養に回復魔術を使いながら

「なら私との手合わせやめる？」

「やる。」

「わかった。」

私は鈴と符養に手合わせの方式を伝える。

鈴と符養はすぐに了承し、鈴は早速琴葉と作戦会議を始めた。

「そういうえば

ふと疑問に思う。

「剣とかで人を斬つても大丈夫なの？」

「ああそれはね」

作戦会議中の鈴が会議を一時中断して話す。

「『』は特殊な魔法で武器や魔術の威力を弱めてるの。だから人体を真つ一つに斬るくらいの威力でも軽傷ですむし、『』での最悪の怪我は骨折だつて言われてるの。」

「へえ。」

私は感心するしかなかつた。

会議が中断されるた隙を狙つていたのか琴葉が私に耳打ちした。

「飛鳥、あなた精靈は使うの？あと鈴はそのこと知ってるの？あなたの対策で精靈をのこと全く話さないけど。」

「『ごめん、話してない。』こういうことはあんまり人に話したくないの。精靈を使える召喚士サモナーなんてすごい珍しいから。だから人前では私は使わない。」

「わかつた。なら私もグランは使わない。」

と言つて2人はまた作戦会議に入つた。

「……飛鳥、私達は？」

「とりあえず、琴葉から助言もらつて人と召喚契約しても大丈夫つてわかつた……多分だけどね、から召喚契約しようつか。」

それを聞いて符養の表情が一気に明るくなつた。
私は召喚契約の準備をして符養と契約を結ぶ。

「『』符養、汝を契約者飛鳥と契約させ、契約者を守れ。』マスター
「絶対にこの約束を破らない。」

符養が私と手を合わせ、魔法陣が出現し、すぐに消えた。
私と手を合わせている符養の手は私の手を強く握つていた。

そこまで私と契約したのが嬉しかつたのだろう。

「符養」

「何?」

「人を召喚することは前例がないみたいだから、もし体調が悪くなつたりしたら言つてね。……それは普通の生活の上でもか。」「うん、わかつた。」

無口な少女は私に満面の笑みで微笑む。その笑顔に私は少しどキッとした。

「お熱いねえ。」

その言葉に振り返ると、鈴と琴葉が一ヤ一ヤしていた。

「もう2人とも結婚しちゃいなよ。」

「私にそつちの趣味はないから!」

「わかつてゐるつて。冗談、冗談。」

呆れながら横の符養を見たら、彼女は顔を赤らめていた。

……この子、ここへ来る前のあの言葉はまんざら驥でもなかつたな。

「それじゃあ、開始しましょうか。」

その言葉を琴葉が言い終えた瞬間、鈴が魔術を放つてきた。

「『大気に渦巻く風の竜巻、その風は刃と変わり人々を切り裂かん

トルネード!』」

「フー、後ろに下がつて。『邪悪な闇よ、仇なす者を闇に飲み込め

!!』『ダークゾーン!』」

闇へと続く穴は竜巻を全て飲み込む。

竜巻が消えた瞬間に琴葉のムシャが私に切りかかる。

しかし同時に符養も駆けていた。

「……『アイシア』。……『氷月閃』」

氷の魔術を自身の剣に込め、その氷をまとった斬撃を放つ。ムシャはそれをくらい、よろめく。

そこに私が剣で斬りつける。

「『刹爪』」

居合い斬りなのだが、一回の居合いで五回斬れその斬れば獸が爪で切り裂いたようにも見えた。

それをノーガードで受けたムシャはダウン。

「『バインド』」

しかしその隙をみた鈴が私に拘束魔術をかけようとする。が、それにいち早く気づいた符養が身代わりになる。

「フー！」

「私の心配はいい。それより他の攻撃が来る。」

次の瞬間ゴーレムのパンチが私にくる。

私はどつさに避けようとしたが、反応が遅かったため避けきれなかつた。

私は一、二回地面に叩きつけられながら十数メートル飛ばされた。

私は痛い体を起こし、立ち上がる。

追撃はこない。

「……」

私は状況を確認する。

符養は捕らえられ、実質2対1。

多分琴葉が召喚獣で引きつけて鈴が魔術で攻撃するとかそういう作戦だろう。

しかし鈴のことだ、他に作戦を練っているだろう。
だがそんなこと考えている暇はない。

「『異空間の門、敵を捕らえ異空間へ閉じ込めよ。 ゲート』」

何もないところから扉が開き、琴葉の「コーレムを扉の中へ吸い込んだ。

「な！？」

「何？これ？」

2人が困惑する。
無理もないだろう。

これは空間魔術、つまり2人はこれについては無知に等しいのでオリジナル魔術を使われた時よりどういった魔術かというものが判断するのに時間がかかるのだ。

私はその隙を狙つて更に魔術を唱える。

「『ネガティブボール』」

スピリチュアルストーン
精霊石の効果を使って詠唱破棄で魔術を放つ。

私の剣に使われた精霊石は闇属性と光属性を持つているようで、私

得意な光と闇の魔術なら詠唱破棄で唱えられる。

だが普通に詠唱したほうが威力は高い、しかし隙は一瞬だから詠唱する暇などない。

闇に染まつた漆黒の玉が私の前から放たれ、鈴達の目の前で爆発した。

2人とも吹き飛ばされ別々に飛ぶ。

私は更に詠唱をするが今度は魔術ではない。

『『^{マスター}契約者飛鳥が命ずる。我と協力し、敵を倒せ。 符養』』

縛られていた符養が縄を残して消え、私の前に現れた。

「……飛鳥、ありがとう。」

「フー、琴葉をお願い。今なら召喚獣がいないから召喚する前に初撃を入れれば後は楽だと思つ。」

「……わかった。」

そう言つて符養は琴葉に向かつて行つた。

さて、私は鈴を倒さないと。

私が鈴が飛ばされたところに着いたとき、鈴が立ち上がつたところだつた。

「飛鳥、まさかあんな空間魔術も使えるようになつていていたなんて。

ただ異世界同士を行き来するだけかと思つてたのに。」

「自分で言つことじやないけど私の応用力なめないでよ?」

「なら飛鳥つちも私の分析力なめない方がいいよ?」

私たちは同時に行動を開始した。

「『『『硬き岩の壁よ、敵から我を守り敵を押し潰せ
ウォール』』』

目の前に岩の壁が現れ、それが相手自掛けて突進した。
私は「術を唱えたあとすぐに別の術の詠唱に入った。

「『『逆巻く炎、相手を包み込み焼き殺せ
グレン』』」

2人が放った岩の壁がぶつかり崩れる。
そして、火柱が鈴を包み込んだ。

私はそうなったあとすぐに鈴に向かつて走り出す。
崩れる岩が時々当たるが気にせず向かう。

「『『風よ切り裂け
ウインド』』」

その時に私は小声で魔術を詠唱しそれを剣に溜めた。

「『『スプラッシュ』』」

鈴が水の魔術で火を消していた。
鈴の周りから水が吹き出しているので鈴の姿は見えない。

「『『刹爪・疾風』』
せつそう・はやて

刹爪だが、斬撃が鎌鼬となつた。

それは鈴のいたところとその奥までを切り裂いた。
しかしそこに鈴の姿はなかつた。

「しまつた！」

私は上を見上げた。

鈴は水の魔術を使って火を消したのではなく、こうなることを予測して水の勢いで空中に飛んだのだ。

鈴は私に気づかれた時にはとっくに詠唱をし終えていた。

「『プレス』」

大きな岩の塊が私に降つてくる。

魔術では防御に間にあわないと思った私は別の魔術を使う。

「『飛べ ジャンプ』」

私は岩が当たらないところへ瞬間移動した。
だが、ここまでかもしれない。

空間魔術は空間を超越する魔術なので、簡単な術でさえも魔力の消費が激しい。（しかし、異世界へはなぜか通常の魔術を使った時くらいの魔力しか消費しない）

しかし私には剣術がある。
それだけでも勝てるかもしれない。

私は空中から降りてくる鈴が地面に着地すると同時にぼどのタイミングを考えて走り出した。

鈴は私が走つてくるのに気づき、慌て術を詠唱し始める。
しかし遅い、私が一瞬早かつた。

「『連牙翔龍迅』」

れんがじょうりゅうじん

龍の形をした斬撃を何度も撃ち、最後に剣を思いつき振り下ろす。
鈴は攻撃をモロにくらつた。

……と思つたが

「飛鳥、さつきのは効いたよ。私もこれを止められなかつたら完全に負けてた。けど成績のいい術師は召喚獣や魔術が使えなくとも何かで力バーするんだよ。」

鈴が横目で符養達のところをみていたので私も見る。符養は琴葉に召喚させていなかつたが、琴葉自身が符養と戦つている。

「琴葉も私もいざという時のために素手での戦闘訓練をつんでたのまあ、琴葉がそれをしていたことは意外だつたけどね。そのおかげで予想していた作戦よりいい作戦になつたけど。」

私は剣を持つた鈴を蹴つて手を放させ、鈴から離れる。まずい、このままじゃ負ける。

私は使いたくなかったが、魔術を使う。

「『自然に存在せしマナよ、我に恵みを、力を。我、その恵みを受けん ムーンライト』」

自然のマナが私の魔力を回復させていくのがわかる。よかつた……、成功した。

「……な、何？その魔術？」

鈴が驚いた表情で私に聞いてきた。

「私が開発中だつた魔力を回復させる魔術。回復魔術から応用してみたんだけどなかなかうまくいかなくて……。さつきは一か八か賭けてみたんだけど予想以上の成功だつたよ。魔力全快なんて。」

「賭けて……。ふふふ、飛鳥つちらしいや。」

「言つたでしょ？私の応用力をなめないでつて。」

戦いが再開される。

魔力全快になつた私には策がある。

私は詠唱をはじめながら、そのまま鈴に突撃していく。。

詠唱する、転送能力を失わせた私の最強の魔術を。

さらに詠唱しながら鈴に剣を振つていく。

「『世界を支える自然の力、火・水・地・風・雷・氷・光・闇、万物の力宿りしこの魔術仇なす者全てに制裁を加えて、その他の者に聖なる加護を与え癒やしの力をもたらせ! エレメントエイト』」

「それって……」

「威力がケタ違いだから使いたくなかったけど、やっぱり全力でやらないとあとで怒られると思ったから。」

「……何かを制限してるらしいけどその時点で全力じゃないじゃん。」

「

各属性の光が訓練所全体に広がる。

そこで私の意識は途切れた。

多分大量の魔力を一気に消費したから一時的に魔力不足と同じ状態になつたのだろう。

私が目覚めた時私はベッドで寝ていた。

「あ、起きた？」

琴葉が私の視界に見えた。

「大丈夫だった？あんなすごい魔術使えるつてやつぱり飛鳥はすいよ。」

「……他の2人は？」

「……」

そう聞いた瞬間琴葉は俯いて何も返してくれなかつた。
表情がみえない。

その反応から私は最悪の光景を想像してしまつた。

「まさか……。」

「飛鳥、気をたしかにしててね。」

琴葉の口がゆつくり動く。

「符養なら、あなたの右隣にずっといるわよ。」

「ずっと」「らへんから笑いながら言つた。

……つてええ！？

と、思い私の右隣をみると、符養が私に寄り添う感じで寝ていた。

「で、鈴ならあなたの左隣で寝てるわよ？……もしかして本当に気づいてなかつた？」

左をみると鈴が寝ていた。

よく見たら怪我をしている。

「この傷……」

「魔法で弱まつていたとはい、あんな魔術をモロに受けたからね。
けど軽傷だから心配ないつて。」

「そう……。」

「せつかもで起きてたんだけどね、既にって言つて寝りやつたの。」

安心した。

一応そこまでひどい被害はないみたいだ。

「……せつこえば」

「ん?」

「じじじいへ」

琴葉が呆れた顔をした。

「琴葉?」

「飛鳥、今更それを言ひへ?」

「ちよつと動搖してて……。」

「……はあ……。」

琴葉が溜め息をする。

私そんなに天然?

「……うん、天然。」

「……フー、普通ならいつ起きたか聞きたいとこりだけどまあなんで

私の心を読めたのかな?」

「……」

黙つた。

まあこのことについては深くは聞かないでおいへ。

「ていうか琴葉、じじはじんなの?」

「ああ」めん。2人の掛け合いが微笑ましくて言つタイミング失つてた。」

……今度は私が溜め息したくなる。

「で、ここがどこかって言うとね、……飛鳥の家。」

「…………え？」

……自分の家だとわからなかつた自分が恥ずかしい。

テスト～準備～（後書き）

なんかいつもよつと長くなりそうだったのに、一からへんで区切りせました。

次回はとある理由で更新が遅れるかもです。

ネタにつまつたわけではないことだけは言つておきます。

この話については大体は考えていますので話題連で遅れる場合はそれの内容に関してだと思います。

あれ？ それもネタにつまつたっていうんですかね？

まあ今回ばかりのへんにしておきます。

なるべく更新を遅らせないよつと頑張つてみます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7437m/>

クロスウェポン

2011年9月25日12時00分発行